2013 年度　修士論文

無関心型および過敏型自己愛傾向と攻撃性との関連
―外向・内向攻撃性および個人の内的過程に着目して―

弘前大学大学院 教育学研究科
学校教育専攻 学校教育専修 臨床心理学分野
11GP108　蛭田陽子
(指導教員　田名場忍)

目　　次

はじめに　本論文の構成　1

第 1 章　研究Ⅰ：自己愛傾向をめぐる概念の検討　2

第 1 節　問題と目的
第 2 節　理論的側面における自己愛の健康性と不健康性についての検討　3
2.1.　自己愛の不健康的側面
2.2.　自己愛の健康的側面
2.3.　自己愛の健康的側面と不健康的側面
2.4.　Kernberg と Kohut の自己愛論の異同
2.5.　理論的側面からの検討を総括して
第 3 節　現象像的側面における自己愛の諸相についての検討　12
3.1.　自己愛の 2 つの現象像
3.2.　パーソナリティ障害としての自己愛
3.3.　パーソナリティ傾向としての自己愛
3.4.　現象像的側面からの検討を総括して
3.5.　自己愛傾向の健康性と不健康性に関する先行研究の知見
第 4 節　自己愛の概念の整理　18
第 5 節　まとめ　21

第 2 章　研究Ⅱ：自己愛傾向と外向・内向攻撃性との関連　22

第 1 節　問題と目的
1.1.　攻撃性とは
1.2.　自己愛傾向と攻撃性との関連
1.3.　自己愛傾向と攻撃性の測定尺度
1.4.　目的
第 2 節　研究 1　28
2.1.　方法
2.2.　結果
2.3.　考察
第 3 節　研究 2　32
3.1.　方法
3.2.　結果
3.3.　考察
第 4 節　今後の展望　44

第 3 章　研究Ⅲ：自己愛傾向に着目した攻撃性喚起場面における内的過程の探索的検討　46

第 1 節　問題と目的
1.1.　無関心型および過敏型と外向・内向攻撃性，怒りの原因帰属，対人場面
1.2.　目的
第 2 節　方法　47
2.1.　調査協力者・調査時期
2.2.　手続き

2.3. 質問紙調査の構成
2.4. 面接調査におけるワークシートと半構造化面接質問項目
第 3 節 分析方法と結果 50
3.1. 質問紙調査の分析方法と結果および調査協力者の自己愛傾向と攻撃性の特徴
3.2. 面接調査の分析方法と結果
第 4 節 考察 58
4.1. X の自己愛傾向および攻撃性の特徴と攻撃性喚起場面における内的過程について
4.2. Y の自己愛傾向および攻撃性の特徴と攻撃性喚起場面における内的過程について
4.3. 自己愛傾向および攻撃性の特徴と攻撃性喚起場面における内的過程との関連について
第 5 節 まとめと今後の展望 61

第 4 章 総合考察 62
第 1 節 研究Ⅰにおける知見
第 2 節 研究Ⅱにおける知見 63
第 3 節 研究Ⅲにおける知見 65
第 4 節 本研究の総括と今後の展望 67

要 約 68
引用文献 69
付 録 73

付 記

この論文の第 3 章では調査協力者の承諾の元に個人の事例を取り扱いましたが，「弘前大学学術情報レポジトリ」では承諾に伴う守秘義務を遵守するために，該当章の第 3 節と第 4 節の一部を削除いたしました。削除された部分の閲覧を希望される方は，下記にお問い合わせください。

<お問い合わせ先>
弘前大学大学院 教育学研究科 臨床心理学分野
〒036-8560 弘前市文京町一番地
℡ 0172-39-3939
E メール(お問い合わせフォーム)
http://siva.cc.hirosaki-u/ac.jp/web/info/index.html
あるいは右記 QR コード

はじめに　本論文の構成

近年，主に青少年の対人関係や社会生活上の諸問題，あるいは，いわゆる新型うつや犯罪など，多様な現象が自己愛との関連から議論されることが多いようである。特に，自己愛と攻撃性との関係については，現代の「キレる」若者に肥大した自己愛がみられることが随所で指摘され(中村,2004; 松並,2013)，そうした若者の対応には自己愛の傷つきと自己愛的憤怒の概念を取り入れた理解が必要である(ウォルフ,1988; 安村・角田,2001)とも言われている。このことから，現代にみられる青少年の攻撃性を自己愛の視点から理解し，対応の糸口とすることには，一定の意義と必要性があると考えられる。

ところが広範な領域で用いられるに伴い，自己愛の概念は複雑化し，その定義に混乱が生じているようにも見受けられる。自己愛と攻撃性との関連を検討する前段階として，先行研究ごとの自己愛の定義を明確にしながら種々の知見を整理し，総合することで，より適切な自己愛の定義に接近することができるだろう。そこで，本研究第 1 章の研究 I では，調査研究に先立って，先行研究の知見を踏まえ自己愛の概念を整理する。その上で，第 2 章の研究Ⅱでは，自己愛の主要な問題の 1 つである攻撃性と，非臨床群の自己愛傾向との関連を調査し，検討する。その際，研究 1 では双方の関連を詳細に検討するため，自己愛傾向を 2 つの現象像に，攻撃性を外向攻撃性と内向攻撃性に分けてとらえる。加えて，研究 2 では，外向攻撃性と内向攻撃性の下位尺度についても，自己愛傾向との関連を検討する。さらに，第 3 章の研究Ⅲでは，自己愛傾向の 2 つの現象像と外向攻撃性および内向攻撃性との関連を，個人の内的過程に着目して個別に検討する。その際，質問紙調査で個人の自己愛傾向と攻撃性の特徴を描き出した上で，攻撃性喚起場面とその際の気持ちや行動の変遷を，ワークシートと半構造化面接によって調査する。また，質問紙調査の結果を調査協力者に提示して感想を求めることで，攻撃性喚起場面を検討する際の資料の一つに加える。

なお，上記の文中では便宜上パーソナリティ傾向としての自己愛を自己愛傾向，自己愛の 2 つの現象像を無関心型，過敏型と記載したが，それぞれの概念についても複数の見解があり，検討が要される。そのため，以下では改めてパーソナリティ傾向としての自己愛，oblivious 型, hypervigilant 型と表し, 概念を整理する中で再度表記を定めたい。また, oblivious, hypervigilant という表現は Gabbard(1994)を引用しており，現象像という表現は相澤(1999)を引用している。各用語の定義についても後に触れるので，参照されたい。

第 1 章　研究Ⅰ：自己愛傾向をめぐる概念の検討

第 1 節　問題と目的

自己愛(narcissism)は臨床水準の様々な精神疾患から，近接水準でみられる種々の適応困難，さらに非臨床水準のパーソナリティ傾向およびメンタルヘルスに至るまで幅広い領域に用いられている概念である。それぞれの議論の発展に有益な概念であるために多用されると考えるが，一方で言葉の意味するところに曖昧さや違いが生じているようにも見受けられる。そこで，本研究では始めに先行研究の知見から自己愛の概念を整理したい。整理に当たって，まずは自己愛を理解する視点に理論と現象像の 2 つの側面を設定する。それぞれの定義は相澤(1999)から引用する。相澤はナルシシズム(本研究における自己愛)を「精神分析的，深層心理学的精神力動論」と「現象学的，精神病理学的，記述精神医学的側面」の 2 側面から整理している。前者は「仮説的な精神分析学的心理力動」である。現象像とは後者の自己愛であり，「外部から観察可能な行動特徴や内省により把握可能な心理状態」である。本研究ではこの 2 つの側面に加えて，次の 3 つの視点に焦点を当てて検討を進める。

1 つは自己愛の健康性と不健康性についてである。自己愛は健康的な概念なのか，不健康的な概念なのか。多々ある自己愛論をみても，研究者によって立場が分かれている。文献等でも表現が分かれる，あるいは判別しにくい場合がある。調査研究では，精神的健康を示す諸変数(自尊感情や自我同一性)と不健康を示す諸変数(攻撃性や抑うつ感)のどちらとも関連が指摘されている。このように，健康的自己愛と不健康的自己愛の識別に混乱が見られるので検討する。なお，以下では自己愛の性質を指す場合に自己愛の健康性，不健康性と記し，それぞれの性質を備えた自己愛を指す場合に健康的自己愛，不健康的自己愛と記す。また，自己愛に健康性と不健康性が包含されることが想定される場合には，自己愛の健康的側面，不健康的側面という表現を用いたい。

さて, もう 1 つの視点は臨床水準と非臨床水準における自己愛の現象像についてである。自己愛に関して何らかの治療を要する人としない人，あるいは自己愛性パーソナリティ障害(Narcissistic Personality Disorder; 以下 NPD)とパーソナリティ傾向としての自己愛の異同をどのように理解すべきか検討する。たとえばパーソナリティ傾向としての自己愛が高まると NPD に至るのだろうか。反対に，低ければ低いほど健康的なパーソナリティと言えるのだろうか。また，NPD の診断基準こそ満たさないものの，精神疾患の背景に顕著な自己愛の問題が指摘される事例もしばしばみられる。この場合，自己愛の問題は臨床水準に達していると判じてよいだろうか。議論はいよいよ混線してくるように思われるが，自己愛の概念を整理する際に有用とも考えるので，こうした例にも触れておきたい。そのため，以下では臨床水準の自己愛を NPD のみならず「自己愛に関して何らかの治療を要する様態」と位置づけて検討を試みる。付随して，現段階では自己愛の現象像とそれに関する諸問題(精神疾患や適応困難, 問題行動など)を, 臨床, 非臨床の水準を問わず自己愛の問題と記す。また，臨床水準で自己愛の問題を呈する現象像を，臨床像と表す。以上，2 つめの視点は，1 つめの視点と密接に関わる視点である。

次の視点はGabbard(1994)によるところの周囲を気にかけないoblivious narcissistと周囲を過剰に気にかける hypervigilant narcissist の相互関係についてである。自己愛の問題を抱える人の認知や対人態度などは，およそ 2 つの現象像に収束するとされる。すなわち自己愛の表われ方(以下, 現象像)によって oblivious か hypervigilant に分類されることが理論研究においても調査研究においても繰り返し指摘されている。ところが 2 つの現象像は，多くの人に混在し，その比重も人によって異なるとも指摘されている。表現型はどのように決まるのだろうか。健康的，不健康的な現象像はあるのだろうか。この点は本研究における後の調査的検討でも重要な問題である。

以上の側面と視点から自己愛の概念を整理する。始めに，理論的側面から自己愛の健康性と不健康性について検討するため，諸説ある自己愛論の中から Freud，Kernberg，Kohut の理論を概観する。次に，現象像的側面から，臨床水準の現象像について Gabbard が示した自己愛の 2 つの現象像を取り上げる。また，臨床水準と非臨床水準の現象像として，NPD とパーソナリティ傾向としての自己愛について検討するため，アメリカ精神医学会による診断基準と Raskin&Hall による質問紙を取り上げる。その上で，先行研究における双方の現象像に関する知見を精神医学と臨床心理学の側面から概観し，臨床水準と非臨床水準の異同について検討する。最後に，検討の内容をまとめて自己愛の概念を改めて位置づける。

第 2 節　理論的側面における自己愛の健康性と不健康性についての検討

自己愛の最も基本的な意味は自分を愛すること(小此木,1989)とされる。自己愛が健康的であるのか不健康的であるのかについての議論は, Freud が自己愛の概念を提唱して以降連綿と行れてきたが，現在のところ包括的かつ一貫した結論は得られていない。以下では自己愛の不健康性を主張する立場として Freud の理論を概観し，健康的側面を主張する立場として Fromm や Horney の理論に触れる。そのあと，不健康的側面と健康的側面が別個のものであるとした Kernberg の理論と双方の連続性を主張した Kohut の理論を概観して，理論的側面から自己愛の健康性と不健康性について整理する。

2.1.　自己愛の不健康的側面

Freud の自己愛論

自己愛について初めて体系化した理論を提唱したのは Freud(1914 懸田・吉村訳,1991)である。Freud は自身が創始した精神分析学において，身体活動に身体的エネルギーが必要なように，心的活動にもエネルギー(精神的エネルギー)を仮定することによって，人間行動の力動的なメカニズムを明らかにしようとした。そこで設定されたのが，性欲動を意味する精神的エネルギーを示す概念，リビドー(libido)である。Freud によれば愛はリビドーの発現であり，自己と他者，どちらにも向かい得るものである。この際，自己に向かうリビドーは自己愛，他者に向かうリビドーは対象愛(object love)と称される。自己と他者に向けられるリビドーの総和は常に一定で, 自己愛と対象愛は対照的なものとされる。また自己愛は，対象愛へ至るために克服されるべき前段階であるとも考えられている。

そもそも自己愛は自我が確立し，それがリビドーの対象となることによって成立する。しかし人は発達の初期において，自己と外界の区別は元より，自我の確立もなされていない状態にある。この時期には自己の身体部分のみが満足の源泉となる。これを自体愛(auto eroticism)といい，自己愛から対象愛へ至る過程の始発点の段階となっている。続いて，次第に自我が確立するものの，自他の心的な区別はついていない状態が成立する。この時期には自己と外界が一体であるので，いわば無制限の自己に対してリビドーが向けられる。これを一次的自己愛(primary narcissism)といい，対象愛への前段階となっている。さらに発達が進むと，自己と外界は分化し，リビドーは外界の対象へと向けられるようになる。これを対象愛といい，リビドーの発達における最終段階となっている。このように Freud の理論では，自体愛から一次的自己愛を経て，対象愛へ到達することが健康的な過程であるとされている。ところが統合失調症などにより，外界の対象からリビドーが撤収し，再び自己へと向かうようになる場合がある。対象愛が成立し，一次的自己愛から脱却した後に，再度自己愛の段階へ立ち戻るこの状態を，二次的自己愛(secondary narcissism)という。Freud は二次的自己愛が対象愛からの退行であり，不健康的な状態と規定した。なお，一般的に知られている自己愛はこの状態を示しており，Freud が理論上問題としたのもこちらの概念であるため，以降は二次的自己愛を単に自己愛と記し，不健康性を備えるものと位置づける。

2.2.　自己愛の健康的側面

Fromm や Horney の自己愛論

自己愛を不健康的な概念と規定する立場に対して，多くの研究者から対象愛も可能とする健康的な自己愛(Fromm,1956; Horney,1967 など)の概念が主張された。すなわち，自らへの精神的エネルギーの備給は人間の精神生活に必要な働きであり，この働きがただちに対象愛を阻害する訳ではない，あるいは，自身の精神的エネルギーが充足していなければ対象愛に向かうエネルギーが生まれない，つまり自己愛がなければ対象愛も成立しないという主張である。

たとえば Fromm(1956)は，健康的自己愛を self-love，不健康的自己愛を narcissism と表している。Fromm によると自己愛と対象愛は不可分で，自己愛がなければ対象愛も成立しない。また，健康的自己愛は幼少期に他者から愛された体験を基に成立し，自分の人生に肯定感をもつことが他者への敬意や気遣いにも通じる。しかし，不健康的自己愛をもつ人は利己的で，このような人はむしろ自分を愛せていないと指摘している。Horney(1967)は，不健康的自己愛は幼少期に他者から疎外された体験により成立し，自己膨張を呈すると述べている。自己膨張とは，現実的な基盤のない性質を自らに付加することである。不健康的自己愛をもつ人は，膨張した自己に賞賛を求めるという。また，これに対して自らの性質が現実的な基盤を持っていて，しかしそれによって他者から評価されようとはしないという点で，自尊感情と不健康的自己愛とが質的に異なるとも指摘している。Horney は健康的自己愛を自尊感情とほとんど同義にとらえているようである。

このように，自己愛の健康的側面はもっぱら不健康的側面との対比によって論じられてきた。この立場では，Fromm や Horney の理論にもみられるように，不健康的自己愛の成立に幼少期の体験を重視する理論が多い(他に，Asper,1987; Kohut,1971 など)。一方，不健康的自己愛と健康的自己愛の関係については，双方が分断された，別個の概念であるとする立場と，双方には連続性があって，自己愛の発達が遅滞すると不健康的自己愛が成立するという立場がある。以下に前者の立場として Kernberg の理論，後者の立場として Kohut の理論を取り上げる。

2.3. 自己愛の健康的側面と不健康的側面

Kernberg の自己愛論

Kernberg(1975)は，健康的自己愛と不健康的自己愛を別個のものと考えた。Kernberg のいう自己とは，心の中における自分自身に対するイメージと，それにまつわる様々な気持ちの総体である。自己は自我の一部であり，多様な自己表象を統合している。自我には他に対象表象，理想の自己像あるいは理想の対象像などが含まれている。この自己の発生過程は次のようになる。

始めに，乳児期に対象との関係において，満足が得られた体験からは良い自己・対象融合的表象が，逆に欲求不満の体験からは悪い自己・対象融合的表象が形成される。やがてこれらの表象のそれぞれについて自己と対象が分化する。そして自己表象と対象表象のそれぞれについて，良い側面と悪い側面が統合され，双方の側面を合わせ持った，現実的な自己表象あるいは対象表象が確立する。このように表象と，各々の側面とが統合されることによって，自己が発生する。この段階に至ると，子どもは例えば，自分が愛憎のように相反する感情を持つことにも，また他者からそう言った感情を向けられることにも耐えられるようになる。統合された自己においては，自己へのリビドー備給の増大が，対象ないし対象表象へのリビドー備給をも増大させる。その結果，他者を愛したり，他者に与えたり，感謝したり，配慮したりする能力も増大する。Kernberg は，健康的自己愛は対象愛を増加させる働きをすると同時に，自尊感情と同義のものであるとした。

一方でこの正常な発達が，遺伝的要因や養育者の態度などによって阻害され，発生した葛藤が未解決のまま持ち越されると，自己が統合されず，慢性的な非現実感や空虚感があり，自分を全体的な存在として感じることができなくなる。するとその人は耐えがたい対人関係の現実から自己を守るため，①現実自己(初期経験によって強化された「自分は特別だ」という意識)，②理想自己(権力，富，全能性を有しているというイメージ)，③理想対象(常に受け入れてくれる親のイメージ)の 3 つの表象の間で融合が起こり，融和性は持つものの不健康的な自己が形成される。これを誇大自己(grandiose self)と Kernberg は呼ぶ。誇大自己には自己や他者のネガティブな側面が含まれず，それらは乖離・抑圧されたり，他者へ投映されたりするとしている。

Kernberg のいう NPD の特徴を，表 1 に示す。

上地(2009)によると，Kernberg の理論では，NPD は基本的に境界性パーソナリティ障害(Borderline Personality Disorder; 以下 BPD)の水準に準じる人格構造で機能するとされている。NPD と BPD とを区別する要因は，NPD が病理性を有しつつも安定した自己，つまり，誇

大自己を形成している点にあるとも述べられている。このように Kernberg は，自己愛の障害の本質を，強い愛情飢餓と関連した攻撃性や羨望を否認するために生み出された誇大自己によるものであると規定した。

表 1.　Kernberg(1970,1975)の示す NPD の特徴

1.	自己概念が非常に肥大しているが，他者から愛され賞賛されたいという欲求も過剰である。劣等感を示す者においても，時々自己が偉大・全能であるという感情や空想が現れる。
2.	情緒が分化しておらず，喪失した対象への思慕と悲しみの感情が欠けている。他者に捨てられると落ち込むが，深く聞いていくと，怒りと憎しみが復讐願望を持って現れる。
3.	他者から賞賛と承認を得たがるのに，他者への興味と共感が乏しい。情緒的深みに欠け，他者の複雑な感情を理解できない。
4.	他者からの賞賛や誇大的空想以外には生活に楽しみを感じることが少ない。
5.	自己尊重をもたらすものが少なくなると，落ち着かなくなり，退屈してしまう。
6.	自己愛的供給が期待できる人は理想化し，何も期待できない人は評価を下げ，侮蔑的に取り扱う。他者が自分にないものを持っていたり，人生を楽しんでいたりするだけで，非常に強い羨望を抱く。
7.	他者から賞賛を求めるので他者に依存していると思われがちだが，他者への深い不信と軽蔑のために本当には誰にも依存できない。
8.	非常に原始的で脅威に満ちた対象関係が内在化されている。内在化された良い対象を支えにすることができない。
9.	分裂，否認，投影同一化，全能感，原始的理想化と言った，原始的防衛機能を示す。そのような点では BPD と同じだが，社会的機能や衝動統制が良好で，擬似的消化能力，すなわちある領域で能動的に，一貫した仕事を行う能力がある。但し，その仕事は深みに欠けている。
10.	不安な状況で自己統制ができるが，それは自己愛的空想の増大や「孤高(splendid isolation)」への逃避によって獲得される不安耐性である。

Kohut の自己愛論

次に Kohut(1971,1977)は，自己愛を健康的な極と不健康的な極とを持つ連続体であると考え，NPD を健康的な自己愛の発達遅滞によるものであるとみなした。この考えは Kohut が自ら創始した自己心理学の観点に基づいている。Kohut の理論を説明する文献は多々あるが(相澤,1999; 上地,2004;など)，ここでは上地(2009)を基にみていく。

上地(2009)によると，自己心理学では自己の構造の構成要素を問題にしている。人生に意味や目標を感じ活気や幸福感を味わっている状態では，自己の要素が凝集し合って 1 つの全体を成しているとみなす。これを凝集した自己(cohesive self)という。逆に，生きる意味や目標を見失い，空虚感に捉われてエネルギーが枯渇している状態では，自己の構造がばらばらになっているとみなす。これを断片化(fragmentation)という。

Kohut は自己を構成する要素として，①野心，②理想，③才能と技能の 3 つを重視した。①野心は力や成功を勝ち取ろうとする努力であり，②理想は理想化された価値や規範を指す。また，③才能と技能は②野心と①理想によって活性化される。自己の発生過程において，野心と理想は 2 つの極を形成する。これを双極性自己(bipolar self)という。生後 6~8 ヶ月の乳児は，まとまった自己を持っていない(断片自己期)。この時期に適度な欲求不満を感じることによって，両極の間には緊張弧(tension arc)が張られる。緊張弧は自己を凝集させ

て中核自己(nuclear self)を形成し，これを維持する働きを持つ。野心と理想は親などの他者との適切な関わりの中で保持され，双方によって活性化された才能と技能が自己の凝集性を高める。このようにして凝集自己が形成される。

自己心理学では自己を重視すると同時に，自己を支える他者との関係(基盤；matrix)にも重点を置いている。凝集自己の形成と維持には，それを可能にする他者との関係が不可欠である。この他者との関係，あるいは他者自体を指して，自己対象(self object)という。本来自己対象とは，精神分析における定義では自己の一部のように体験される他者のことであるが, Kohut の最終的な定義では, 自己を支えてくれる他者の機能を体験することとされ, 個人の主観的体験を示す概念となっている。ゆえに表現としては，自己対象体験の語を用いる方が理解しやすい(上地,2009)とも指摘される。

Kohut は，NPD の特徴を，恐怖症，強迫，ヒステリーなどの神経症的症状を呈している一方で，抑うつ気分，仕事への熱意や自発性の欠如，人間関係での鈍感さ，心的状態へのこだわり，性的倒錯などの問題を有しているという点に求めている。さらにこれらの症状に続いて, 弥漫性の自己愛的脆弱性, 自尊感情の欠如, 自尊感情を調節することの困難さ, 理想システムの障害が発見されると考えている。ちなみに自尊感情を調節することの困難さとは，自意識過剰，強い羞恥傾向，不安を伴う誇大感や興奮によって，自尊感情が揺れ動くことを指す。また，理想システムの障害とは，内的理想に沿った自己の方向づけができず，外的他者の承認がないと安心できない傾向である。しかし，NPD に対する最終的な診断にあたっては，これらのような顕在的症状や訴えによる特徴ではなく，精神分析の過程で「自発的に展開してくる転移の性質」が基準として用いられる。

ここでいう転移の性質は，自己対象転移(selfobject transference)を指している。これは精神分析や精神分析的心理療法において，過去に体験できなかった自己対象体験を求める欲求が復活し，精神分析家に向けられる現象を示すものである。転移は，①鏡転移(mirror transference)，②理想化転移(idealizing transference)，③双子転移(twinship transference)の 3 種類である。それぞれに対応する自己対象と自己対象体験は以下の通りである。

①映し返し自己対象(mirroring selfobject)：子どもは生来的に親が自分の素晴らしさを承認・賞賛してくれること(映し返し；mirroring)を期待する。そこで親が期待に沿うような応答を行い，子どもが自己の素晴らしさ・完全さを体験することが，映し返し自己対象である。また，このように自己を顕示し，承認・賞賛を求める自己を誇大自己(Kernberg の誇大自己との違いについては次節で詳述する)という。Kohut は誇大自己が，親の適切な対応によって野心や目標の追及に変容すると考えた。

②理想化自己対象(idealized selfobject)：完全性や平静さを備えているように体験される他者と，心的に一体化する体験である。理想化自己対象には 2 つの要素がある。1)他者に感情の緩和・調節をしてもらうこと，2)親イマーゴ(親像)の理想化，すなわち親像が尊敬・理想化できる性質を備えていることである。この体験を通して，前者は感情を自分で緩和・調節する自己緩和(self-soothing)の能力に，後者は自己を内的に支える理想や価値に変容すると考えられている。

③双子自己対象(twinship selfobject)：他者との間で類似性や共通性を体験することである。当初 Kohut はこれを①映し返し自己対象に包含していたが，後に分離した。双子自己対象

を通して，自分が他者と，感情体験や関心・活動を共有し得る，1 人の人間であるという感覚を強化すると考えられている。

Kohut はまた，自己の構造にも NPD の特徴を見出している。NPD には図 1 のような自己の分割が認められる。図 1 の縦の分割は垂直分割(vertical split)と呼ばれ，図の左半分が病理的な誇大性を表している。この誇大性は患者の本来的自己に根ざしたものではなく，主要な自己対象(母親など)との関係において育ったものである。例えば自己対象が過度に承認・賞賛したり，対象自身が持つ期待や願望を代弁したりする部分である。

一方で横の分割は水平分割(horizontal split)と呼ばれる。図 1 の右側・下半分は誇大性とは対照的に，満たされないまま抑圧されている中心的な欲求を表している。Kohut は当初この部分を誇大自己と称していたが，後に中核自己として説明するようになった。誇大自己は承認・賞賛を求める自己であり，発達早期においては健康的なものである。しかし適切に満たされる体験が不足すると，未熟なまま抑圧されることになると考えられている。生来の健康的な欲求が満たされないままなので，垂直分割の右側の自己には自信がなく，恥を感じやすい性質が生まれる。

例えていうと，垂直分割は自己対象との不適切な関係によって作られた堤のようなものかもしれない。垂直分割の左側の誇大性は患者本来の欲求をよそに自己対象からの賞賛を受けて育ち，右側の自己には効力が及ばない。一方の右側では中心的な欲求が満たされず，いわば自己対象からの適切な関わりが欠乏し，自信が育たないのである。

このように Kohut は，自己愛の障害の本質を，心理的安定や自己評価を維持する心理的機能の脆弱性によるものであると規定した。

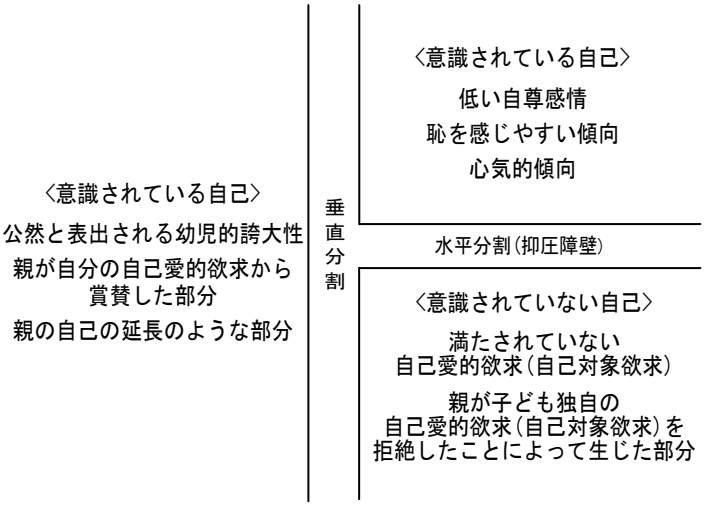

図 1.　NPD にみられる自己の分割(上地(2009)を引用)

2.4.　Kernberg と Kohut の自己愛論の異同

上記に概観した Kernberg と Kohut の自己愛論を比較して，以下のように異同を整理する。

1 つは健康的自己愛と不健康的自己愛の連続性についての相違である。Kernberg は双方を非連続の概念とし，Kohut は不健康的自己愛が健康的自己愛の発達遅滞であるとした。

2 つめは不健康的自己愛の成立要因についての違いである。Kernberg は養育者との関係も取り上げつつ，どちらかと言えば器質的要因を重視している。Kohut は幼少期の養育者との関係，生来の欲求の不適切な充足体験を重視している。とは言え，Kernberg が誇大自己の成立を「幼少期の耐え難い欲求不満」によると表現していることから，Kernberg の理論においても，不健康的自己愛の成立要因には他者から自分の欲求を満たしてほしいという心性の満たされなさがあるものと推察できよう。

3 つめは不健康的自己愛の成立過程および現象像における一致である。まず，どちらの理論でも不健康的自己愛をもつ人は生来の欲求が満たされず，ありのままの自分に対する肯定的な感覚が欠乏しているようである。満たされない欲求が，承認，賞賛への渇望として認められるが，抑圧されている点も共通している。承認，賞賛への傾倒も同様である。一方で，他者への興味は薄く，共感性に欠けるという点も一致する。こうした点に関連して，相澤(2009)は，両者の理論で共通して，臨床水準の自己愛の問題を呈する人は，「重要な依存欲求を抑圧しており，本当の意味では他者に依存できない人であるとみなされている」と述べている。

4 つめは誇大性をもつ自己についての相違である。Kernberg が示す誇大自己は，愛情飢餓や羨望を否認するために形成された，万能感や理想に満ちた自己である。誇大自己から取り除かれた自己や他者のネガティブな面は，他者に投映される。愛情に飢えた自己表象も同様である。そのため，他者は憎しみ，侮蔑，脅威，攻撃の対象となる。しかし，こうした自己愛をもつ人は，自分にないものを持っている他者には羨望を抱く。他者に自分の誇大性を投映し，理想化し賞賛することで，自分の誇大性を賞賛する。こうした特徴から Kernberg が示す臨床像は，誇大自己の顕示と，承認，賞賛以外の他者の反応への無関心さに象徴される。対して Kohut の理論では，病理的な誇大性を示すのは自己の一部分である。この部分は，養育者が過剰に，あるいは自らの都合によって賞賛した部分に当たり，冷淡さや尊大さを示す。上地(2009)はこの部分が Kernberg の理論における誇大自己に重なる部分があると指摘している。一方，Kohut の理論において，個人が生来もつ誉められたい，認められたいという自己愛の欲求(自己対象欲求)は，養育者に拒絶されるなどの外傷的な体験の結果，自己の他の一部分として抑圧され，未熟なまま残存する。そのために不健康的自己愛をもつ人は，病理的で未熟な誇大性をもつ一方，本来の自己に根差した部分は自信に欠ける。こうした理論を背景に，Kohut が描く臨床像は，承認や賞賛を求めると同時に，他者からの反応に敏感で，期待した承認，賞賛が得られない場合に恥を感じ，怒りと攻撃性を示すものとされる。この現象を Kohut は自己愛的憤怒(narcissistic rage)と表している。

5 つめは，誇大性をもった自己の成立における「理想」に関わる問題である。そもそも，誇大性をもった自己の成立過程を追うと，Kernberg の理論においては現実自己が理想自己，理想対象と融合して成立する。いうなれば，現実の自分が理想的な自分にもなる。一方，Kohut の理論においては，他者の都合による賞賛から誇大性が形成され，本来の欲求は抑圧される。本来の欲求とは，誉められたい，認められたいという映し返し自己対象欲求であ

る。この欲求が適切に満たされると，野心や目標の追及に変容するとされる。さて，映し返し自己対象欲求とは別に，感情緩和や理想，価値に変容する欲求もある。この欲求は理想化自己対象欲求と呼ばれ，他者に感情の緩和をしてもらうこと，他者が尊敬，理想化できる性質を備えていることを体験することで満たされる。ここで，満たされたいという映し返し自己対象欲求となだめてほしい，尊敬したいという理想化自己対象欲求とを関連づけると，他者から誉められ，認められなければ，認めてほしいという感情を緩和して貰えず，理想化できるような性質を見出すこともできないととらえても，大きな誤りはないように思われる。すると，間接的にではあるが，Kohut の理論においても，Kernberg の理論と同様に，大局的には理想に関する障害を抱えることになる。Kohut の理論においてこのような問題は，内的理想に沿った自己の方向づけができず，外的他者の承認がないと安心できない傾向(理想システムの障害)として説明されている。この点に関連して，上地(2009)は両者の理論が「理想の欠損という点でも両者の見解は共通している」と述べている。すなわち，両者の理論は欲求の不満や不適切な充足によって，理想が欠損し，空虚感，やる気のなさなどに繋がるという点が共通するものと考えられる。

両者の理論や臨床像にみられる違いは，両者が理論の構築にあたって対象とした患者の違いにある(Gabbard,1994)と指摘されている。Kernberg と Kohut はそれぞれの臨床実践を通して自己愛の問題を見いだし理論を構築したが，Kernberg が対象としたのは入院治療を受ける患者も含んだ比較的重篤な患者で, Kohut の対象は比較的社会的機能や人格水準の高い外来患者であった(Gabbard,1994)。理論的にも，Kernberg の理論では誇大自己がすなわちその人の自己そのものとして形成されているのに対して, Kohut の理論では病理的誇大性として自己の一部分に留まっているととらえられ，他者が介在する余地を残しているという点で，Kernberg が示す臨床像の方が病理の根が深いようにも思われる。

以上のように，Kernberg と Kohut の理論を概観し，双方の異同を不健康的自己愛と健康的自己愛との連続性，不健康的自己愛の成立要因と成立過程から検討した。以下ではここまでの検討を総括して理論的側面からみた自己愛の健康性と不健康性を整理する。

2.5. 理論的側面からの検討を総括して

Freud，Fromm，Horney，Kernberg，Kohut の自己愛論を通して，自己愛の健康性と不健康性について根本的な部分には以下のような知見を見出すことができる。

まず，自己愛の生得性についてである。Freud が述べる一次的自己愛から対象愛へ至る過程や，Fromm が述べる幼少期の愛された体験から健康的自己愛が成立する過程，Kernberg や Kohut が述べる正常な自己の発達によって健康的自己愛が成立する過程などにみられるように，自己愛は生まれながらに誰にでもみられる心性で，対象愛あるいは自尊感情といった肯定的な感情に繋がる概念であることは，共通して指摘されているようである。

次に，健康的自己愛と不健康的自己愛の成立を規定する要因に，生来の欲求の適切な充足体験が重視されている点である。それぞれの理論において，不健康的自己愛をもつ人は幼少期における生来の欲求の不適切な充足体験によって，承認，賞賛の欲求不満に陥り，過度に承認，賞賛に依存したり，誇大な自己を成立させたりしている。

第 3 に不健康的自己愛をもつ人は，承認，賞賛に傾倒しているが，そうした欲求を抑圧

している。Kernberg が示す臨床像では，承認，賞賛の欲求の否認のために，現実的な基盤のない性質を自らに付加し，周囲に示すことで，「今の自分がそのまま理想の状態なので他者から愛される必要はない」(上地,2009)と主張をする。現実的な基盤のない性質を付加することを，Horney は自己膨張と表現した。また，このような自己を，Kernberg や Kohut の理論では誇大自己，誇大性と表現している。

第 4 に，不健康的自己愛をもつ人は，他者への内面的な関心，共感性，対象愛が欠如する。他者は自分に対する肯定的感覚の欠乏を補うための承認を引き出す対象としての意味合いが強く，関心，関係が表面的になる。Kernberg はこのような現象像について，他者の評価には依存的だが，「他者への深い不信と軽蔑のために本当には誰にも依存できない」と指摘している。

こうしてみると自己愛の健康性と不健康性についての議論は，生得的な自己愛とその健康性，不健康性についてというよりは，生来健康的であるはずの自己愛が何らかの要因で不健康性を帯びる，あるいは不健康的自己愛に変容することを前提に，不健康的自己愛の成立要因や過程，現象像，健康的自己愛との互換性あるいは可塑性を取り上げていると言えるのかもしれない。また，健康的自己愛は不健康的自己愛との対比によって論じられることが多く，不健康的自己愛ほど成立過程や現象像が明確ではないようである。その中でも健康的自己愛の記述を取り出すと，自分に対する自信，また，それによって対象愛を可能とする，自尊感情と同義にもされる概念ととらえられる。例えば Horney や Kernberg は健康的自己愛を自尊感情とほぼ同じ概念としている。Fromm は健康的自己愛を self-love と表し，不健康的自己愛との質的な差を強調している。比較的最近の研究では，健康的自己愛は，自己を価値あるものと感じようとし，それを他者にも認めてもらおうとする傾向(上地・宮下,2005)，健常者に見られる傾向で，肯定的感覚に繋がる(新見・川口・江村・越中・目久田・前田,2007)，純粋な自尊意識で，自分自身に安心感と信頼感を持つ(小塩,2004b)ととらえられている。Fromm と同様に，健康的自己愛を self-love として，不健康的自己愛(narcissism)と区別する立場(中村,2004; 松並,2013 など)も少なくない。あるいは自信や自尊感情等他の概念で表現し得る様態はそれぞれ該当する概念で表現するべきとした上で，健康的自己愛は「病的なナルシシズム(本研究における不健康的自己愛)の緩和した様態で，一般健常者にも見られるもの」，すなわち，パーソナリティ傾向としての自己愛と位置づける研究もある(相澤,1999)。これらを通してみると，健康的自己愛の現象像としてはある程度のまとまりがあるようにみられるものの，不健康的自己愛との異同については共通見解には至っていないと言えるだろう。

理論的側面からみると，不健康的自己愛の成立要因や過程，臨床像について一定の異同を整理することができた。また，健康的自己愛についても，幼少期の体験を通して自己，あるいは自己愛が正常に発達すると，自分に対する肯定的な感覚，対象愛に繋がるものと考えられるだろう。以下では現象像的側面から自己愛の概念を整理する。主に調査的な先行研究の知見を辿り，理論的側面の知見と合わせて，検討を進める。

第 3 節　現象像的側面における自己愛の諸相についての検討

3.1.　自己愛の 2 つの現象像

先に触れたように，Kernberg と Kohut はそれぞれの臨床実践を通して，自己愛の問題を呈する患者について，異なる臨床像を提出している。両者は根底に共通する部分をもちながらも，表面的には他者に対する鈍感さ，敏感さと，対照的とも言える特徴を示したので，理論的に対立した。ところがその後の研究から，自己愛の現象像に両者の理論と整合する 2 つの下位類型が示されている(Rosenfeld,1987; Masterson,1993 など)。これらの理論の一覧を表 2 に示す。

表 2 の自己中心型(egotistical narcissist), 厚皮な(thick skinned), 自己顕示的な(exhibitionistic), 顕在型(overt)といった現象像は，いずれも誇大的，能動的，自己中心的で他者に関心を示さないなどの Kernberg が示す臨床像に近似した特徴を持っている。また，乖離型(dissociative narcissist)，薄皮な(thin skinned)，内密型の(closet)，潜在型(covert)といった現象像は，いずれも抑制的で，他者からの評価や反応に敏感であるなどの Kohut が示す臨床像に近似した特徴を持つ。

こうした下位類型の提出を経て，Kernberg と Kohut の理論的対立は Gabbard(1994)によって総括された。Gabbard(1994)は従来提出されてきた自己愛の現象像が 2 つの現象像に集約できることを指摘し，Kernberg の理論に類する oblivious 型(無関心型，無自覚型，誇大型; oblivious narcissist)と Kohut の理論に類する hypervigilant 型(過敏型, 過剰警戒型; hypervigilant narcissist)に分類した。表 3 は Gabbard(1994)がこれら 2 つの現象像の特徴をまとめたものである。それぞれの型には複数の邦訳があるが，混乱を避けるため，以下では oblivious 型を無関心型，hypervigilant 型を過敏型と表す。

Gabbard によれば，両者は自己愛の概念の中で対立する性質を持ち，それぞれを極とする連続体上に位置づけられている。また，Gabbard は多くの人が無関心型と過敏型の連続体上のいずこかに位置し，双方が混合した自己愛の特徴を示すと述べている。つまり，1 人の人物の自己愛が周囲に無関心であったり過敏であったりする現象像を併せ持つと同時に，どちらの型がどの程度優位であるのかという点に個人差が生じるものと考えられる。なお，上記では 2 つの現象像を類型として扱っているが，Gabbard の指摘を受けて，2 つの現象像を誇大性，過敏性(評価過敏性)と特性的に扱う立場(相澤,2002; 中山;2007 など)も多い。本研究では後の調査的検討において双方を類型的に扱った質問紙を使用するため，用語を統一する目的で無関心型，過敏型と表す。また，分析の際には特性的なとらえ方も念頭に置きながら検討を進めたい。

表 2.　自己愛における 2 類型の分類様式(清水・川邊・海塚(2007)による邦訳を改訂)

Gabbard(1994)	無関心型 (oblivious type)	過敏型 (hypervigilant type)
Broucek(1991)	自己中心型 (egotistical narcissist)	乖離型 (dissociative narcissist)
Rosenfeld(1987)	厚皮な (thick skinned)	薄皮な (thin skinned)
Masterson(1993)	自己顕示的な (exhibitionistic)	内密型の (closet)
Cooper(1998)	顕在型 (overt)	潜在型 (covert)

表 3.　Gabbard(1994)による自己愛パーソナリティ障害の 2 つの現象像

周囲を気にしないタイプ (無関心型; Kernberg の理論に近似)	周囲を過剰に気にするタイプ (過敏型; Kohut の理論に近似)
・他者の反応に気づくことがない。	・他者の反応に過敏である。
・傲慢で攻撃的である。	・抑制的か，内気か，あるいは自分を表に出すことさえしない。
・自己陶酔的である。	・自己よりも他者の方に注意を向ける。
・「送信機はあるが受信機は無い」ような人である。	・軽蔑あるいは批判されていないかどうか，注意深く他者の話に耳を傾けている。
・他者によって傷つけられたという感情に鈍感であるように見える。	・傷つけられたという感情を持ちやすい。恥や屈辱感を感じやすい。

表 4.　DSM-Ⅳによる自己愛性人格障害の診断基準(APA,1994)

誇大性(空想または行動における)賞賛されたいという欲求，共感の欠如の広範な様式で，成人期早期までに始まり，種々の状況で明らかになる。以下のうち，5 つ(またはそれ以上)で示される。

1. 自己の重要性に関する誇大な感覚。自分の業績や才能を誇張する。
2. 限りない成功，権力，才気，美しさ，あるいは理想的な愛の空想にとらわれている。
3. 自分が特別であり，独特であり，他の特別なまたは地位の高い人(権威的な機関)にしか理解されない，または関係があるべきだと信じている。
4. 過剰な賞賛を求める。
5. 特権意識，つまり特別有利な取り計らい，または自分の期待に自動的に従うことを理由なく期待する。
6. 対人関係で相手を不当に利用する。つまり，自分自身の目的を達成するために他人を利用する。
7. 共感の欠如。他人の気持ちおよび欲求を認識しようとしない，またはそれに気づこうとしない。
8. しばしば他人に嫉妬する，または他人が自分に嫉妬していると思い込む。
9. 尊大で傲慢な行動，または態度。

3.2.　パーソナリティ障害としての自己愛

自己愛の異なる現象像に関する議論の一方で，自己愛の問題を顕著に呈する臨床像は，アメリカ精神医学会(American Psychiatric Association; 以下 APA, 1980)による『精神疾患の診断・統計マニュアル(Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders; 以下 DSM)第Ⅲ版』において，診断基準と共に自己愛性パーソナリティ障害(Narcissistic Personality Disorder; 以下 NPD)と定義された。DSM-Ⅲの改訂版である DSM-Ⅳの診断基準を表 4 に示す。

表 3 と表 4 を比較すると，診断基準が描く臨床像は無関心型の臨床像と重なる部分が多い。NPD 患者はどちらかといえば無関心型の現象像を優位に示す人であると言えるだろう。NPD の診断基準が臨床現場に適用されて以降，アメリカでは NPD 患者の増加が指摘(Cooper,1986)され，有病率はパーソナリティ障害全体の臨床的母集団のうち 2~16%を占める(APA,1994)と報告された。日本における NPD の有病率は明らかでないが，ある心療内科の外来初診患者に対する診断を 3 年に渡って集計した研究(Nakao,Nomura,Yamanaka,Kumano,&Kuboki,1998)では，外来初診患者 1,432 名の 10%ほどがパーソナリティ障害全体の母集団であり，NPD はこのうちの 9%ほどを占めたことが報告されたほか，日本でも NPD が増加傾向にある(野村・樋口,2005)と指摘されている。

上記に示した NPD の有病率は，一概に高いと言えない。しかし，NPD はその障害をもつ者に必ず随伴するような共通の症状や問題行動などがある訳では無く，障害が自覚されることは稀で，患者の多くは抑うつや心気症など他の症状を主訴に治療機関を訪れるため，気分障害やパニック障害などの診断に終始する場合が多い(関真,2006; 山田,2006 など)と指摘されている。また，NPD の特徴が，すなわち自己愛の問題として，境界性パーソナリティ障害を始めとする他のパーソナリティ障害にも認められる(白波瀬,2006; 小野,2010 など)という見解や，大うつ病，双極性感情障害，摂食障害など他の精神疾患と併存する(小野,2010; 山崎・古谷,2013 など)という指摘もある。こうした知見をまとめると，自己愛の問題は NPD としてのみならず，他の広範な精神疾患に併存したり，隠れたりしていると考えられる。

3.3.　パーソナリティ傾向としての自己愛

無関心型および過敏型の臨床像を提唱した Kernberg(1998 佐野監訳,2003)や Kohut(1980 岡訳,1991)は，それぞれの現象像が示す自己愛の問題が，非臨床群にも様々な水準で存在する(白波瀬,2006)と述べている。つまり，パーソナリティ傾向としての自己愛の現象像にも，無関心型と過敏型という異なる現象像が認められることが指摘されている。また，DSM-Ⅳについても，診断において人格障害まで至らない場合でも，そのようなパーソナリティ傾向がみられるならば，それを記載することになっているため，正常な人格特性としての自己愛を査定する際にも有効である(小塩,2004b)という見解が示されている。この点から，NPD の現象像がパーソナリティ傾向の水準でも認められることが示唆されていると言えるだろう。

Raskin&Hall(1979)は同様の立場から，DSM-Ⅲの NPD 診断基準を基に，非臨床群の自己愛をパーソナリティの傾向として測定する尺度「自己愛人格目録」(Narcissistic Personality Inventory; 以下 NPI)を作成した。NPI による評価は，面接による NPD の診断と有意な相関

が認められ，NPI は NPD の鑑別にも有用性がある(Miller,Gaughan,Kamen,&Campbell,2009)と指摘されている。言い換えれば，自己愛傾向の現象像が NPD の水準でみられることを示唆していると考えられるだろう。総括すると，NPD の現象像がパーソナリティ傾向としての自己愛の現象像にも認められ，また逆にパーソナリティ傾向としての自己愛の現象像によって NPD を鑑別できる可能性が示されていると考える。また，無関心型，過敏型の現象像については，Kernberg と Kohut の指摘に加えて，小塩(2002)が自己愛の 2 成分モデルによって，パーソナリティ傾向としての自己愛に双方の現象像を見出している。自己愛の 2 成分モデルとは，小塩(2002)が NPI 短縮版(以下，NPI-S)の下位尺度「自己主張性」「注目・賞賛欲求」「優越感・有能感」に対する主成分分析の結果，無関心型，過敏型の高低を示す「注目―賞賛」の軸と自己愛全体の高低を示す「自己愛総合」の直交軸を見出し，NPI-S 得点によってパーソナリティ傾向としての自己愛の現象像の分類も行えるモデルとして構築したものである。NPI が DSM 診断基準を元に作成されていることから，NPI および NPI-S も無関心型をよく識別すると考えられる。しかし，その中でも「注目・賞賛欲求」は過敏型の現象像に近似した内容で構成されているので，相対的に過敏型の識別に適していると言えよう。NPI-S から構築された自己愛の 2 成分モデルによって過敏型の現象像も見出されたことから，自己愛傾向にも無関心型と過敏型が認められることが示唆されているとも言える。また，上地・宮下(2005)は，Kohut の自己愛論に基づいて作成された，過敏型をよく識別する尺度「自己愛的脆弱性尺度短縮版」(Narcissistic Vulnerability Scale; 以下，NVS)と「GHQ28 精神健康調査票」(The General Health Questionnaire)との関連について，NVS の「自己顕示抑制」「自己緩和不全」「潜在的特権意識」「承認・賞賛過敏性」の全下位尺度が GHQ28 の下位尺度「不安・不眠」と「抑うつ傾向」に，「自己顕示抑制」が「社会的活動障害」に，「潜在的特権意識」が「身体的症状」「社会的活動障害」に影響することに加え，自己愛性・回避性・境界性パーソナリティ障害からなる臨床群の方が健常群よりも NVS の全下位尺度について高い得点を示すことを示している。こうしたことから，過敏型も臨床群から非臨床群に至るまで連続して認められる自己愛の問題の現象像であると考える。

以上より，自己愛の問題は臨床水準から非臨床水準，すなわちパーソナリティ傾向としての自己愛に至るまで，無関心型と過敏型の現象像を伴って連続して存在する可能性がうかがえる。なお，パーソナリティ傾向としての自己愛は，研究が盛んに行われる中で，自己愛傾向，自己愛人格傾向，自己愛性格傾向などの用語が提出されている。本研究では無関心型，過敏型と同じく後の検討で自己愛傾向の用語に準じた質問紙を使用するので，一貫性を保つため，以下ではパーソナリティ傾向としての自己愛を自己愛傾向と表す。また，臨床水準における自己愛の問題が NPD としてのみならず他の精神疾患の基底要因としても表われることを先に述べたが，この場合の自己愛は自己愛傾向ととらえ，NPD は無関心型の現象像を優位に示す自己愛の問題を呈する臨床像であると位置づけた方が，NPD の概念が明確で議論に有益と考える。そして，NPD ではないものの他の精神疾患の基底となる自己愛の問題を呈する現象像を，極めて臨床水準に近く，非臨床水準に一括し難い水準であると考えて，以下ではこのような準臨床水準の自己愛傾向と位置づける。

3.4.　現象像的側面からの検討を総括して

ここまでに，自己愛の問題の臨床水準から非臨床水準までの連続性と無関心型，過敏型の分類および連続性について現象像的側面から先行研究の知見を辿った。検討の結果，次の点がみいだされた。1 つに，自己愛の問題を呈する臨床像は，NPD という精神疾患として位置づけられている。ただし，NPD の臨床像は無関心型に重複するところが多いようである。2 つめに，NPD は無関心型と過敏型の現象像を伴って自己愛傾向と連続性があることが示唆される。DSM 診断基準と NPI は無関心型をよく鑑別すると考えられるので，特に無関心型は自己愛傾向から NPD にまでみられる現象像ととらえられるだろう。一方で，過敏型の臨床像を NPD の診断基準で十分にとらえるのは難しいと思われる。過敏型は臨床水準から自己愛傾向にまでみられることが示唆されているが，NPD から自己愛傾向までの連続性は間接的な示唆に留まっているととらえる方が適切だろう。

以下では自己愛傾向についてさらに検討を進めたい。自己愛傾向の健康性と不健康性を諸変数との関連から検討した調査的な先行研究の知見を辿りながら，無関心型自己愛傾向，過敏型自己愛傾向について整理していく。

3.5.　自己愛傾向の健康性と不健康性に関する先行研究の知見

自己愛傾向の健康性と不健康性，あるいはその現象像を検討する研究では，健康的自己愛を，自己を価値あるものと感じようとし，それを他者にも認めてもらおうとする傾向(上地・宮下,2005)，健常者に見られる傾向で，肯定的感覚に繋がる(新見・川口・江村・越中・目久田・前田,2007)，純粋な自尊意識で，自分自身に安心感と信頼感を持つ(小塩,2004a)と定義とした上で，大きく次の 2 つの方針で検討が行われている。1 つは自尊感情や自己効力感等の精神的健康，心理的適応を示す指標とされる概念との関連を検討する研究である。もう 1 つは対人恐怖傾向や抑うつなど，精神的不健康を示す指標とされる概念との関連を検討する研究である。以下ではそれぞれの先行研究の知見を概観していく。なお，多くの研究は Gabbard の 2 類型に沿って自己愛傾向を 2 つの現象像からとらえており，自己愛傾向の測定には小塩(2004a)の 2 成分モデルに沿って NPI-S の下位尺度「自己主張性」によって無関心型，「承認・賞賛過敏性」によって過敏型を測定している。以下の研究では特に断りがない限りこの方法に沿った研究を取り上げている。また，自己愛傾向の類型の表現には複数の用語が用いられているが，ここではそれぞれの研究の呼称を対応関係に準じて，無関心型，過敏型と置き換えて記述する。

無関心型については，小西・山田・佐藤(2008)が，無関心型優位の者の方が過敏型優位の者よりも明確な自我理想をもっていると指摘している。遠田(2010)は自己愛傾向と自己効力感および文章完成法(Sentence Completion Test; SCT)の記述傾向との関連を検討し，無関心型は自己効力感下位尺度「行動の積極性」「能力の社会的位置づけ」の高さと関連することを指摘した。過敏型については，小塩(1997,2002)は過敏型が自尊感情と無相関である(小塩,1997)こと,「自己像の不安定性」と正の相関関係をもつこと(小塩,2002)を指摘している。稲永(2010)は過敏型の高さが「自己不全感」全体と，下位尺度である「自己像の揺れ」「同一性の拡散」の高さと関連すること,「空虚感」全体と下位尺度「自己不確実・不安定」「充実感喪失」の高さと関連することを示している。また，小塩(2004a)は自己愛傾向と精神的

健康を示す諸尺度との関連を検討した従来の研究を総合した見解として，無関心型は比較的適応的な諸尺度と，過敏型は不適応的な諸尺度と関連する傾向にあると述べている。原田(2009)は NPI-S を用いて過敏型と諸尺度との関連を検討した研究をまとめた上で, 国内外においても過敏型を「不適応的概念とする共通見解があるとも言える」と述べている。

無関心型の健康性と過敏型の不健康性を示唆する知見は，自己に関わる諸尺度のみならず，対人態度や認知(小塩,1997; 落合,2008 など)，攻撃性(相良・相良,2006; 福島,2007)，対人恐怖傾向(上地・宮下,2009; 川崎・小玉,2007 など)などとの関連でもうかがえる。このように，自己愛傾向については主に NPI-S を用いた検討の中で無関心型の健康性と過敏型の不健康性が示唆されているようである。しかし，原田(2009)は先の指摘の一方で，「注目・賞賛欲求」が過敏型，無関心型どちらにも共通することを指摘した谷(2006)の研究に触れ，「適応，不適応に関してどちらとも言い切れない概念である」とまとめている。

また，自己愛傾向の問題は，職場や学校への適応困難や引きこもりを呈する事例(高橋・伊藤,2003; 近藤,2000 など)の中でしばしば論じられている。付随して，メンタルヘルスの観点から，自己愛傾向をメンタルヘルスに大きな影響を及ぼす要因の一つとして取り上げている研究(川原・永井,2012; 小林・西垣・相澤・橋本,2003 など)が少なくない。こうした研究では，自己愛の問題をもつ人物像として，「脆弱な自己愛を保護するために対人関係や社会的活動からひきこもる」(近藤,2000)一方で，「他者の立場に立つ事が困難で」「保護されることを求める癖がついている」(坂口・朝井,2008)と同時に，「自分こそ被害者であると主張して譲らない」(小林・西垣・相澤・橋本,2003)と述べられ，周囲に対する回避性と訴求性とが見られる。こうした現象像は対人過敏性を主とする過敏型の現象像を優位に示していると思われ，過敏型自己愛傾向の高い人が社会的場面を回避する一方で自らに保護や配慮を求める強い欲求を抱き，場面によってはその欲求を強固に表明する可能性を示していると考える。また，川原・永井(2012)は「自己愛的な性格を強く帯びる人」について，自ら相談機関を訪れるようなことは「少ないと思うが」,「それでいて極めて心理的に不安定」であること，また相談に「行くとすれば，ほぼ 100%自分の意見を認めてくれる人」の元であろうという見解を示し，本人にメンタルヘルスの問題があることを指摘した上で，その人の「自己愛的言動…に振り回されてしまう」周囲も「メンタルヘルスの多大な問題をかかえることになる」と述べている。ここで描かれている現象像は奔放で横柄な面を持つ無関心型に通じると思われるが，心理的に不安定であるという指摘からは，無関心型の現象像が表面上の現象像だけではとらえきれない脆弱性をもっていると考えられる。また，過敏型についても無関心型についても，自己愛傾向の現象像を理解する際には，他者への影響，あるいは他者との関係性にも着目することの有用性が示唆されている。

第 4 節　自己愛の概念の整理

自己愛の概念の整理に先立ち，これまでに検討した内容を簡単に振り返る。本研究では，理論的側面と現象像の 2 側面，および健康性と不健康性，臨床水準と非臨床水準，無関心型と過敏型という 3 つの視点から，自己愛の概念を検討してきた。検討の結果，自己愛を次のように整理する。自己愛は健康性と不健康性を有するが，双方は質的に異なる。不健康的己愛は無関心型と過敏型の現象像を個人別の混成で伴い，臨床水準から非臨床水準にまで至る。臨床水準で診断基準を伴って概念化されている不健康的自己愛の現象像は NPD である。NPD の現象像は無関心型に近似する。一方，他の精神疾患の基底要因に指摘される不健康的自己愛の現象像は，本研究では準臨床水準の自己愛傾向と位置づけた。これらをまとめると表 5 のようになる。検討を通して，より明確に自己愛の概念を整理するために，自己愛の健康性と不健康性の質的な差および健康的な自愛の成立過程と現象像，また，自己愛傾向の健康性と不健康性，そして，無関心型，過敏型の健康性と不健康性についていま少し考察を進める有用性があると考えた。以下では表 5 を前提として，上記 3 点について本研究における見解を示す。

自己愛の健康性と不健康性に質的な差があると位置づけたが，差そのものの様相が不明瞭である印象を受けたので，健康的自己愛を主張する立場における不健康的自己愛の成立過程および現象像と健康的自己愛の成立過程との対比から，健康的自己愛の現象像を検討する。

不健康的自己愛の現象像は，他者の注目と賞賛に非常に依存的である一方で，共感性に欠け，誇大性をもった自己を呈するという特徴がある。こうした現象像に関連して，中村(2004)は，自己愛の問題を「自己の拡大(本研究における誇大な自己)そのものよりも，拡大した自己イメージを他者に要求することが本質的である」と述べている。しかし，相澤(1999)が健康的自己愛について「本来不健康的な自己愛であるにも関わらず，天才的な才能のお陰で適応が成立しているもの」が含まれると言及していることからうかがわれるように，仮に誇大な自己を周囲に顕示していても，周囲に示される誇大性に当人の能力がある程度見合っている間は，その人の横柄さや能力の誇張が許容，黙認されることもあるだろう。すると，不健康的自己愛の本質的な問題は，誇大な自己に基づく賞賛を他者に要求することに，さらに別の要因が加わると考えられる。

理論的背景を振り返ると，Kernberg や Kohut は，誇大な自己の成立に関して次のように説明している。

人は幼少期に生来の欲求の適切な充足体験によって万能感を得る。あるいは欲求を満たしてくれる他者を体験することで，その他者が理想的な存在であると感じる。そして，後の体験の中で理想的な他者による適度な欲求の不充足を体験することで，当初の非現実的な万能感や理想が現実味を帯びて行く。また，このような過程が想定されるために，不適切な充足を体験すると，理想的な他者を体験することができず，自らが望む理想的な他者のイメージと融合したり，偏った賞賛によって万能感が増長したりして，誇大な自己が成立するとも述べている。すなわち未熟な誇大性や理想的な他者のイメージの現実的な調整には，他者の存在が内在されているか否かが要点となると考える。

表 5.　本研究における自己愛の構成

自己愛	健康的自己愛			
	不健康的自己愛		無関心型	過敏型
		非臨床水準	自己愛傾向	
		準臨床水準	NPD 以外の精神疾患等を伴う自己愛傾向	
		臨床水準	自己愛性パーソナリティ障害(NPD)	

ところで，こうした過程における適切な充足と不適切な充足は，自己が成立した後にその人が体験してきた満足と不満足の体験を遡行して総合的に評価したもので，その時々の満足と不満足の体験が，ただちに自己の成立を決定するものではないだろう。それぞれの人が日々の生活の中で得る満足と不満足の体験が相互に関わり合いながら作用して，自己，延いては自己愛の性質が成立していくのではないだろうか。例えば，誉められたいと言う欲求に対して満足の体験ばかりではその人の誇大性は非現実的に増長してしまう。これは Kohut が示す自己の誇大性に重なる。逆に，不満足の体験ばかりでも，自分の中の理想的なイメージと融合して，誇大自己を作り上げることになる。こちらは Kernberg が示す誇大自己に近いだろう。両者に共通するのは，万能感に満ちた誇大な自己が，すなわちその人本人として成立する点である。「特別で素晴らしい自分」が普段の自分よりも優れていると感じられるからこそ高揚感が生じてやる気も生じるが，実際の自分が「特別で素晴らしい」と感じられている場合は普段と変わりがないだろう。つまり不健康的な自己愛における誇大感は当人にとっては誇大ではなく，他者から見た場合にその人の実際以上であるように感じられる状態を指す。すなわち，生来の欲求の不適切な充足によって，誇大性が増長し，また現実的に調整されないことで，実際の自分と誇大な自己とが部分，全体を問わず融合し，承認，賞賛の欲求を伴うと不健康的自己愛が成立すると考える。さらに顕示される誇大性とその人の実際とが周囲との関係の中で許容される範囲を逸脱すると，自己愛の問題を呈すると想定する。このような考えが適用できるとすると，現実的基盤をもたない自己に賞賛を得ようとする点で，現実的基盤をもった自己に対する肯定的評価である自尊感情と異なると考えると，自己愛傾向における健康性と不健康性を識別する際に有意義だろう。

健康的自己愛と不健康的自己愛の差を，誇大な自己が当人にとって実際以上に優れたものであると感じられているか否か，現実的に調整されているか否かという点に求めた。すると，自己愛傾向の健康性と不健康性についても一応の整理が可能と思われるので検討する。検討を通して，自己愛傾向は不健康的自己愛の臨床像が非臨床群にも見られるという指摘のもとに成立した概念と考えられた。そして本研究では健康的自己愛を，誇大自己が実際の自分よりも優れたものであると感じられ，そのような自分を感じることでやる気や向上心に繋がるという過程を想定した。このように誇大自己との差が自覚され，さらに健康的な推進力をもつためには，自分に対する相応の肯定的感覚と現実的基盤を備えた上でそれよりも優れた自分を，接近可能なイメージとして想像する能力が求められる。この点を理論的背景から見ると，適切な欲求の充足体験による理想や万能感の獲得と現実的調整を経験していることが必要と考えられる。そのため自己愛傾向と健康的自己愛との間には理論および現象像上の差異があるととらえ，自己愛傾向は低度であることによって不健康性の低さを示し，相対的に健康性を押し上げるが，健康的自己愛とは異なる概念であると

のとらえ方が適切と考える。

次に，先行研究の知見からうかがわれる無関心型の健康性，過敏型の不健康性について考察する。こうした知見に相応の実態が伴っていることは間違いがないと思うが，無関心型が示す健康性については，自己報告式の質問紙調査からただちに健康的であると位置づけられることがあれば，その点には懸念がある。それというのも，理論的背景を振り返ると，自己愛傾向は自己愛の問題を呈する臨床像から展開した概念であり，誇大な自己と承認，賞賛欲求，共感性の欠如を核とした，不健康的自己愛の現象像を示す概念と思われるためである。また，理論構築の際に対象とした患者の違いから，無関心型は比較的重篤な，過敏型は相対的に社会的機能や人格水準の高い臨床像が反映されている(Gabbard,1994)と指摘されている。さらには，Kernberg の示す自己愛の臨床像が，「誇大感・万能感を伴い，他者への依存を否認するような自己破壊的な」(上地,2009)部分を有することから，無関心型の臨床像をかなり重篤な臨床像であるとする見解(上地,2009)もある。このような点が自己愛傾向にも当て嵌まるとするならば，調査研究上にうかがえる無関心型の健康性と，理論上の知見に不一致が生じることになる。

ここで考えられるのは，無関心型の誇大自己と自己報告による健康性との間に疑似的な親和性が生じた可能性である。質問紙調査等において，優越感と万能感に満ちた自己をもつ無関心型の人に自分について尋ねた場合，ほとんど当然の帰結として自信に溢れた好人物が描かれるのではないだろうか。過敏型も誇大性を有する点では同様のことが言えるが，過敏型が自己の一部分に誇大性を抱えるのに対して，無関心型は自己そのものが誇大性を帯びるとされる。この点を鑑みると，至って誠実な回答として高い健康性が示されることもにわかには否定できないだろう。

しかし，このように報告される健康性は，無関心型の人が周囲との関係の中で示す健康性とは異なると考えられる。なぜなら無関心型は「他者の反応に気づくことがな」く「傲慢で攻撃的」(Gabbard,1994)な特徴をもつとされる。また川原・永井(2012)は大学生のメンタルヘルスの問題を検討する中で，身勝手な「自己愛的言動」を示す自己愛傾向をもつ人について，彼らがメンタルヘルスの相談に訪れることは少ないと思われるが，「それでいて極めて心理的に不安定である」と指摘した上で，その人の言動に振り回されれしまう周囲の人も「メンタルヘルスに多大な問題を抱えることになる」と指摘している。ここで指摘される自己愛傾向は無関心型の現象像と近似すると言えるだろう。すなわち，無関心型は当人が心理的に不安定でありながらも表面的には高い健康性を示し，周囲の人はその言動に振り回されてしまうという事態が考えられる。この点は，NPD が自覚症状をもつことは少なく，他の症状を主訴に治療機関を訪れる(関真,2006; 山田,2006 など)という指摘にも重なるように思われる。このような点から, NPD と同質の連続体である無関心型についても，自己報告による健康性の意味づけは慎重に行われた方が，現象像をより詳細に明らかにするために有意義であると考える。

もちろん，調査研究上で無関心型が示す健康性は日常生活において一定の実態を伴ったものでもある。重要なのは，こうした実態を伴う疑似的な健康性が，誇大自己に由来し周囲の反応に対する無関心さを伴うと考えた場合に，測定された健康性は，その人の無関心さ，横暴さが周囲との関係の中で許容される範囲においてのみ認められると考えられる点

にあると言えるだろう。また，過敏型についても，調査研究上の不健康性は Kohut が示す現象像に相応するように思われるが，それでもなお表層に示される対人過敏性と背景にある誇大性とを考慮した検討が望まれるだろう。

なお，先にも触れたように，NPI で測定される現象像がどちらかといえば無関心型を強調している一方で，従来の研究では多くの場合，過敏型の測定に NPI-S の下位尺度「注目・賞賛欲求」が使用されている点には，過敏型の現象像を十分に測定できていないという問題も考えられる。原田(2009)の指摘にもある通り，承認，賞賛欲求は過敏型にも無関心型にも共通してみられるため，過敏型の詳細な検討のためには，潜在的な誇大性など，他の現象像の特徴も包含した尺度による測定がふさわしいと言えるだろう。

以上に自己愛傾向と自己報告式の健康性を示す諸尺度との関連を検討する際には，現象像に応じた疑似的な親和性を考慮して慎重に結果を位置づける必要があることを述べた。また，本質的な問題は個人と他者との関係の中に認められることから，自己愛傾向の現象像をさらに詳細に検討するためには，他者との関係にも注目していく必要があることが示唆された。

第 5 節　まとめ

本研究では自己愛の概念の混乱について問題点を指摘し，先行研究を概観する中で，検討，整理を試みた。理論的側面と現象像的側面の 2 つの側面から接近することで，自己愛の概念の位置づけと自己愛の健康性，不健康性の異同に対する見解を提示した。また，自己愛の健康性と不健康性について，誇大自己と現実自己の融合の存否から一応の定義を行う中で，自己愛傾向を取り上げた研究上にうかがわれる疑似的な健康性の取り扱いについて慎重を要することが示された。この点には，自己愛傾向をより明確に理解する上で有用な視点の 1 つになり得ると考える。加えて，自己愛傾向が NPD から同質性と連続性をもって不健康的な現象像を示すことを指摘した。さらに，種々の問題が他者との関わりの中で顕現する可能性があることが示唆された。こうした点から自己愛傾向を検討する際には，主観的な質問紙調査だけでなく，個人と他者との関係にも注目して面接調査や投映法などの手法から現象像を描き出していく必要があるだろう。なお，本研究で示した自己愛に関する仮説的な見解は，今後，理論上，調査研究上の知見をさらに広範に精査することで，一層自己愛の現象像の実態に即した分類を可能とする余地を残すものであることを付記したい。

第 2 章　研究Ⅰ：自己愛傾向と外向・内向攻撃性との関連

第 1 節　問題と目的

自己愛の概念を整理する中で，不健康的自己愛をもつ人は，他者からの評価に強く依存する一方で，共感性に欠け，誇大な自己と現実自己とが融合した様態を示すという仮説的な見解を示した。この現象像は，同質の連続体である自己愛傾向にも同様に認められるものと考える。

さて，先行研究では，自己愛傾向を示す人が「自己愛の傷つき」を契機として諸問題を顕現する(佐々木,1998; 相田・深尾,2008 など)こと，対応には自己愛の傷つきと自己愛的憤怒の視点が必要である(ウォルフ,1988 安村・角田訳,2001)ことが指摘されている。ここで指摘される自己愛の傷つきは，誇大自己の傷つきとも言い換えられるだろう。たとえば，現実的な基盤をもたない「誰しもにもてはやされるべき素晴らしい自分」が等身大の自分として感じられ，他者に承認と賞賛を求める人がいたとして，素晴らしいはずの自分がどうしても越えられない現実の壁に行きあたったり，期待した賞賛が得られなかったりする時に外傷的な感覚を生じることがあるだろう。このような現象を指して，自己愛の傷つきと称されるのである。一方，自己愛的憤怒とは，自己愛が傷ついた際に生起する激しい攻撃性で，承認の欲求を満たさなかった他者に対して向けられるものとされる。

このような点から，非臨床群の自己愛傾向を検討する際，攻撃性との関連を明らかにすることは，自己愛傾向が高い人が諸問題を呈した場合の問題の理解と対応に資すると考える。以下では攻撃性の概念について確認したのち，先行研究の知見を踏まえて，無関心型と過敏型の自己愛傾向が外向，内向攻撃性とどのように関係しているのか，その関連を検討していく。研究 1 では自己愛傾向と攻撃性との関連を検討し，研究 2 ではさらにその下位尺度にも注目して検討を進める。

1.1.　攻撃性とは

攻撃の用語は「どんな形であれ，危害を避けようとする生活体に対して，危害を加えようとしてなされる行動である」と定義され(Baron&Richardson,1994)，それを起こす内的過程(認知，情動，動機づけ，パーソナリティなど)を攻撃性と呼ぶ。

人間の攻撃性に関する見方は，次のように，内的衝動説，情動発散説，社会的機能説という 3 つの立場に分類してとらえることができる(クラーエ,B.,1993 湯川編訳,2004)。

まず内的衝動説の立場では，攻撃的衝動としての怒りの研究や衝動の抑制機能に関する研究が行われている。特に後者の研究では，共感性に着目しての研究が挙げられる。例えば Obuchi,Ohno&Mukai(1993)では，被害者の哀願を聞いた場合とそうでない場合において，前者では電気ショックの投与が抑制されたという結果を提出している。逆に被害者によって事前に不快にさせられた場合においては，そうでない場合よりも強いショックが投与されたという研究結果(Baron,R.A.,1979)もある。これらの研究から，共感性は相手に好意を抱いている場合に攻撃性を抑制させ，敵意を抱いている場合に増進させる機能があることが示唆されている。

次に情動発散説では，妨害された欲求の強さが欲求不満の強さに比例することや，欲求の強さは攻撃性を高めることが示唆されている(Sears,R.R.&Sears,P.S.,1939， Harris,M.B., 1974)。

また，社会的機能説では，攻撃行動を，ある目的を達する手段として選択されるものと考えている。この立場での攻撃的言動は，相手の意図を帰属させ，動機や性格を推測するといった過程で積極的に選択される手段とされる。例えば性格の個人差に関して，攻撃的言動を他者への強制力として選択しやすい人の特徴が検討されている。具体的には，専門性・地位・権威・個人的魅力の点での影響力の低さ(Tedeschi,J.T.,Gates,G.G.&Rivera,A.N.,1977)や, 自己評価の低さや自信の無さ(Feshbach,S.,1970)と攻撃的言動との関連が指摘されている。

さらに学習理論や精神力動論からの攻撃性の検討もなされており，特に精神力動論の立場では，攻撃性を広義の精神的エネルギーとして，さらに，生きる上での基盤と考えている。Jung,C.G.はエネルギーが内に向くか外に向くかの違いにより，外向的性格と内向的性格とに分け，双方の向性は全ての者にそれぞれのバランスで存在するとした(安立,2003)。

攻撃は従来，他者に危害を加えようとする意図的行動(大渕,1993)と定義されてきた。この定義には暗黙裡の了解として，①行動であること，②意図的であること，③背後に敵意や憎悪などのネガティブな感情が働いていること，④他者に向けられることの 4 項目が存在する。これら暗黙の 4 項目に関して，安立(2001)は以下のような再考察を行った。

①攻撃は行動か ; 例えば沈黙や過度に明るい振る舞いなど，一見すると攻撃的でない状態像の中に，怒りや拒絶，回避といった背景要因が見出される場合もある。攻撃が一概に行動であるとはいえない。

②攻撃は意図的か ; 欲動や衝動の調節は自我機能の一部であるが，自我が弱っている場合は統制機能も衰弱する。例えば第 2 反抗期などがこれに当たる。また，他者との関わりなどの外的要因も含めて検討する必要がある。攻撃が必ずしも意図的であるとは限らない。

③攻撃は敵対的感情によるか ; 怒りや敵意に基づく破壊的な側面もあるが，建設的・積極的な感情に基づく能動的な側面もある。否定的な面だけでなく，肯定的な面もとらえていく視点が必要である。

④攻撃は他者に向けられるか ; 外界の対象(物質や他者)に限らず，自分自身の身体や，内的な表象に対して向けられることもある。例えば自傷や摂食障害などがこれに当たる。

上記の考察を経て安立は, 攻撃性には①対象となる方向性(自己と他者), ②表出の有無(表出と保持)という 2 つの次元が想定されると結論づけた。さらにこの 2 次元に基づいて，以下のような分類を提示した(表 6)。

安立の分類では，まず攻撃性を肯定的な側面と否定的な側面とに大きく分けた上で，否定的な攻撃性が，自己に向かうか，他者に向かうかの次元と，攻撃性が表出されるか，抑制されるかの次元によって 4 種の攻撃性を設定している。本研究では自己愛傾向の無関心型，過敏型のそれぞれが，攻撃性の対象となる方向性や表出の有無において，特徴的な違いがあることを想定している。そのため，本研究においては，この安立(2001)の分類を参考に，特に方向性を明確にする目的で，以降本研究では，自分の身体や自己に向けられる攻撃性に内向攻撃性，他者や外界の対象に向けられる攻撃性に外向攻撃性の語を用いたい。

表 6.　攻撃性の分類(安立,2001)

能動性	自尊感情を持ち，外界への適応を発動させる行動
自己攻撃性 - 表出傾向	自己に向けられる破壊的・衝動的行動
自己攻撃性 - 保持傾向	自己否定感や罪悪感といった自己に向けられる否定的感情
対象攻撃性 - 表出傾向	他者に向けられる破壊的・衝動的行動
対象攻撃性 - 保持傾向	他者から攻撃される恐れ，他者に対する懐疑的感情

※この表は，安立(2001)を総覧した上で，本研究にて作表した。

1.2.　自己愛傾向と攻撃性との関連

これまでの研究においては，NPD の臨床像が強い攻撃性を示すことから不健康的な自己愛と怒りや攻撃性との関連が注目されてきた。さらに NPD の特徴が健常者にも見られるという指摘(Raskin&Hall,1979)から，自己愛傾向と攻撃性との関連(相良・相良,2006; 福島,2007; 山崎,2008 など)も数多く検討されてきた。こうした研究の多くは NPI-S を用いて行われ，NPI-S がどちらかというと無関心型自己愛傾向(以下，無関心型)をよく識別する尺度であることから，研究では主に無関心型と攻撃性との関連が明らかにされてきたとも言えるだろう。

無関心型と攻撃性との関連を検討した先行研究(相良・相良,2004; 福島,2007 など)において，結果はほぼ一貫して無関心型の高い者が高い攻撃性を有することを示しており，下位尺度の中では特に言語的な攻撃性の高さと強く関連することが報告されている。ところがこうした研究では同時に，自己愛傾向の一側面である優越感や有能感の高い者が，認知的な攻撃性としての敵意をもちにくいとの結果も示されている。これらの結果から無関心型の人は，自分が周囲の人達よりも優れていると確信しているので他者に否定的な信念をもつことが少なく，他者にどう思われるかにも頓着しないために言葉による攻撃性を表出しやすい傾向を備えていると考えられてきた。

一方，過敏型自己愛傾向(以下，過敏型)と攻撃性との関連を検討した研究は多くはなく，双方の関連はほとんど報告されていない。しかし日本では過敏型の自己愛傾向が多くみられること(福井,1998)が指摘されている。同時に過敏型はスチューデント・アパシーや不登校，対人恐怖や摂食障害など，青年期に多く見られる社会的不適応との関連(中山,2004)も指摘されていることから，近年では無関心型だけでなく過敏型に関する研究にも注目が集まりつつあると言えよう。

過敏型と攻撃性との関連に関して，中川(2004)は過剰な攻撃性を表出する青年への援助方法を考える中で過去の事例を検討し，いじめや不登校，家庭内暴力などのきっかけについて「他者からの低い評価を敏感に感じとり『自己愛』が深く傷つき，その傷つきが他者への攻撃へ変貌する」と述べており，他者の反応に敏感な特徴を示す自己愛傾向が他者への攻撃性を示すことを示唆している。また一方で大野(2008)は密かに誇大感や他者操作性を示しつつ過食嘔吐や自殺企図を繰り返す過敏型の事例について報告しており，このことから過敏型は誇大な自己をもつと同時に，自分をいためつけるような性質ももつ可能性がうかがえる。

関連して山崎(2008)は，過敏型は他者への攻撃性をもちながらも周囲に気兼ねする性質のために表出が抑制されていたり，外に向かわず自分に向けられていたりする可能性があると考えて，攻撃性の方向に着目して無関心型，過敏型との関連を検討した。攻撃性の方向とは，①罪悪感，自責感，自傷，過食・拒食など自分の心身に向けられる内向攻撃性と，②暴力，暴言など他者へ向けられる外向攻撃性の 2 方向である。この研究では，過敏型は無関心型よりも高い攻撃性をもつ可能性があり，過敏型はその中でも特に内向攻撃性と関連するという結果が示された。同研究において過敏型と外向攻撃性との関連は示されず，山崎(2008)はこの結果の背景について，外向攻撃性の尺度の中に複数の要素が混在する可能性を挙げている。本研究ではこの外向攻撃性尺度の問題に加えて山崎(2008)で用いられた NPI-S が無関心型の特徴を主としているために過敏型を十分にとらえられなかった可能性もあるのではないかと考える。

攻撃性と自己愛傾向の測定尺度については後述するものとして，自己愛傾向と攻撃性との関連についての議論に戻ると，中川(2004)でも大野(2008)でも事例の人物達が問題行動を生じる以前に周囲から「大人しくて目立たない」「どこにでもいる普通の子」，「よい子」と証言されていたことに言及しており，攻撃性が実際の表出に至るまでは攻撃性の表出が抑制されていたことがうかがわれる。過敏型が自分を表に出さず内気で大人しくしていることは，誇大な自己を維持するために自己表現よりも他者からの否定的反応の回避が優先された結果であると考え，そして攻撃性の表出も一種の自己表現であるとするならば，攻撃性の表出によって他者から否定的反応を受ける可能性があり，かつその表出を抑制することで誇大な自己を維持できる限りにおいては，表出の抑制が選択されるのではないだろうか。

ここで，山崎(2008)では外向攻撃性の表出が抑制，内向すると仮定したものの，他者からの反応という観点で考えれば自傷行為や自責的発言などの内向攻撃性の表出も他者の否定的反応を喚起する場合が多いと言えるだろう。すると過敏型の攻撃性は内向，外向を問わず表出が抑制される傾向にあり，一方で他者の反応に注意深く恥や屈辱を受けたと感じやすい特徴もあることから，普段は表出せずとも認知や情動などの内的な側面で攻撃性が生じているのではないだろうか。そして表出の抑制によって誇大な自己が維持される程度を，恥や屈辱によって生じる攻撃性が上回れば，あるいは攻撃性の表出が他者からの否定的反応を伴う危険性がなければ，内的に抑制されていた攻撃性が表出する可能性があるものと考える。

1.3.　自己愛傾向と攻撃性の測定尺度

山崎(2008)を含め自己愛傾向に関する従来の多くの研究では, 過敏型と無関心型を測定する際に自己愛人格目録短縮版(Narcissistic Personality Inventory-Short version; NPI-S 小塩,1998)を使用している。この尺度は NPI の日本語短縮版であるが，そもそも NPI は DSM による NPD の診断基準に基づいている。さらにこの診断基準が Kernberg の理論に近似した無関心型の特徴に近いことから, NPI-S はどちらかといえば無関心型の特徴を示すものと考えられる。NPI-S は全 30 項目からなり,「注目・賞賛欲求」「自己主張性」「優越感・有能感」という 3 つの下位尺度で構成される。小塩(2004a)の 2 成分モデルによって,「注目・賞賛欲求」は過敏型,「自己主張性」は無関心型,「優越感・有能感」は自己愛傾向の全体的な高さを反映し，前者の 2 つの下位尺度を両極とする軸と，後者の「優越感・有能感」の高低を両極とする軸とで自己愛傾向を分類している。しかし NPI-S はその来歴から無関心型を主としていると考えられる。また過敏型には,「注目・賞賛欲求」によって測定される性質のみならず，Gabbard(1994)の分類から，抑制的で内気な性質，恥や屈辱を感じやすい性質なども想定される。

この点に関して上地・宮下(2009)は，過敏型の特徴を示した Kohut の理論に基づいて自己愛的脆弱性尺度(Narcissistic Vulnerability Scale; NVS)短縮版を作成した。NVS は全 20 項目で「承認・賞賛過敏性」「自己顕示抑制」「潜在的特権意識」「自己緩和不全」の 4 つの下位尺度で構成される。自己愛的脆弱性とは過敏型が持つ，他者の反応に敏感で抑制的な，自己の脆弱な性質を指す。そこで本研究では，無関心型を従来の NPI-S の下位尺度「自己主張性」10 項目で測定し，過敏型の測定には NVS を使用することとした。

続いて攻撃性については，外向攻撃性の測定に日本版 Buss&Perry 攻撃性質問紙(the Japanese Version of the Buss&Perry Aggression Questionnaire; BAQ 安藤・曽我・山崎・島井・島田・宇津木・大芦・坂井,1999)を用いた。BAQ は全 24 項目からなり「身体的攻撃」「言語的攻撃」「敵意」「短気」の 4 つの下位尺度で構成される。本研究では外向攻撃性の測定のために全 24 項目を使用した。なお，当該尺度には回答を求めても分析には含まない項目(「かっとなって，物を壊したくなることがある」(「短気」),「人とよく意見が対立する」(「敵意」)が 2 つ設定されているため，分析に使用する項目は全 22 項目である。また，内向攻撃性の測定については，安立(2001)の攻撃性質問紙(本研究では Adachi Aggression Questionnaire の頭文字を取って，以下は AAQ と略記する)を使用する。AAQ は全 33 項目で「積極的行動」「猜疑心」「対象攻撃行動」「自責感」「自己破壊行動」の 5 つの下位尺度で構成される。「積極的行動」と「猜疑心」「対象攻撃行動」は外界の対象へ向けられる攻撃性(外向攻撃性)を測定し,「自責感」「自己破壊行動」は自分へ向けられる攻撃性(内向攻撃性)を測定するものとして AAQ は作成された。本研究では, 内向攻撃性の測定のために「自責感」7 項目と「自己破壊行動」5 項目を合わせた計 12 項目を使用した。NPI-S，NVS，BAQ，AAQ はすべて 5 件法であり,「とてもよく当てはまる」=5,「どちらかというと当てはまる」=4,「どちらともいえない」=3,「どちらかというとあてはまらない」=2,「全くあてはまらない」=1 として得点化された。

本研究で使用した各尺度については，表 7 のように整理することができる。

	表 7.　尺度名と下位尺度の詳細および項目例	全項目数(実用数)	測定対象
自己愛傾向尺度	自己愛人格目録短縮版(NPI-S)	30(10)	
	自己主張性　DSM-Ⅳ(APA,1994)の自己愛人格障害の記述のうち「自己の重要性に関する誇大な感覚」に相当する。 ・私はどんな時でも，周りを気にせず自分の好きなように振る舞っている。 ・私は，控えめな人間とは正反対の人間だと思う。 ・私は，自分の意見をはっきり言う人間だと思う。	10	無関心型
	自己愛的脆弱性尺度短縮版(NVS)	20	
	承認・称賛過敏性　他者から承認・称賛されるかどうかに過敏な傾向。 ・他の人から批判されると，そのことが長い間ずっと頭にこびりついて離れない。 ・自分の良い所をほめられたり認められたりしないと，自分に自信がもてない。 ・相手が私を避けているように思えると，私は非常に落ち込んでしまう。	5	過敏型
	自己顕示抑制　自己を表出・顕示することを恥ずかしく感じて抑制する傾向。 ・人前で自分のことを話したあとに，話した内容について後悔することがある。 ・他の人に自分のことを自慢するような話をしたあとで，後味の悪い感じが残ることがある。 ・だれかと話しているときには，自分の話題で時間を取りすぎてはいけないと思って気にしている。	5	
	潜在的特権意識　他者に特別の扱いや配慮を求め，それが得られないと不満や怒りが生じる傾向。 ・私は，周囲の人がもっと私の能力を認めてくれたらいいのにと思う。 ・まわりの人の態度を見ていて，こちらへの配慮が足りないと思うことがある。 ・まわりの人に対して「もっと私の発言を尊重してほしい」と思うことがある。	5	
	自己緩和不全　不安や感情を自分で緩和する力が弱く，その緩和を他者に求める傾向。 ・悩みや心配事があるときには，自分の中にとどめておけなくて，すぐだれかに話したくなる。 ・つらいことや苦しいことがあるときには，身近な人にそれを理解してほしいと強く期待する。 ・悩んだり落ち込んだりしたときに相談できる相手が身近にいないと，私は生きていけないと思う。	5	
攻撃性尺度	日本版 Buss&Perry 攻撃性質問紙(BAQ)	22	
	身体的攻撃　身体的な攻撃反応を測定する尺度。暴力反応傾向，暴力への衝動，暴力の正当化などを測定する項目から成る。 ・ なぐられたら，殴り返すと思う。 ・Ⓡどんな場合でも，暴力に正当な理由があるとは思えない。 ・ 人をなぐりたいという気持ちになることがある。	6	外向攻撃性 身体的側面
	言語的攻撃　言語的な攻撃反応を測定する尺度。自己主張，議論好きなどを測定する項目から成る。 ・ 意見が対立した時には，議論しないと気が済まない。 ・ 友達の意見に賛成できないときには，はっきり言う。 ・ 誰かに不愉快なことをされたら，不愉快だとはっきり言う。	5	外向攻撃性 言語的側面
	敵意　他者に対する否定的な信念・態度を測定する尺度。他者からの悪意や軽視など猜疑心や不信感を測定する項目から成る。 ・ 陰で人に笑われているように思うことがある。 ・ 私を嫌っている人は結構いると思う。 ・Ⓡ私を苦しめようと思っている人はいない。	6	外向攻撃性 認知的側面
	短気　怒りの喚起されやすさを測定する項目。怒りっぽさ，怒りの抑制の弱さなどを測定する項目から成る。 ・ いらいらしていると，すぐ顔に出る。 ・ かっとなることを抑えるのが難しいときがある。 ・ ちょっとした言い合いでも，声が大きくなる。	5	外向攻撃性 情動的側面
	安立(2001)の攻撃性質問紙(AAQ)	33(12)	
	自責感　自己否定感，罪悪感といった自己に向けられる否定的感情。 ・自分はだめな人間だと思う。 ・他人が不快そうにしていると，自分が悪かったのではないかと思う。 ・他人とのトラブルがあると，自分を責める方である。	7	内向攻撃性 認知・情動的側面
	自己破壊行動　自分に向けられる，破壊的で衝動的な行動。 ・自分を傷つけたくなる時がある。 ・無我夢中で乱暴な運転(車，バイク，自転車など)をしたいと思うことがある。 ・めちゃくちゃな行動をしたくなる時がある。	5	内向攻撃性 行動的側面

※R は逆転項目。※白地は本調査で使用した下位尺度を示す。

1.4.　目的

本研究では，自己愛傾向と攻撃性との関連を検討することを目的とする。この際，自己愛傾向については無関心型と過敏型の 2 つに分類し，過敏型を Kohut の理論に沿ってとらえる。攻撃性については攻撃性に内向と外向という 2 つの方向を想定する。

攻撃性の方向に注目した検討には，既に同様の視点で行われた山崎(2008)の研究がある。本研究の研究 1 では，山崎(2008)をふまえて，攻撃性の方向性を想定した検討が調査の対象者などの条件を変えても有効であるかといった一般化可能性についても，互いの結果を比較しながら検討する。その中で過敏型については，注目や賞賛への欲求という性質だけでなく，抑制的な性質や屈辱を感じやすい性質といった他の性質も包括的にとらえることで，山崎(2008)で報告された過敏型と攻撃性との関連が同様に認められるかどうかを検討したい。その際に，無関心型と外向攻撃性とは正の関連をもつこと，過敏型は内向攻撃性とも正の関連をもつことを想定した。研究 2 では研究 1 の結果を元に，無関心型と過敏型とが，内向と外向の攻撃性の下位側面とそれぞれどのように関連しているのかについて検討を行う。その際に，過敏型が自己表現を抑制する背景には他者からの否定的反応を避けるという目的があること，攻撃性の表出が一つの自己表現であること，攻撃性の表出は他者の否定的反応を喚起しやすいことを仮定して，過敏型は攻撃性を有するものの他者からの否定的反応を避けるために表出の次元ではみられず，内的な次元でのみでみられることを想定した。なお，自己愛の現象像に関しては，双方を類型的に，無関心型と過敏型として扱う立場と，特性的に，誇大性，過敏性(評価過敏性)と扱う立場(相澤,2002; 中山;2007 など)がある。本研究では後の調査的検討において双方を類型的に扱った質問紙を使用するため，用語を統一する目的で無関心型，過敏型と表す。また，分析の際には特性的なとらえ方も念頭に置きながら検討を進めたい。

第 2 節　研究 1

2.1.　方法

1)　調査協力者・調査時期

大学生 102 名に対して，2010 年 6 月に授業時間に質問紙調査を配布し，その場で回答を求めた。回答に不備のあった質問紙を除き(回収率 96%)，分析対象は 96 名(男子 40 名，女子 56 名)とした。

2)　測定尺度

無関心型の測定に NPI-S(小塩,1998)から下位尺度の「自己主張性」10 項目を，過敏型の測定に NVS(上地・宮下,2009)から全 20 項目を，外向攻撃性の測定に BAQ(安藤ら,1999)から全 24 項目を，内向攻撃性の測定に AAQ(安立,2001)から下位尺度の「自責感」(7 項目)と「自己破壊行動」(5 項目)の計 12 項目を使用した。

2.2.　結果

1)　各尺度の信頼性の分析と自己愛傾向における過敏型と無関心型の群選別

各尺度の信頼性検討と自己愛傾向における過敏型と無関心型の群選別のため，それぞれの尺度の α 係数を算出し，信頼性を低下させる項目を NVS から 2 項目，BAQ から 7 項目，AAQ から 1 項目削除した。結果，NPI-S で α = .82，NVS で α = .76，BAQ で α = .76，AAQ で α = .71 となり，各尺度でそれぞれ満足できる信頼性が確認された。そのため，攻撃性に関する BAQ，AAQ について，各尺度全体の項目素点から合計得点を算出した。つまり，外向攻撃性得点として BAQ 全 17 項目，内向攻撃性得点として AAQ 全 11 項目の得点を合計した。

自己愛傾向における過敏型と無関心型の群選別においては，NPI-S の下位尺度「自己主張性」10 項目，NVS の全 18 項目の得点を合計し，NPI-S 合計点を無関心型得点，NVS 合計点を過敏型得点とした。その上で，無関心型得点と過敏型得点のそれぞれを中央値によって二分し，無関心型高群(50 名)と無関心型低群(48 名)，過敏型高群(51 名)と過敏型低群(47 名)にとした。また，各自己愛傾向得点と外向攻撃性と内向攻撃性のそれぞれについて，平均値と中央値，標準偏差とニュートラルな値を算出した(表 8)。ニュートラルな値は，それぞれの尺度の項目に評価段階の中央の値で回答した場合の合計点である。本研究で使用した尺度は全て 5 件法であったため，それぞれの尺度の使用項目に中央の値 3 を掛けた数がニュートラルな値として表記されている。

無関心型と過敏型それぞれの平均値と中央値とは近似した値が得られた。また，中央値とニュートラルな値をみると，無関心型は中央値とニュートラルな値が同一であったのに対し，過敏型は中央値がニュートラルな値よりも高い値を示した。結果，過敏型は比較的高い値を境に高群と低群が分かれることとなった。続いて外向と内向の攻撃性得点における平均値とニュートラルな値を比較すると，外向と内向の攻撃性共に平均値がニュートラルな値よりも低い値を示した。

攻撃性に関する BAQ, AAQ については, 各尺度全体の項目素点から合計得点を算出した。つまり，外向攻撃性得点として BAQ 全 17 項目，内向攻撃性得点として AAQ 全 11 項目の得点を合計した。

2)　無関心型および過敏型と外向・内向攻撃性との関連

外向攻撃性と内向攻撃性の各得点について，無関心型(高低群の 2 水準)×過敏型(高低群の 2 水準)の 2 要因分散分析を行った(図 2~3)。なお，図の作成に当たって，尺度ごと項目数の多少，および調査協力者の得点分布に従って，最高値と最低値が異なり検討の際の明瞭性に欠けると考えられたので，以下では数値を項目数で割り，それぞれの結果に共通して 1~5 までの評価段階を縦軸として図示する。すなわち，図におけるニュートラルな値は 3 となり，これに項目数を掛けた数値が，文中のニュートラルな値と一致する。

外向攻撃性と内向攻撃性の各得点共に，無関心型と過敏型との間に交互作用は認められなかった($F(1,92)= .14, n.s.$), $F(1,92)= 2.76, p= .10$)(図 2,図 3)。外向攻撃性については，無関心型($F(1,92)= 6.48, p< .05$)と過敏型($F(1,92)= 30.74, p< .01$)の主効果がいずれも有意であり，無関心型も過敏型も共に高群が低群よりも外向攻撃性が高かった。ニュートラルな値を見

ると，過敏型では低群がニュートラルな値よりも低い傾向となり，無関心型では過敏型高群のみがニュートラルな値よりも高い傾向となった(図 2)。内向攻撃性については，過敏型($F(1,92)= 30.74, p< .01$)の主効果のみが有意であり(無関心型で $F(1,92)= 1.11$, *n.s.*), 過敏型の高群が低群よりも内向攻撃性が高かった。ニュートラルな値を見ると，過敏型では高群がニュートラルな値よりも高い傾向となり，無関心型では低群のみがニュートラルな値よりも低い傾向となった(図 3)。

表 8. 自己愛傾向と攻撃性の得点の傾向（*N* =96）

	低群	高群	平均値	中央値	標準偏差	ﾆｭｰﾄﾗﾙな値
無関心型	46	50	30.84	30	7.07	30
過敏型	44	52	57.32	57	13.08	54
外向攻撃性	—	—	48.54	—	11.04	51
内向攻撃性	—	—	31.95	—	8.95	33

※低群と高群の値は人数を示す。

※中央値をとる対象者は，一律に高群へ含めた。

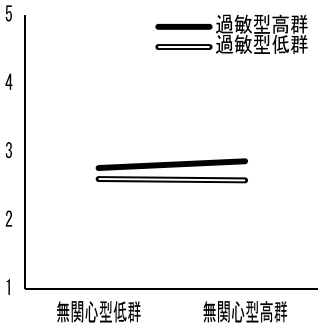

図 2．無関心型および過敏型各群での外向攻撃性合計

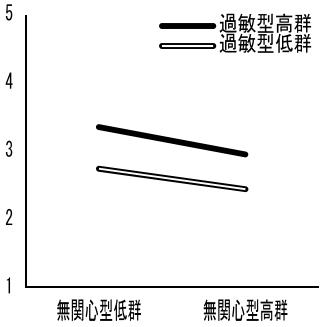

図 3．無関心型および過敏型各群での内向攻撃性合計

2.3.　考察

自己愛傾向のニュートラルな値について，日本では過敏型の自己愛傾向が良く見られるとの指摘(福井,1998)があり，本研究で無関心型ではニュートラルな値よりも低く，過敏型では高い値が示されたことは，この指摘と符合するようにも思われる。

自己愛傾向と攻撃性の関連については，外向攻撃性において無関心型と過敏型共に増幅効果が認められ，内向攻撃性においては過敏型のみに増幅効果が認められた。この結果から過敏型については，他者からの反応に敏感だったり，特別な配慮を求め，それが得られないと怒りや不満を感じたり，不安や感情を緩和する力が弱く，感情の緩和を他者に求めたり，自己顕示を行うことに恥を感じて抑制したりする(上地・宮下,2009)自己愛傾向が高い者は，外向，内向共に攻撃性を促進することが示唆された。特別な配慮が得られないと他者に怒りや不満を感じる特徴は外向攻撃性と関連するように思われる一方で，他者の反応に敏感で自分を抑制するといった特徴などからは内向的な印象を受ける。外向と内向どちらの攻撃性も促進したりすることから，過敏型には外向攻撃性を促進する特徴と内向攻撃性を促進する特徴とが混在する可能性がうかがえるように思われる。続いて無関心型については，自分の重要性を誇大にとらえて自分の業績や才能を誇張する(APA,1994)自己愛傾向の高い者は外向攻撃性が高いことが示唆された。無関心型が周囲を気にしないタイプ(上地,2009)であることと，他者への攻撃性を促進する効果をもつこととは，一見すると矛盾した結果であるように思われる。しかし無関心型には自己の重要性に関する誇大な感覚によって自分の業績や才能を誇張する特徴があり，NPI-S の「自己主張性」がこの特徴に相当している(小塩,1999)ことを考えると，誇張された自己主張が周囲との摩擦を生じ，なおその主張を押し通そうとすることが他者への攻撃性に繋がるのではないだろうか。さらにこの様な特徴は自分を主張するという周囲への働きかけを示すものであり，自分に対する働きかけを直接的に示すものではない。このために内向攻撃性との関連はみられなかったのではないかとも考える。一方で内向攻撃性には，有意性はないものの，無関心型の傾向が高く過敏型の傾向が低い場合に内向攻撃性を抑制する可能性もうかがえる。この点から，過敏型と無関心型とはどちらも外向攻撃性を促進し，同時に過敏型は内向攻撃性を促進する一方で，過敏型の特徴が低く，無関心型の特徴が高く示されることで内向攻撃性を抑制する効果をもつことが示唆される。内向攻撃性を促進する過敏型の特徴が他者の反応に敏感であったり自分を抑制したりする点にあるとすると，無関心型の特徴が自分を主張する点であることから，攻撃性が他者に対して作用する分，内向攻撃性が抑制されるのかもしれない。

第 3 節　研究 2

3.1.　方法

1)　調査協力者・調査時期

大学生 112 名に対して，2012 年 5 月に授業時間に質問紙を配布し，その場で回答を求めた。回答に不備のあった質問紙を除き(回収率 71%)，分析対象は 98 名(男子 39 名，女子 59 名)とした。

2)　測定尺度

無関心型の測定に NPI-S(小塩,1998)から下位尺度「自己主張性」10 項目を，過敏型の測定に NVS(上地・宮下,2009)から全 20 項目を，外向攻撃性の測定に BAQ(安藤ら,1999)から全 24 項目を，内向攻撃性の測定に AAQ(安立,2001)から下位尺度の「自責感」(7 項目)と「自己破壊行動」(5 項目)の計 12 項目を使用した。

3.2.　結果

1)　各尺度の妥当性の分析

各尺度の妥当性の検討のため，主因子法による因子分析を試みた。因子抽出数は既存研究の下位尺度数に従って，NPI-S は 1 因子，NVS は 4 因子，BAQ は 4 因子，AAQ は 2 因子とした。また，因子回転については各尺度についてバリマックス回転とプロマックス回転の両回転を試みた。その結果，両回転でほぼ同様の因子が抽出された。ここではプロマックス回転の結果を示し，検討を行う(表 9～表 11 に NVS，BAQ，AAQ の順に因子分析結果を示した。NPI-S は 1 因子抽出のため表は省略し，文章で記述する)。

NPI-S1 因子には,「私は，控え目な人間とは正反対の人間だと思う。」(因子負荷量.882),「これまで私は自分の思う通りに生きてきたし，今後もそうしたいと思う。」(因子負荷量.861)などが高負荷を示した。「私は，自己主張が強いほうだと思う」(因子負荷量.350)が最も低い負荷を示した。NPI-S の下位尺度「自己主張性」全 10 項目は，項目によっては因子負荷量に多少の程度差はあるもののおおむね高負荷を示したと言えよう。NPI-S 因子の因子寄与率は 40.4%と 1 因子の因子寄与率としては高かったことも付記したい。次に，NVS4 因子では，第 1 因子は下位尺度「自己緩和不全」に該当する「不安を感じているときには，だれからから大丈夫だと言ってもらわないと安心できない」などが高負荷を示し，第 2 因子は下位尺度「承認・賞賛過敏性」に該当する「自分の発言や行動が他の人から良く評価されていないと，そのことが気になって仕方がない」などが高負荷を示し，第 3 因子は「他の人が私に接するときの態度が丁寧でないので，腹が立つことがある」など下位尺度「潜在的特権意識」に該当する項目が高負荷を示し，第 4 因子は「人前で自分のことを話したあとに，話した内容について後悔することがある」など下位尺度「自己顕示抑制」に該当する項目が高負荷を示した(表 9)。NVS4 因子は想定された 4 つの下位尺度に該当する因子が抽出されたと考え，下位尺度名をそのまま因子の解釈とした。ただし，因子間相関を見ると全体的に相関値が高く，各因子は単純構造とは言い難い結果であった。特に第 2 因子「承認・賞賛過敏性」の因子間相関では，第 1 因子「自己緩和不全」や第 4 因子「自己顕

示抑制」と.66 および.53 と高い値を示した。NVS4 因子は全て過敏型の下位尺度であり，各下位尺度が関連しながら過敏型を構成していくとも考えることができる。

攻撃性を測定する BAQ および AAQ については，まず BAQ4 因子では，第 1 因子は下位尺度「短気」に該当する「ばかにされると，すぐ頭に血がのぼる」などが高負荷を示し，第 2 因子は下位尺度「敵意」に該当する「友人の中には，私のことを陰であれこれ言っている人がいるかもしれない」などが高負荷を示し，第 3 因子は「友達の意見に賛成できないときには，はっきり言う」など下位尺度「言語的攻撃」に該当する項目が高負荷を示し，第 4 因子は「なぐられたら，なぐり返すと思う」など下位尺度「身体的攻撃」に該当する項目が高負荷を示した(表 10)。BAQ4 因子は 4 つの下位尺度に該当する因子と考え，下位尺度名を因子の解釈とした。因子間相関を見ると，第 3 因子「言語的攻撃」を除いてやや相関が認められたが，外向攻撃性の尺度である BAQ にあって「言語的攻撃」は他の攻撃性に比べて独立して機能しているとも考えられる。次に，AAQ 2 因子では，第 1 因子は「自分の皮膚をかきむしりたくなることがある」など下位尺度「身体破壊行動」に該当する項目が高負荷を示し，第 2 因子は「過去のことを振り返って後悔することが多い」など下位尺度「自責感」に該当する項目が高負荷を示した(表 11)。そのため AAQ 2 因子においても，他の尺度同様に下位尺度名を因子の解釈とした。因子間相関を見ると.54 と比較的高い相関を示しており，AAQ 2 因子が関連しながら内向攻撃性を構成していることが考えられる。

以上，自己愛傾向に関する NPI-S，NVS，攻撃性に関する BAQ，AAQ のいずれの尺度においても，因子の単純構造，因子間間相関にはそれぞれに程度の違いはあったが，各尺度が想定する下位尺度を因子として抽出でき，下位尺度の妥当性が認められたと考えられる。

2)　各尺度の信頼性の分析と自己愛傾向における過敏型と無関心型の群選別

各尺度の信頼性検討と自己愛傾向における過敏型と無関心型の群選別のため，各尺度全体ならびに下位尺度について α 係数を算出した(NVS，BAQ，AAQ の下位尺度については表 9～表 11 に表記)。まず各尺度全体の α 係数は，NPI-S で α = .85，NVS で α = .87，BAQ で α = .74，AAQ で α = .79 となり，各尺度でそれぞれ満足のできる信頼性が確認された。また各尺度の下位尺度については，NVS 下位尺度で.80～.87，BAQ 下位尺度で.68～.74，AAQ 下位尺度で.74～.79 であった。BAQ 下位尺度「言語的攻撃」においてのみ α 係数が.70 を下回ったものの.68 と極端に低い値ではなく，また他の下位尺度では.72～.87 と比較的高い値であることから，下位尺度においても信頼性が確保されたと判断した。

そのため，攻撃性に関する BAQ，AAQ については，各尺度全体ならびに下位尺度について項目素点から合計得点を算出した。つまり，外向攻撃性得点として BAQ 全 24 項目，内向攻撃性得点として AAQ 全 12 項目の得点を合計した。さらに，外向攻撃性の 4 つの下位尺度得点として BAQ 下位尺度「短気」「敵意」「言語的攻撃」「身体的攻撃」に該当する項目の得点を合計した。同様に，内向攻撃性の 2 つの下位尺度得点として AAQ 下位尺度「身体破壊行動」「自責感」に該当する項目の得点を合計した。

自己愛傾向における過敏型と無関心型の群選別においては，NPI-S の下位尺度「自己主張性」10 項目，NVS の全 20 項目の得点を合計し，NPI-S 合計点を無関心型得点，NVS 合計点を過敏型得点とした。その上で，無関心型得点と過敏型得点のそれぞれを中央値によっ

て二分し，無関心型高群(53 名)と無関心型低群(45 名)，過敏型高群(50 名)と過敏型低群(48 名)とした。また，各自己愛傾向得点と外向と内向の攻撃性得点のそれぞれについて，平均値と中央値，標準偏差とニュートラルな値を算出した(表 12)。

無関心型と過敏型の平均値と中央値とは近似した値が得られた。また，中央値とニュートラルな値をみると，過敏型は中央値とニュートラルな値が同一であったのに対し，無関心型は中央値がニュートラルな値よりも低い値を示した。結果，無関心型は比較的低い値を境に高群と低群が分かれることとなった。続いて外向と内向の攻撃性得点における平均値とニュートラルな値を比較すると，外向攻撃性は全体としても各下位尺度としても比較的低い平均値が得られたと言える。一方，内向攻撃性は，全体としてはやや低い平均値とはなっているが，下位尺度では「自責感」ではやや高い平均値が，「自己破壊行動」では低い平均値が示された。攻撃性の平均値とニュートラルな値について，外向攻撃性と内向攻撃性については研究 1 とおおむね同様の結果と言える。下位尺度得点においては内向攻撃性の「自責感」のみ，平均値の方が高くなった点が特徴であった。

表 9. NVS の因子分析結果(主因子法・プロマックス回転・因子パターン行列)

項目	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4
因子 1　自己緩和不全(α= .87)				
緩和 2 つらいことや苦しいことがあるときには，身近な人にそれを理解してほしいと強く期待する。	.81	.63	.50	.11
緩和 3 悩みや心配事があるときには，自分の中にとどめておけなくて，すぐにだれかに話したくなる。	.77	.45	.47	.12
緩和 4 精神的に不安定になっているときには，だれかと話しをしないと落ち着くことができない。	.74	.35	.33	.16
緩和 1 悩んだり落ち込んだりしたときに相談できる相手が身近にいないと，私は生きていけないと思う。	.74	.45	.36	.13
緩和 5 不安を感じているときには，だれかから大丈夫だと言ってもらわないと安心できない。	.71	.60	.40	.12
因子 2　承認・賞賛過敏性(α= .86)				
承認 5 自分の発言や行動が他の人から良く評価されていないと，そのことが気になって仕方がない。	.49	.81	.49	.40
承認 2 他の人から批判されると，そのことが長い間ずっと頭にこびりついて離れない。	.56	.76	.41	.22
承認 3 相手が私を避けているように思えると，私は非常に落ち込んでしまう。	.41	.75	.26	.32
承認 1 自分の良いところをほめられたり認められたりしないと，自分に自信がもてない。	.62	.72	.34	.20
承認 4 他の人が私の発言や行動に注目してくれないと，自分が無視されているように感じることがある。	.58	.61	.57	.32
因子 3　潜在的特権意識(α= .80)				
特権 1 まわりの人に対して，「もっと私の発言を尊重してほしい」と思うことがある。	.38	.38	.78	.19
特権 3 まわりの人に対して「もっと私の気持ちを考えてほしい」と思うことがある。	.55	.36	.77	-.02
特権 5 他の人が私に接するときの態度が丁寧ではないので，腹が立つことがある。	.27	.31	.62	.16
特権 4 私は，周囲の人がもっと私の能力を認めてくれたらいいのにと思う。	.37	.28	.62	.03
特権 2 まわりの人の態度を見ていて，こちらへの配慮が足りないと思うことがある。	.21	.18	.55	.10
因子 4　自己顕示抑制(α= .82)				
顕示 5 人と話したあとに「あんなに自分を出すのではなかった」と後悔することがある。	.21	.35	.14	.87
顕示 2 人前で自分のことを話したあとに，話した内容について後悔することがある。	.15	.41	.18	.80
顕示 4「自分のことを話しすぎた」と思って，自己嫌悪におちいることがある。	.17	.41	.22	.79
顕示 1 他の人に自分のことを自慢するような話しをしたあとで，後味の悪い感じが残ることがある。	.25	.66	.29	.50
顕示 3 だれかと話しているときには，自分の話題で時間を取りすぎてはいけないと思って気にしている。	.12	.42	.15	.43
因子間相関　因子 1		.66	.45	.27
因子 2			.43	.53
因子 3				.20

※項目の先頭は原版の因子名の略称を示す。

表 10. BAQ の因子分析結果(主因子法・プロマックス回転・因子パターン行列)

項目	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4
因子 1　短気(α= .74)				
短気 3　ばかにされると，すぐ頭に血がのぼる	.70	.54	-.04	.23
短気 4　いらいらしていると，すぐ顔に出る	.67	.15	-.02	.22
短気 2　かっとなることを抑えるのが難しい	.64	.30	.04	.21
短気 5　たいした理由もなくかっとなることがある	.59	.37	-.03	.34
短気 1　ちょっとした言い合いでも，声が大きくなる	.39	.03	.25	.04
因子 2　敵意(α= .72)				
敵意 6　友人の中には，私のことを陰であれこれ言っている人がいるかもしれない	.24	.75	-.02	.08
敵意 3　私を嫌っている人は結構いると思う	.35	.67	-.03	.21
敵意 1　陰で人に笑われているように思うことがある	.39	.65	-.32	.03
敵意 4R 人からばかにされたり，意地悪されたと感じることはほとんどない	.32	.50	-.08	.12
敵意 2R 私を苦しめようと思っている人はいない	.13	.43	.17	.35
敵意 5　嫌いな人に出会うことが多い	.37	.23	-.06	.24
因子 3　言語的攻撃(α= .68)				
言語 3　友達の意見に賛成できないときには，はっきり言う	-.05	-.03	.62	-.11
言語 2　誰かに不愉快なことをされたら，不愉快だとはっきり言う	-.05	-.18	.62	.04
言語 5　自分の権利は遠慮しないで主張する	.17	.04	.56	.12
言語 4　でしゃばる人がいても，たしなめることができない	-.19	-.18	.49	.13
言語 1　意見が対立したときには，議論しないと気がすまない	.31	.34	.47	.05
因子 4　身体的攻撃(α= .74)				
身体 5　権利を守るためには暴力もやむを得ないと思う	.37	.08	-.09	.72
身体 6　なぐられたら，なぐり返すと思う	.30	.25	.29	.70
身体 1R どんな場合でも，暴力に正当な理由があるとは思えない	.23	.15	-.19	.61
身体 2R 相手が先に手を出したとしても，やり返さない	.21	.18	.34	.48
身体 3　挑発されたら，相手をなぐりたくなるかもしれない	.75	.41	.15	.43
身体 4　人をなぐりたいという気持ちになることがある	.61	.41	.07	.28
因子間相関　因子 1		.40	.08	.39
因子間相関　因子 2			-.06	.52
因子間相関　因子 3				.13

※項目の先頭は原版の因子名を示す。※R は逆転項目を示す。

表 11. AAQ の因子分析結果(主因子法・プロマックス回転・因子パターン行列)

項目	因子 1	因子 2
因子 1　自己破壊行動(α= .79)		
自破 3 自分の皮膚をかきむしりたくなることがある。	.79	.33
自破 4 めちゃくちゃな行動をしたくなる時がある。	.72	.38
自破 5 自分の髪を引っ張ったり，引き抜いたりしたくなることがある。	.72	.51
自破 1 自分を傷つけたくなる時がある。	.60	.50
自破 2 無我夢中で乱暴な運転(車，バイク，自転車など)をしたいと思うことがある。	.49	.13
因子 2　自責感(α= .74)		
自責 3 自分はだめな人間だと思う。	.37	.66
自責 2 何かにつけ，心が傷つくことが多い。	.48	.63
自責 5 過去のことを振り返って後悔することが多い。	.26	.58
自責 6 他人が不快そうにしていると，自分が悪かったのではないかと思う。	.18	.57
自責 4 他人に調子を合わせすぎて，疲れてしまうことが多い。	.24	.45
自責 1 不愉快なことでも無理に我慢してしまう。	.17	.44
自責 7 他人とのトラブルがあると，自分を責める方である。	.35	.44
因子間相関	因子 1	.54

※項目の先頭は原版の因子名を示す。

表 12.　自己愛傾向と攻撃性の得点の傾向 (N =98)

下位尺度	低群	高群	平均値	中央値	標準偏差	ﾆｭｰﾄﾗﾙな値
無関心型	45	53	24.95	25	6.55	30
過敏型	48	50	60.76	60	14.64	60
外向攻撃性得点	—	—	59.82	—	11.59	72
身体的攻撃	—	—	15.19	—	4.95	18
言語的攻撃	—	—	13.59	—	3.55	15
敵意	—	—	17.51	—	4.23	18
短気	—	—	13.52	—	4.47	15
内向攻撃性得点	—	—	34.30	—	8.34	36
自責感	—	—	24.61	—	5.04	21
自己破壊行動	—	—	9.68	—	4.73	15

※低群と高群の値は人数を示す。※中央値をとる対象者は，一律に高群へ含めた。

3)　無関心型および過敏型と外向・内向攻撃性との関連

研究 1 同様，外向攻撃性と内向攻撃性の各得点について，無関心型(高低群の 2 水準)×過敏型(高低群の 2 水準)の 2 要因分散分析を行った(図 4～図 5)。さらに研究 2 では，外向攻撃性と内向攻撃性の各下位尺度の得点についても，無関心型(高低群の 2 水準)×過敏型(高低群の 2 水準)の 2 要因分散分析を行った(図 6～図 11)。

外向攻撃性と内向攻撃性の各得点については，共に無関心型と過敏型との間に交互作用は認められなかった($F(1,94)= .25$,*n.s.*, $F(1,94)= .17$,*n.s.*)(図 4，図 5)。外向攻撃性については，無関心型で有意差は認められず($F(1,94)= .14$,*n.s.*)，過敏型の主効果が有意であった($F(1,94)= 4.41$,$p< .05$)。過敏型において外向攻撃性は，ニュートラルな値よりも低い範囲に留まるが，その範囲で高群が低群よりも高い傾向が認められた。さらに内向攻撃性については，無関心型($F(1,94)= 7.56$,$p< .01$)と過敏型($F(1,94)= 19.00$,$p< .01$)の主効果それぞれで有意であった。まず，過敏型において内向攻撃性は，高群が低群よりも高く，高群の内向攻撃性はニュートラルな値よりも高い傾向となった。一方，無関心型における内向攻撃性は，高群が低群よりも減少していた。この結果について研究 1 結果と比較すると，過敏型の傾向が高い場合では，外向，内向攻撃性共に増幅効果がある点，内向攻撃性においてニュートラルな値よりも高い攻撃性を示す点などでおおむね一致していた。一方，無関心型においては，研究 1 では外向攻撃性で増幅効果が認められ，内向攻撃性で促進抑制のいずれの効果も認められなかったのに対し，研究 2 では外向攻撃性で促進抑制のいずれの効果も認められず，内向攻撃性で抑制効果が認められるというというものだった。

さらに外向攻撃性の各下位尺度について，無関心型と過敏型の効果を見たい。まず，外向攻撃性下位尺度の「身体的攻撃」では，無関心型と過敏型との間に交互作用は認められず($F(1,94)= .28$,*n.s.*)，主効果も共に認められなかった(無関心型で $F(1,94)= .03$,*n.s.*，過敏型で $F(1,94)= 1.24$,*n.s.*)(図 6)。「言語的攻撃」では，無関心型と過敏型との間に交互作用は認められず($F(1,94)= 1.03$,*n.s.*)，無関心型の主効果($F(1,94)= 8.75$,$p< .01$)のみに有意差が認められ(過敏型で $F(1,94)= 2.39$,*n.s.*)，無関心型の高群が低群よりも言語的攻撃傾向が高かった(図 7)。「敵意」では，無関心型と過敏型との間に交互作用は認められず($F(1,94)= .13$,*n.s.*)，過敏型の主効果($F(1,94)= 7.30$,$p< .01$)のみが有意であり(無関心型で $F(1,94)= 2.01$,*n.s.*)，過敏型の高群が低群よりも敵意傾向が高かった(図 8)。「短気」では，無関心型と過敏型との間に交互作用は認められず($F(1,94)= 1.23$,*n.s.*)，過敏型の主効果($F(1,94)= 7.87$,$p< .01$)のみが有意であり(無関心型で $F(1,94)=.06$,*n.s.*)，過敏型の高群が低群よりも短気傾向が高かった(図 9)。この外向攻撃性についてニュートラルな値についても見てみると，4 つの下位尺度に共通してニュートラルな値よりも低い範囲に留まる傾向が認められ，特に「身体的攻撃」においては極端に低い範囲に各群がとどまっていた。

次に内向攻撃性の各下位尺度について無関心型と過敏型の効果を見ると，内向攻撃性下位尺度の「自責感」では無関心型と過敏型との間に交互作用は認められず($F(1,94)= .56$,*n.s.*)，無関心型($F(1,94)= 11.58$,$p< .01$)と過敏型($F(1,94)= 27.60$,$p< .01$)それぞれの主効果が有意であった(図 10)。無関心型では高群が低群よりも自責感が低く，過敏型では高群が低群よりも自責感が高かった。「自己破壊行動」では無関心型と過敏型との間に交互作用は認められず($F(1,94)= 1.89$,*n.s.*)，過敏型の主効果($F(1,94)= 4.87$,$p< .05$)のみに有意差が認められ(無関心型

で $F(1,94)= 1.71$,*n.s.*)，過敏型の高群が低群よりも自己破壊行動を促進する傾向が認められた(図 11)。内向攻撃性についてもニュートラルな値について見てみると，「自己破壊行動」では外向攻撃性下位尺度同様にニュートラルな値よりも低い範囲に留まる傾向が認められた。しかし，「自責感」においてはニュートラルな値よりも高い範囲に各群の平均値が分布する傾向があり，過敏型低無関心高群のみがニュートラルな値よりもわずかに低いという結果であった。なお，それぞれの値を表 13 にも示した。

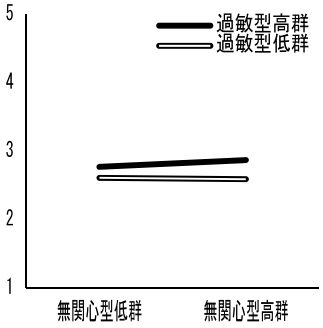

図 4．無関心型および過敏型各群での外向攻撃性合計

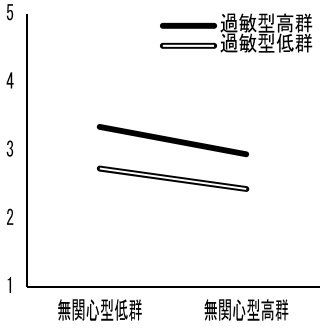

図 5．無関心型および過敏型各群での内向攻撃性合計

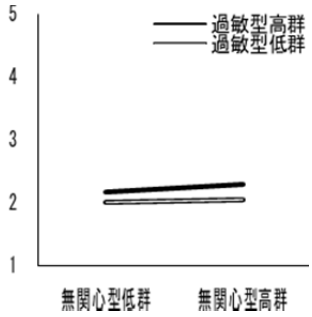

図 6．無関心型および過敏型各群での身体的攻撃

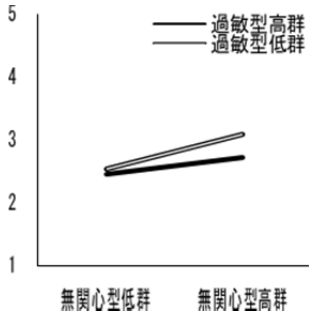

図 7．無関心型および過敏型各群での言語的攻撃

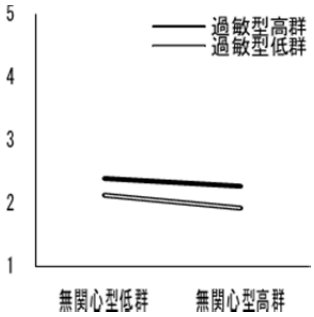

図 8．無関心型および過敏型各群での敵意

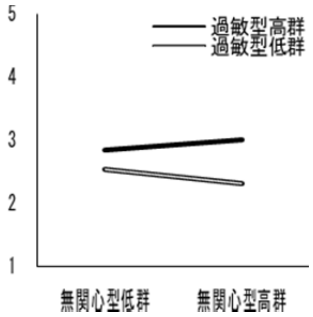

図 9．無関心型および過敏型各群での短気

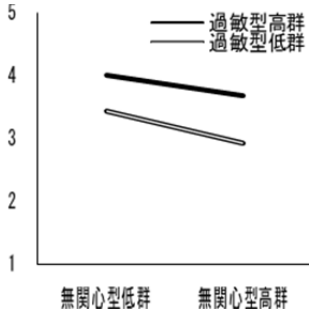

図 10．無関心型および過敏型各群での自責感

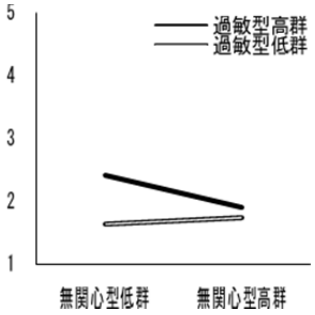

図 11．無関心型および過敏型各群での自己破壊行動

表 13.　分散分析結果（N=98）

	外向攻撃性					内向攻撃性		
自己愛傾向	合計	身体的攻撃	言語的攻撃	敵意	短気	合計	自責感	自己破壊行動
交互作用	.25	.28	.03	.13	1.23	.17	.56	1.89
無関心型	.14	.03	8.75**	2.01	.06	7.56**	11.58**	1.71
過 敏 型	4.41*	.24	2.39	7.30**	7.87**	19.00**	27.60**	4.87*

※**… p< .01,　*… p< .05

3.3.　考察

自己愛傾向と攻撃性の各尺度の因子分析を行った結果，それぞれの尺度で予想された下位尺度を因子として抽出することができた。この結果から，研究 2 では各下位尺度の妥当性がある程度確認できたと考える。因子間相関については，NVS において「承認・賞賛過敏性」と「自己緩和不全」および「自己顕示抑制」との間に高い値が示された。承認を求める傾向と自分の感情の緩和を他者に依頼する傾向および自分を抑制する傾向とは，承認を得ることで不安な感情が緩和される，あるいは相手との衝突を避けることで承認を得るといったように，互いが密に関わっていることが考えられる。次に BAQ において「言語的攻撃」と他の因子との相関が低く，他の攻撃性に比べて独立して機能しているとも考えられた。「言語的攻撃」の項目は「誰かに不愉快なことをされたら，不愉快だとはっきり言う」「自分の権利は遠慮しないで主張する」など，他の因子の項目(「かっとなることを抑えることが難しい」「陰で人に笑われているように思うことがある」)と比べると，能動的な社会生活を送る上である程度必要とされるであろう内容で構成されている。このため他の因子とは攻撃性の否定的側面での関連が弱く，低い相関が示されたものとも考える。さらに AAQ において「自己破壊行動」と「自責感」との間に比較的高い相関が示された。安立(2001)はこの 2 つの下位尺度を，内向攻撃性を実際に表出するかしないかによって分けているとしている。このため自責感とそれを背景とした自己破壊行動とは，類似性が高く，比較的高い相関が認められたものと考える。自己愛傾向における過敏型と無関心型の群選別については，過敏型においてニュートラルとほぼ近似した中央値が，無関心型においてニュートラルな値よりも低い中央値が得られ，無関心型は比較的低い値を境に高低群が分かれた。研究 2 では無関心型低群が自己愛傾向の比較的低い集団を対象に構成されている点に注意が必要であろう。また，同種の尺度で両型の群選別を行っている研究 1 と比較すると，研究 2 では研究 1 よりも両型で共に中央値の値は低いものの，わが国において無関心型よりも過敏型が多いとする福井(1998)の見解に，相対的に矛盾しない結果であったと言えよう。

BAQ と AAQ およびそれぞれの下位尺度を従属変数として，自己愛傾向の無関心型の高低群と過敏型の高低群による 2 要因の分散分析を行った。その結果，外向と内向の攻撃性およびそれぞれの全下位尺度において交互作用は認められなかった。その上で，まず両型の外向攻撃性について検討したい。ニュートラルな値を見ると，外向攻撃性全体および下位尺度とも平均値がそれよりも低い範囲に留まる傾向が認められ，特に「身体的攻撃」では極端に低い範囲に各群の平均値がとどまっており，外向攻撃性が全体的に低い傾向がうかがえた。主効果については，外向攻撃性および下位尺度「敵意」「短気」において過敏型の増幅効果が見られた。この結果は，他者の反応に敏感な過敏型の自己愛傾向が高いことで外向攻撃性が促進されることを示唆するばかりでなく，過敏型が外向攻撃性の特定の側面を促進することを示すものと言えよう。特に，「敵意」は他者への猜疑心や不信感といった認知的側面，「短気」は怒りの抑制の弱さといった情動的側面を測定する(安藤ら,1999)といわれており，過敏型は外向攻撃性の認知や情動の側面に増幅効果をもつと考えられる。NVS の因子が関連しながら過敏型を構成することをふまえると，例えば他者から軽視されていないかどうかを疑う過敏型の特徴は，承認や賞賛に過敏な認知的特徴，あるいは自己顕示を抑制するなどの傾向と結びつき，さらに自己顕示を抑制するために怒りなどの情動

が蓄積されていくのではないだろうか。次に，無関心型についてみると，外向攻撃性全体の主効果は認められなかったものの，下位尺度「言語的攻撃」に増幅効果が認められた。BAQ の因子分析の結果から，「言語的攻撃」は他の 3 つの下位尺度に比べて攻撃性の肯定的側面と関連する項目が多く含まれ，外向攻撃性の中でも独立に働くことが考えられた。本研究では，無関心型の誇張された業績や才能を周囲に対して押し通そうとする傾向が外向攻撃性を促進すると想定していた。この攻撃性の肯定的側面と無関心型の自己主張性をあわせて考えると，無関心型の場合に，自らの才能を主張する特徴が適度に発揮されることが他者への攻撃性というよりも健全な自己表現の範囲におさまりうる可能性もうかがえよう。無関心型群選別の指標となった「自己主張性」の中央値が研究 2 ではニュートラルな値よりも低かったことも考え合わせると，研究 2 における無関心型の自己表現の特徴が社会的に肯定される範囲内での他者への働き掛けに留まる傾向から，無関心型は外向攻撃性の肯定的側面を含む「言語的攻撃」にのみ増幅効果を示したとも考える。最後に「身体的攻撃」において無関心型と過敏型共に関連が認められなかったことにふれたい。「身体的攻撃」の平均値を見ると，ニュートラルな値よりも低い範囲に両型各群が分布する傾向にあった。無関心型は才能や業績の主張をしようとする特徴から，「身体的攻撃」が測定する暴力への衝動や暴力の正当化へは繋がりにくいのではないかと考えられる。一方，過敏型では「承認・賞賛過敏性」や「自己顕示抑制」といった特徴が，「身体的攻撃」を抑制するのではないかとも考えられる。相良・相良(2006)は，自己愛傾向と攻撃性との関連を横断的に検討した結果，自己愛によって生じる道具的攻撃反応としては，年齢が進むに従って身体的な暴力よりも言語的な攻撃反応が用いられることを示唆している。このように，両型共に他者への「身体的攻撃」との関わりにくい特徴が想定されることや，研究 2 の調査対象である大学生にとって外向攻撃性が高い場合でも身体的な暴力へ向かうことは自制できていることが，この結果の背因として考えられよう。

次に両型の内向攻撃性について検討したい。まず，内向攻撃性全体とその感情的側面である「自責感」においては，無関心型の抑制効果が認められた。無関心型において自分の才能を主張する特徴は，自分が重要な存在であるという感覚にもとづいて行われるものであるので，自分に対する否定的な感情などとは少なくとも表面的には反対の機制であると考える。さらに自己主張の対象は他者になるため，この「自責感」の抑制を主にして，無関心型の内向攻撃性全体が抑制されたと考える。過敏型においては，内向攻撃性全体に加えて，感情的側面である「自責感」でも行動的側面である「自己破壊行動」をも促進する効果が認められた。内向攻撃性の下位尺度の平均値を見ると，「自責感」はニュートラルな値よりも高い範囲に三群が分布しており，過敏低無関心高群のみがわずかにニュートラルな値を下回っていた。「自己破壊行動」ではニュートラルな値よりも低い範囲に，全群が留まる傾向が認められた。このことから，自己愛傾向における内向攻撃性は行動面よりも感情面で強く表われる傾向にあり，特に過敏型の内向攻撃性の増幅効果は行動面よりも感情面に反映されるものとも考えられる。

また，研究 2 の結果を研究 1 の結果と比較すると，過敏型の傾向が高い場合では，外向，内向攻撃性共に増幅効果がある点，内向攻撃性においてニュートラルな値よりも高い攻撃性を示す点などでおおむね一致していた。一方，無関心型においては，研究 1 では外向攻

撃性で増幅効果が認められ，内向攻撃性で促進抑制のいずれの効果も認められなかったのに対し，研究 2 では外向攻撃性で促進抑制のいずれの効果も認められず，内向攻撃性で抑制効果が認められるというというものだった。これは，過敏型の外向，内向攻撃性への影響が安定していることを示す一方で，無関心型の外向，内向攻撃性への影響が安定しないことを示す結果なのかもしれない。しかし，無関心型について研究 1 と研究 2 の結果を詳細に比較すると，あながち矛盾した結果とまではいえないものでもあろう。外向攻撃性においては，研究 2 で研究 1 よりも無関心型高群が低群よりも攻撃性が高くなる程度が少なかったとも言えよう。内向攻撃性の過敏型低群においては，研究 1 と研究 2 共に無関心型高傾向が抑制的に働いている。しかし，内向攻撃性の過敏型高群においては，研究 2 の方のみで無関心型高傾向が抑制効果を示している。このように見ていくと注目すべき課題として浮かび上がるのは，過敏型高かつ無関心型高群が内向攻撃性に抑制効果をもつかどうかという点になろう。

この過敏型と無関心型が共に高い群は，誇張のある自己主張をする特徴と，抑制的で他者の反応を過剰に気にする特徴とが共に高い傾向を示すと理解される。そうだとすると，この過敏型高無関心型高群は，自己を主張するかどうかやその方法について，一見すると相反するような特徴が含まれている。無関心型が言語的攻撃に増幅効果をもつことから，無関心型のみが高い場合は言語による主張が行われるものと考えられる。一方，過敏型の内向攻撃性増幅効果については，感情的側面のみならず，その行動的側面ととらえられる自傷行為の動機にも抑うつ気分からの解放や，自己陶酔的要因，他者操作的要因(柏木,1988)など複数の要因が想定される。例えば過敏型の感情の緩和能力が弱い特徴が，抑うつ気分からの解放を自傷行為に求めたり，また過敏型の，自分は特別な存在であるという感覚を密かに持ち，他者からの特別な配慮を求める特徴が，自己陶酔的な意味をもったりしながら，結果的に行動的な内向攻撃性につながることがあるかもしれない。また，無関心型の自己主張的な特徴が，自分を責める気持ちを周囲に表明するという方法によって行われ，自責感に対する励ましや慰めを他者に期待するといった他者操作的な目的で機能する可能性もあるだろう。こうしたことをふまえると内向攻撃性には単に感情か行動かという側面だけではなく，異なる背景によって様々な機能をもつ可能性にも目を向ける必要があるのではないだろうか。過敏型高かつ無関心型高群の研究 1 と研究 2 で異なる結果については，こうした内向攻撃性の様々な背景となる要因をさぐりながら，無関心型と過敏型の両者における内向攻撃性への影響を今後も注意深く検討していく必要があろう。

第 4 節　今後の展望

本研究では，無関心型の自己主張的な特徴が他者に対する言語的な攻撃性と結びついており，それは自分で自分を責めるような攻撃性とは逆のことであり，無関心型の特徴とは矛盾しないと考察した。ここで無関心型の測定に立ち返ると，小塩(1999)は無関心型の指標である NPI-S の「自己主張性」が DSM-Ⅳ(APA,1994)の NPD の記述のうち「1.自己の重要性に関する誇大な感覚」に相当するとしている(表 14)。

DSM における NPD についての記述は Kernberg(1975)が示した自己愛の病態に近い(相澤,2002)ことも考え合わせると，NPI-S の「自己主張性」は無関心型の主要な特徴をとらえていると考えることができる。しかし，無関心型の指標としては，NPI-S の「自己主張性」のみで足りるのであろうか。表 14 に整理したように，その他に，「5.特権意識」や「6.他人を利用する」といった特徴や「7.共感の欠如」，「8.他人に嫉妬する，または他人から嫉妬されていると思い込む」などの特徴を尺度に取り入れていく必要はないのだろうか。また，NPI-S の「自己主張性」そのものにも，実際の行動的側面を表す項目(「私は，自分の意見をはっきり言う人間だと思う。」)の他に，考え方や価値観などを測定する項目(「私は，個性の強い人間だと思う。」「私はどんな時でも，周りを気にせず自分の好きなように振る舞っている。」)も含まれている。こうした点をふまえると， NPI-S の「自己主張性」のみで測定した本研究の無関心型の特徴が，他者に対する言語的な攻撃性といった外向攻撃性の一部の下位尺度のみの関連を導いた可能性も否定できない。無関心型の測定方法の違いによっては，言語的な攻撃性以外の外向攻撃性との関連も考えられないわけではない。今後，無関心型の測定方法について，多面的かつ統合的な観点から検討し直す必要があろう。さらに，これまでの研究の多くで無関心型と攻撃性の関連が主張されてきたが，こうした既存研究についても無関心型測定尺度の違いに着目して再検討をする必要もあろう。

過敏型については，本研究において，主として外向攻撃性の認知的側面や情動的側面を促進する効果，自責感や自己破壊行動といった内向攻撃性全般を促進する効果が認められた。また，研究 1，研究 2 において，過敏型は一貫して外向攻撃性，内向攻撃性共に促進する効果が認められた。本研究では，このような結果について，過敏型の自己顕示を抑制する特徴，さらに過敏型の潜在的な特権意識をもつ特徴にもとづいて考察をしてきた。このような結果の中で特に，内気で抑制的と考えられてもきた過敏型が，外向攻撃性を促進するという結果はこれまでの研究ではみられなかったものであり，過敏型が内向攻撃性を強く示すという既存研究(山崎,2008 など)の考え方に加え，本研究は過敏型の理解に向けた一つの新たな視点を提供するものと言えよう。今後は，過敏型のどのような特徴が外向・内向攻撃性の下位尺度と関連するのかについて，詳細に検討していく必要があるだろう。その際に，本研究では過敏型を NVS 用いて測定したが，内向攻撃性を示す背景に自己陶酔や他者操作など過敏型の特徴とも言える複数の要因があることも考えると，過敏型測定尺度はもちろんであるが，外向・内向攻撃性の測定尺度も，より洗練させていく必要があるだろう。

本研究で無関心型，過敏型の指標としたNPI-SとNVSの両尺度はそもそも自己愛傾向を類型的に理解する立場から作成されたものであった。つまり，自己愛傾向の中で無関心型，過敏型は排他的に位置づけられ，無関心型と過敏型が共に低い群は存在しても，無関心型と過敏型が共に高い群は存在しないという前提で両尺度が作成されていた。しかし，本研究ですでに見たように，研究1および研究2において，相対的にではあったが無関心型と過敏型が共に高い群に位置づけられた対象者が相当数存在した。そのため，あらためてNPI-SとNVSの2つの尺度間の相関係数を算出したところ，研究1でr= - .15(*n.s.*)，研究2でr= .09(*n.s.*)と低い値にとどまり，ともに有意差は認められなかった。また，両研究において，両尺度共に明らかにニュートラル値以上の対象者が相当数確認できた。このことから無関心型と過敏型は，類型的というよりも特性的に作用している可能性も考えられ，この点についても今後の検討が期待される。

最後に，無関心型，過敏型による攻撃性の方向や現れ方の違いについて，本研究では両型の基本的特徴である他者に対して無関心かあるいは他者に対して過敏かという点を重視して検討してきた。例えば過敏型では，他者への外向攻撃性は他者からの否定的な反応を恐れて表出にはいたらず，認知的あるいは情動的な攻撃の準備状態としての外向攻撃性にとどまり，他者に向けられる分も含めて攻撃性が内向すると考えた。自己愛傾向について，不健康的な側面では誇大な自己が他者との関わりの中で調整されておらず，その自己を他者に対しても通用させようとするために周囲との摩擦を起こすこと，また他者の存在が，無関心型であれば主張によって，過敏型であれば抑制によって，誇大な自己の評価や維持のために機能していることを挙げ，自己愛の研究には個人としての性質だけでなく個人と他者との関わりに焦点を当てることも必要であると指摘している。このような過程を探索的にも検討するためには，本研究のように質問紙調査のみを用いる研究方法には限界があろう。個々人の個別性のみならず個々人をとりまく対人関係の特殊性にも細やかに目を向けられる面接等の方法によって，攻撃性が生じた場合の対人関係を主とした状況や攻撃性の方向，種類，さらに攻撃性がその後どのように処理されていくのかについて，時間的経過も含めた検討を行う必要があるだろう。

表14.　DSM-Ⅳによる自己愛性パーソナリティ障害の診断基準(APA,1994)とNPI-Sとの対応

誇大性(空想または行動における)賞賛されたいという欲求，共感の欠如の広範な様式で，成人期早期までに始まり，種々の状況で明らかになる。以下のうち，5つ(またはそれ以上)で示される。	NPI-Sとの対応(小塩,1998)
1. 自己の重要性に関する誇大な感覚。自分の業績や才能を誇張する。	「自己主張性」
2. 限りない成功，権力，才気，美しさ，あるいは理想的な愛の空想にとらわれている。	「注目・賞賛欲求」
3. 自分が特別であり，独特であり，他の特別なまたは地位の高い人(権威的な機関)にしか理解されない，または関係があるべきだと信じている。	「注目・賞賛欲求」
4. 過剰な賞賛を求める。	「注目・賞賛欲求」
5. 特権意識，つまり特別有利な取り計らい，または自分の期待に自動的に従うことを理由なく期待する。	
6. 対人関係で相手を不当に利用する。つまり，自分自身の目的を達成するために他人を利用する。	
7. 共感の欠如。他人の気持ちおよび欲求を認識しようとしない，またはそれに気づこうとしない。	
8. しばしば他人に嫉妬する，または他人が自分に嫉妬していると思い込む。	
9. 尊大で傲慢な行動，または態度。	「優越感・有能感」

第 3 章　研究Ⅲ：自己愛傾向に着目した攻撃性喚起場面における内的過程の探索的検討

第 1 節　問題と目的

研究Ⅱでは，無関心型および過敏型自己愛傾向と外向，内向攻撃性との関連，さらに両攻撃性下位尺度との関連を検討した結果，無関心型の人は外向攻撃性全体および言語的な外向攻撃性が高く, 内向攻撃性全体および感情的な内向攻撃性(自責感)が低いことが示された。一方，過敏型の人は外向攻撃性全体および認知的，情動的な外向攻撃性(敵意，短気)が高く，内向攻撃性全体および感情的，行動的な内向攻撃性(自責感，自己破壊行動)が高いことが示された。

さて，無関心型および過敏型という自己愛の現象像は，個人ごとに異なる混成で示されることが指摘されている。従って自己愛傾向の現象像に伴う攻撃性の特徴も，個人によって異なる表われ方をすると考えられる。そこで，研究Ⅲでは自己愛傾向と攻撃性喚起場面における個人の内的過程に焦点を当てて，双方の関連を検討する。

1.1.　無関心型および過敏型と外向・内向攻撃性，怒りの原因帰属，対人場面

前川・宮本(2006)は，共感性の欠如や自己愛的同一視といった自己愛的対人態度の表われと相手との関係との関連について検討し，自己愛的対人態度が親よりも友達，さらに恋人に対して起こりやすいことを指摘した。浅利(2013)では，自己愛傾向者の対人場面における怒りの特徴を P-F スタディによって検討した結果，無関心型は対人場面での怒りの原因を自分もしくは不可避の出来事に帰属し，後悔や自責の念をもちやすいこと，過敏型は対人場面での怒りを他者もしくは状況へ帰属する傾向があることが示された。これらの知見から自己愛傾向者はその型によって，攻撃性の表われ方や怒りの原因帰属の面で異なった様相を呈すること，また自己愛的な対人態度の表われ方が相手との関係によって異なる可能性がうかがえる。加えて研究Ⅰでは，自己愛傾向を検討する際，個人と他者との関係に焦点を当てることで自己愛傾向の現象像により接近することができると考えた。

1.2.　目的

先行研究では，無関心型および過敏型と外向・内向攻撃性との間にそれぞれ異なる関連が示されてきた。自己愛傾向者の攻撃性が誇大自己の保持機能によると仮定すると，攻撃性は誇大自己を傷つけるような外的刺激に対して喚起されると考えられる。誇大自己への脅威となる刺激とは，自己愛者が期待した好ましい反応が得られなかったり，軽んじられた，侮蔑されたと感じたりすることだろう。この時，無関心型は対象に反撃する一方で誇大自己を自ら揺らがせる恐れのある内省や自責感を積極的に回避し，過敏型は対象に反射的に怒りを抱きつつも他者からの承認を失うことによる更なる誇大自己の傷つきを免れるために攻撃性の方向を自己へ転換するといった過程が想定される。加えて，無関心型は，周囲に何らかの反応を期待してかなわなかった場合の攻撃性喚起とは別に，周囲を斟酌せず振る舞う傾向が外向的な攻撃性の高さとして表われている可能性も考えられる。尺度上の傾向あるいは表面的な態度，言動としての攻撃性が当人にとってどのような意味をもつのか，主観的な位置づけを含めた検討が必要だろう。また，先行研究では自己愛傾向の型

や相手との関係によって怒りの帰属や対人態度等の諸特徴の表われ方が異なることも指摘されてきた。外向・内向攻撃性が自己愛傾向の型によって異なる様相をもち，さらに相手との関係性などによってその表出も変化するとすれば，自己愛傾向と攻撃性との関連について検討を進めるためには，個人に焦点を当ててより詳細な検討を行うことが望ましいと考える。

そこで本研究では，無関心型および過敏型自己愛傾向と外向・内向攻撃性の関連を，個人のエピソードに焦点を当てて探索的に検討することを目的とする。そのために，個人の自己愛傾向と攻撃性の特徴を質問紙調査でとらえた上で，攻撃性喚起場面における個人の感情や周囲の状況等の継時的変化を含めた個人の内的過程について面接調査によって明らかにしたい。

第 2 節　方法

2.1.　調査協力者・調査時期

調査協力に応じた女子大学生 2 名(平均年齢 20 歳)に対して，それぞれ 2013 年 8 月と 10 月に質問紙調査と面接調査を実施した。

2.2.　手続き

調査の目的と概要を記載して調査協力者を募るチラシを大学内に掲示した。参加を希望した調査協力者にまず質問紙を配布して回答を求めた。調査者は，質問紙の結果をまとめた上で，後日に面接調査を行った。面接調査では，まず調査協力者にワークシートへの記入を依頼し，記入された内容について半構造化面接質問項目に従って面接を行った。その後に質問紙調査の結果を提示し，結果に対する感想を聞くという順序で実施した。ワークシートと半構造化面接質問項目の内容は後述する。

2.3.　質問紙調査の構成

無関心型を測定する尺度として，小塩(1998)による日本語版自己愛性人格目録短縮版(Narcissistic Personality Inventory-Short version; NPI-S)から下位尺度を選択して用いた。この尺度は「自己主張性」「注目・賞賛欲求」「優越感・有能感」の 3 下位尺度各 10 項目，全 30 項目について 5 件法で回答を求めるものである。「自己主張性」は無関心型，「注目・賞賛欲求」は過敏型，「優越感・有能感」は自己愛傾向全体の高さを測定するとされ(小塩,2004a)，山崎(2008)を含め自己愛傾向に関する従来の多くの研究では，過敏型と無関心型を測定する際に NPI-S を使用している。しかし，この尺度は DSM の診断基準を基に作成され，無関心型の測定項目に偏っている。そこで，本研究では「注目・賞賛欲求」を削除し，無関心型の測定に NPI-S の下位尺度「自己主張性」「優越・有能感」各 10 項目，計 20 項目のみを用いることとした。

次に，過敏型自己愛傾向を測定するため，コフート(1994)の理論に基づいて作成された上地・宮下(2009)による自己愛的脆弱性尺度短縮版(Narcissistic Vulnerability Scale; NVS)を用いた。この尺度は「承認・賞賛過敏性」「自己顕示抑制」「潜在的特権意識」「自己緩和不全」の 4 下位尺度各 5 項目，全 20 項目について 5 件法で回答を求めるものである。

続いて，外向攻撃性を測定するため，安藤・曽我・山崎・島井・島田・宇津木・大芦・

坂井(1999)による日本版 Buss&Perry 攻撃性質問紙(The Japanese Version of the Buss&Perry Aggression Questionnaire; BAQ)を用いた。この尺度は「身体的攻撃」6 項目,「言語的攻撃」5 項目,「敵意」6 項目,「短気」5 項目の 4 下位尺度，全 22 項目について 5 件法でたずねるものである。

そして, 内向攻撃性の測定には, 安立(2001)の攻撃性質問紙(本研究では Adachi Aggression Questionnaire の頭文字を取って AAQ と称する)から下位尺度を選択して用いた。この尺度は「自責感」7 項目,「自己破壊行動」5 項目,「猜疑心」4 項目,「対象攻撃行動」8 項目,「積極的行動」9 項目の 5 下位尺度，全 33 項目について 5 件法で構成される。本研究ではこの下位尺度のうち,「自己に向けられる否定的感情」を測定する「自責感」と「自分に向けられる，破壊的で衝動的な行動」を測定する「自己破壊行動」計 12 項目を使用し，5 件法での回答を求めた。

2.4. 面接調査におけるワークシートと半構造化面接質問項目

攻撃性が喚起された場面について，関連する要因や生起した欲求，実際の行動，攻撃的な感情の変遷，周囲の反応などを手がかりに個人の内的過程を探索的に検討するため，現実の攻撃性喚起場面に近い内容を扱える面接を考案した。自身の体験として現実の攻撃性喚起場面を想起し語ることには，調査協力者の陰性感情を過度に刺激し不利益を生じさせる可能性がある。また，出来事への直面化を避けたり，調査者に与える印象を社会的に望ましくしたりしようとして，開示が阻害されることもあるだろう。こうした可能性を完全に統制することは極めて困難である。そこで調査協力者が自らの体験を想像上の人物に仮託しうる形式を用いることとし，次のような内容のワークシートを用いた面接を試案した。

> 調査協力者にある人物「A さん」のことについてできるだけ具体的に想像してもらう。A さんは調査協力者にとてもよく似た感じ方，考え方をもっていて，調査協力者には A さんが感じたり考えたりすることや実際に行うことが手に取るように分かる。A さんが攻撃的な感情をもったり, 実際に攻撃的な行動をしたりするのはどのような時だと思うか。想像して，その内容について話しをする。

面接方法は，試案について臨床心理学分野に所属する大学院生 3 名教員 1 名と検討の機会をもち，改善点などの指摘を受けて試作版を作成し，試作版を同所属の別の大学院生 2 名に体験してもらい，感想などを聞いて改良を加え実施版とした。ワークシートおよび半構造化面接質問項目は表 15 にまとめた。質問の順序や表現は会話の流れによって適宜調整して用いた。

なお，面接に当たっては，調査協力者に個人情報の守秘を説明し，その上での研究上の使用と論文記載，および録音について了承を得た上で承諾書に署名してもらった。また，質問紙の結果を提示する際には，結果が示すのは個人の側面の一つで，絶対のものではないことを提示用紙に記載し，口頭でも伝えた。

表 15.　面接調査のワークシートおよび半構造化面接質問項目

ワークシート
A さんが攻撃的な気持ちになったり，実際に攻撃したりした時のことについておうかがいします。
どのようなことがありましたか。 ・いつ(年月日，時期など) ・どのような場面(学校の授業中，アルバイト中など) ・かかわっていた人(友達の〇〇さん，家族の〇〇など)
その時，A さんの気持ちは…
その時，A さんがしたことは…
A さんがしたことのあと，A さんの気持ちは…
A さんがしたことのあと，A さんの周りは…

半構造化面接質問項目
1 どのようなことがあったでしょうか(できごと)。
2 それはいつ，どのような場面であったことですか。
3 誰が関わっていましたか。
4 なぜそうなったのですか。
5 その時 A さんが攻撃的な気持ちをもった相手やものは何ですか。
6 その気持ちを A さんの言葉で表現するとどのような気持ちでしたか。
7 なぜその人やものにそのような気持ちをもったのですか。
8 その時 A さんはどのようにしたいと思いましたか。
9 その時 A さんはどのようにしましたか。
10 なぜそのようにした/できた/してしまったのですか。
11 その行動によって，A さんの気持ちはどのように変化しましたか。
12 その行動によって，A さんの気持ち以外にはどのような変化がありましたか。
13 A さんがそのように行動しないとしたら，それはどのような時ですか。
14 それはどうしてですか。
15 この気持ちの流れは，他のできごとにもあてはまる流れでしょうか。
a.　あてはまるとしたら，特にどんなところがよくあることですか。
b.　あてはまらないとしたら，この気持ちの流れはどんなところが特別でしたか。また，よくある気持ちの流れはどんなものですか。
16 ここまでお話しをしてきて，気づいたり考えたりしたことや感想などを聞かせて下さい。

第 3 節　分析方法と結果

3.1.　質問紙調査の分析方法と結果および調査協力者の自己愛傾向と攻撃性の特徴

1)　質問紙調査の分析方法と結果

各尺度および下位尺度ごとに合計得点を算出した。NPI-S の合計得点を無関心型得点，NVS の合計得点を過敏型得点，BAQ の合計得点を外向攻撃性得点，AAQ の合計得点を内向攻撃性得点とした。調査協力者それぞれの自己愛傾向と攻撃性の特徴を集団内での位置という側面からとらえるため，調査協力者の所属する大学の学生 98 名(男子 39 名,女子 59 名; 平均年齢 18.70 歳)を対象に行われた同じ構成の質問紙調査で得られた研究Ⅱにおける研究 2 の結果を基にして，各得点のパーセンタイル順位を算出した。同様の目的で，研究Ⅱにおける研究 2(以下研究Ⅱ-2)の質問紙調査結果の自己愛傾向と攻撃性の中央値をもとに，調査協力者を高群か低群に位置づけた。その際，研究Ⅱ-2 の質問紙調査協力者 98 名に本研究の調査協力者を加え，総数 99 名に対する順位と群への位置づけを算出した。群への位置づけに際して調査協力者の得点を加えたところ，小数点第 2 位で四捨五入を行う場合の中央値に研究Ⅱ-2 との違いは認められなかった。結果を表 16 に示す。表中の「得点」における斜線の左側は調査協力者の合計得点，右側は尺度上の最高値，「得点率」は尺度上の最高値に対する合計得点の割合である。この際，研究Ⅱ-2 では無関心型の測定に「自己主張性」のみを用いたが，本研究では自己愛の誇大性における顕在性と潜在性にも着目するため，「自己主張性」に加えて「優越感・有能感」も使用した。その結果を研究Ⅱ-2 の結果と比較するために，本研究ではあらかじめ研究Ⅱ-2 の結果に「優越感・有能感」の得点も加えた結果を改めて算出した上で，上記の位置づけを行っている。

なお本研究の目的が個人の内的過程の検討にあることから，質問紙調査の結果によって単に個人の自己愛傾向と攻撃性の高低をとらえるばかりでなく，その結果を解釈して，対人場面や攻撃性喚起場面で考えられる言動の特徴についてもおおよその見通しをもつことが肝要と考えた。そこで，表 16 に示した調査協力者それぞれの自己愛傾向と攻撃性の高低から，対人場面での特徴を解釈し，以下のようにまとめた。

以下に続く「表 16」および「2)　X と Y の自己愛傾向および攻撃性の特徴」は，守秘義務を遵守するため削除いたします。

3.2.　面接調査の分析方法と結果

1)　攻撃性喚起場面における個人の内的過程の検討に向けた攻撃性の分類項目の設定

面接調査の分析に先立って，攻撃性喚起場面における個人の内的過程を分析する際に，喚起された攻撃性の変遷を自己愛傾向との関連を視野に入れて検討するためには，エピソード中のそれぞれの時点で語られる攻撃性がどのような特徴をもつのか，できるだけ詳細に分類する必要があると考えた。坂井・山崎(2004)によると，攻撃行動は反応的攻撃と道具的攻撃に大別される。反応的攻撃は「外からの刺激に対して怒り感情を伴い，何らかの攻撃行動を示」し，道具的攻撃は「目的を達成するために何らかの攻撃行動を道具として使用し，怒り感情を伴わない場合も多い」。さらに反応的攻撃は外からの刺激に対して怒り感情が伴ったあと，行動として表われる場合(表出性攻撃)と表われない場合(不表出性攻撃)に分類される(坂井・山崎,2004)。一方，本研究で使用した質問紙調査の攻撃性下位尺度には，外向攻撃性の「言語的攻撃」「身体的攻撃」「敵意」「短気」，内向攻撃性の「自己破壊行動」「自責感」が設定されている。これらの概念規定を前提に，以下では坂井・山崎(2004)の分類に質問紙調査の攻撃性下位尺度を当てはめて統合し，本研究での攻撃性の分類項目として再設定する。

a. 外向攻撃性　　外向攻撃性の各下位尺度の質問項目は, おおむね他者からの害意や暴力, 衝動的な怒りなどを前提とし，何らかの刺激に対して生起する攻撃性を測定している。この点から外向攻撃性を反応的攻撃は位置づけることができる。また「言語的攻撃」「身体的攻撃」が実際の行動に向かう攻撃性を,「敵意」「短気」が認知，感情面の攻撃性を測定する下位尺度であることから，言語的攻撃や身体的攻撃を表出性攻撃，敵意や短気を不表出性攻撃と位置づけることができよう。

b. 内向攻撃性　　内向攻撃性の各下位尺度の質問項目をみると,「自責感」については対人場面でのストレスや不特定の出来事から自分についての否定的な認知が引き起こされるこ

とに関する項目がある。一方で，この「自責感」の他の項目には「不愉快なことでも無理に我慢してしまう。」「他人に調子を合わせすぎて，疲れてしまうことが多い。」など，自分を責める気持ちが明確に示されていない項目も含まれている。それでも，下位尺度としての「自責感」は α = .76 の内的整合性を示している(安立,2001)。以上から「自責感」という概念自体に，フラストレーションを内包させ表出しないという心的エネルギーの方向性が定まらない状態が包含されていて，自分を責めるという明確な方向性をもった状態とそれが併存している可能性も考えられる。また，「自己破壊行動」については，「自分を傷つけたくなる時がある。」「自分の皮膚をかきむしりたくなることがある。」など，その前提となる刺激の別に関わらず自分に向かう攻撃行動に着目した項目で構成されている。これらから「自責感」「自己破壊行動」は，反応的攻撃とも道具的攻撃とも，あるいは表出性攻撃とも不表出性攻撃とも一概には言い切れないと考える。特に自己破壊行動は「対象に対する強い攻撃性が潜んでおり，間接的な他者攻撃という側面が存在する」(谷口,1994)，抑うつ気分からの解放的要因，自己陶酔的要因，他者操作的要因が動機になる(柏木,1988)とも指摘され，複雑な動機が関連しているとも考えられる。以上から，内向攻撃性については，文脈上の意味にも注目して分析する必要があると本研究では考える。そこで内向攻撃性については既存の分類に当てはめず，エピソードの文脈に沿って外からの刺激や怒り感情の有無なども推測し，反応的または道具的，表出または不表出といった視点を参考にしながら具体的な検討を試みたい。

c. 道具的攻撃　　道具的攻撃は，外界に働きかけるための道具として用いられる攻撃性を表わすので，表出性攻撃に分類できる。山崎(2002)によると，道具的攻撃には関係性攻撃が含まれる。関係性攻撃とは自分の目的を達成するために他人の人間関係を操作する行動で，仲間外れにしたり悪口を言ったりして，相手が嫌われる，社会的に排除されるように仕向けるなどを指す。他者を操作するという点に関して，DSM-Ⅳ(APA,1994)では NPD 患者が「対人関係で相手を不当に利用する」特徴に着目しているが，パーソナリティとしての自己愛傾向においても，同様の特徴を考える必要があろう。そのためここまでにまとめた攻撃性の分類項目に関係性攻撃の概念も取り入れ，攻撃性をとらえる際の視点の一つにしたい。

以上から攻撃性の分類項目を表 17 のように設定し，この分類項目を軸に面接調査の分析を行う。

表 17.　攻撃性喚起場面における個人の内的過程を検討する際の攻撃性の分類項目

<table>
<tr><th rowspan="2">喚起時の分類</th><th rowspan="2">表出/不表出の分類</th><th colspan="3">方向性と表われ方の分類</th></tr>
<tr><th></th><th>外向攻撃性</th><th>内向攻撃性</th></tr>
<tr><td rowspan="2">反応的攻撃
外からの刺激に対して怒り感情を伴って生起する。</td><td>表出性攻撃</td><td>行動的</td><td>言語的攻撃
身体的攻撃</td><td rowspan="3">自責感
自己破壊行動</td></tr>
<tr><td>不表出性攻撃</td><td>認知的
感情的</td><td>敵意
短気</td></tr>
<tr><td>道具的攻撃
目的を達成するために攻撃行動を道具として使用する。
怒り感情を伴わない場合も多い。</td><td>表出性攻撃
(関係性攻撃)</td><td>行動的</td><td>無視，悪口，
仲間外れなど</td></tr>
</table>

2)　面接調査の結果

攻撃性喚起場面における個人の内的過程について，ワークシートの回答に基づいた面接調査を行った。録音データから逐語録を作成して，出来事，喚起された攻撃性，内的過程の変遷などについてまとめた(表 18)。見出された要素を基に調査者が面接調査の内容を振り返り，調査協力者 X と Y それぞれの内的過程について自己愛傾向の影響を念頭に，攻撃性の方向に注目しながら，発言や文脈から推測された要素も加えて解釈した。なお，「」を用いた部分は調査協力者の発言を引用している。

また，X と Y は自分と“とてもよく似た感じ方，考え方をもつていて，感じたり考えたりすることや実際に行うことが手に取るように分かる”架空の人物 A について想像し，攻撃性喚起場面を語った。そのため A と各調査協力者自身とが乖離する程度は調査協力者ごとに異なり，場合によっては大きく駆け離れたエピソードが語られる可能性もある。そこで面接調査終了時に“A のことを十分に話せたと感じる程度”を 0~10 の段階で評価するよう求め，間接的な指標とした。結果，X，Y 各々が 8~9 と回答し，かなりの程度十分に A について話せたと感じていた。また面接調査の感想として，X は「私が(中略)あったことに近いことを書いてる」，Y は「A さんのことを想像して(中略)，気づいたら自分のことを話してる」と語られたことからも，X，Y 共に，A に自身をかなりの程度投映したものと判断した。そこで本研究では A の話が X，Y それぞれの体験に近い内容であることから，以降においては A を X と Y の調査協力者名に置き換えて記載する。

以下に続く「表 18」および「a. X の攻撃性喚起場面における内的過程」，「b. Y の攻撃性喚起場面における内的過程」は，守秘義務を遵守するため削除いたします。

第 4 節　考察

以下に続く「4.1.　X の自己愛傾向および攻撃性の特徴と攻撃性喚起場面における内的過程について」および「4.2.　Y の自己愛傾向および攻撃性の特徴と攻撃性喚起場面における内的過程について」は，守秘義務を遵守するため削除いたします。

4.3.　自己愛傾向および攻撃性の特徴と攻撃性喚起場面における内的過程との関連について

本研究では，2 名の調査協力者について，自己愛傾向および攻撃性の特徴と攻撃性喚起場面の内的過程との関連を考察した。

X の攻撃性喚起場面における内的過程には，無関心型および過敏型の特徴が共に高い場合の自己愛傾向が生み出す葛藤が反映されていることが推測された。すなわち無関心型の自己主張性が外向攻撃性の言語的攻撃の表出欲求を高める一方で，過敏型の承認・賞賛過敏性が脅威の認知および防御反応としての敵意を生じさせる反面，それ以上に攻撃性の表出方法調整や抑制にもつながり，この両者が対立する過程としての葛藤である。加えて，感情緩和方略については，こうした葛藤が過敏型の自己緩和不全の特徴をより他律的，受動的に反映した様態，つまり，対象を定めずに攻撃性を表出する行動に向かわせることが考えられた。

Y の攻撃性喚起場面における内的過程では，他の自己愛傾向下位尺度に比べ相対的に高い過敏型の承認・賞賛過敏性が，攻撃性の抑制に大きな影響を与えている点が特徴であった。また同時に，承認・賞賛過敏性によって一度は抑えられた攻撃性が何かのきっかけで再燃する際に，瞬間的に激しい怒りと衝動性を喚起する様子もうかがわれた。

X の喚起場面から，無関心型と過敏型の両方が高い場合には攻撃性の表出方法に葛藤を生じることが，Y の喚起場面から，自己愛傾向が全般的に低い場合でも，相対的に高い下位尺度(承認・賞賛過敏性)が攻撃性の表出抑制に影響を及ぼすことが示唆された。攻撃性の表出時では，X の攻撃性表出方法が周囲を気遣わせ X の自責感喚起に繋がった。しかし一方で X は自らの攻撃性を完全に抑制することをよしとせず，自身の欲求に準じたともとれる。対する Y は喚起時に自身の感情よりも周囲の状況を優先させ，後に不測の表出によって不全感を感じた。攻撃性喚起時では Y の表出抑制の方が対人関係上波風を立てず好ましいように思われるが，その後の流れを追うと X の表出行動の方が結果的，相対的に当人の精神的健康を損なわなかったようにみえる。知り合って間もない友人集団内にいた X と多忙な状況下で友人に裏切られた Y とを単純に比較することはできないが，Y のように過敏型の注目・賞賛欲求のみが相対的に高い場合よりも，X のように自己愛傾向が全般的に高い場合の方が，攻撃性の表出を行いやすく，また表出できる分，精神的健康を損なう程度が低いのかもしれない。一方で，両名が攻撃性の内的過程を変容させる要因に他者との関係性を取り上げつつ，X の感情緩和方略は<悲しくなるので自分からは話したくない，気づいてなだめてほしい>と他者依存的で，Y の感情緩和方略は<親しい人に自は分の悪いところも含めて話せる。肯定されても否定されても納得できる>と比較的自律している点にも触れておきたい。X の感情緩和方略には過敏型の自己緩和不全と承認・賞賛過敏性が，他者に気持ちを受け入れてほしいがどう思われるのか気がかりだという葛藤として複合的に影響しているさまがうかがえる。この方略は，他律的な要因に依存する部分が多いために感情緩和を達成できる可能性が変動しやすいと考える。対する Y の方略では親しい人にあり

のままの自分を開示する様子が語られており，相対的に高い承認・賞賛過敏性の影響が限定的に当てはまらない，信頼できる人物との関係が重視されていると思われる。能動的に相手を選択して働きかけ，その反応によらず感情を緩和できるという点で，Y の方略の方が安定した感情緩和を可能にしているのではないだろうか。このように，感情緩和方略については，過敏型が高い場合に下位尺度間で葛藤を生じたり，自己愛傾向全般が低い場合に安定した方略が示されたりする可能性が示唆された。

第 5 節　まとめと今後の展望

本研究では外向・内向攻撃性が自己愛傾向の無関心型，過敏型という 2 つの現象像によって異なる様相をもち，さらに相手との関係性などによってその表出が変化するものと仮定して，自己愛傾向と攻撃性の関連について個人の内的過程に着目した検討を行った。その結果，無関心型と過敏型は攻撃性喚起場面の内的過程やその後の精神的健康に異なる影響を及ぼすことのみならず，無関心型と過敏型が共に高い場合には攻撃性の表出や感情緩和方略に関する葛藤を招くこと，自己愛傾向が全般的に低い場合でも，相対的に高い下位尺度が攻撃性の表出抑制に影響し，安定した感情緩和方略を示す可能性があることが示唆された。

なお，本研究では，研究Ⅱ-2 の研究結果に基づき，質問紙調査で自己愛傾向と攻撃性の個人的特徴を描き出しているが，今後自己愛傾向と攻撃性との関連を検討する際には，こうした一般性と個人差の両面からのアプローチは有効であると考える。また，面接による語りから自己愛傾向と攻撃性喚起場面における内的過程へ詳細にせまるアプローチに加え，質問紙調査などによって対人場面での自己愛傾向の特徴についてある程度のモデル化ができるならば，その併用によって面接調査結果の検討に有益な視点が得られるとも考える。さらに，今後攻撃性喚起場面における個人の内的過程が明らかになるにことで，調査協力者に対して検討対象となる要因や視点をより分かりやすく提示することが可能になれば，長期的には本研究で使用したワークシートなど，個人が自らの特徴に基づいた健康的な対処方法を考えるための材料を呈示しての心理臨床活動に繋がっていくことが期待される。

第 4 章　総合考察

本研究では自己愛傾向と攻撃性との関連について検討するに当たり，自己愛の概念に混乱が見受けられため，自己愛の概念を整理した上で，無関心型および過敏型自己愛傾向と外向，内向攻撃性との関連を検討した。さらに，個人の内的過程に焦点を当てて自己愛傾向と攻撃性との関連を探索的に検討するため，質問紙調査によって調査協力者の自己愛傾向と攻撃性についての特徴をとらえた上で，ワークシートと面接調査を行い，その上で質問紙調査の結果を提示し，面接調査の内容を検討するための資料として用いた。

以下では研究Ⅰ，Ⅱ，Ⅲのそれぞれにおいて得られた知見をまとめ，本研究を総括する。なお，以下では無関心型と過敏型を，臨床，非臨床の水準を問わず自己愛の現象像を指す用語とし，自己愛傾向の現象像に限定される場合には，無関心型自己愛傾向，過敏型自己愛傾向と表記する。

第 1 節　研究Ⅰにおける知見

自己愛の概念の検討の際には，理論的側面と現象像的側面，および健康性と不健康性，臨床水準と非臨床水準，無関心型と過敏型という視点から，先行する理論的研究と調査的研究の知見の統合を試みた。検討を通して，自己愛の概念の混乱には不健康的自己愛と健康的自己愛の異同の不明瞭さが影響していることが一因として考えられた。

理論的側面からの検討として，Freud，Kernberg，Kohut の自己愛論を概観したところ，自己愛はあらゆる人に備わる心性であること，健康性と不健康性を備えていること，健康性と不健康性を規定する要因に人が生来持つ欲求の適切な充足体験の成否が関与することについては，おおむね共通の見解が見出された。健康的自己愛が，およそ自分に対する肯定的感覚と考えられる点も同様である。一方で，不健康的自己愛については，Kernberg と Kohut の理論において次のような相違が見出された。1 つには，不健康的自己愛が示す誇大性が自己全体であるのか一部分であるのか，もう 1 つは他者に対して無関心であるか過敏であるかという違いである。そして，不健康的自己愛の成立には次のような共通過程が考えられた。

まず，生来の欲求の過度の不充足あるいは不適切な充足によって，自信の萌芽ともいうべき未熟な万能感と，この万能感の現実的調節に必要な理想的な他者が体験されない。すると，自信に欠け，他者からの評価に依存的でありながら誇大性を帯びた自己が成立する。ところが，理想的な他者が体験されないため，この他者から適度な不充足を体験し，未熟な誇大性が現実的に調節されるという過程も経ない。そのために，非現実的な誇大性が調節されないまま継続する。

こうした共通過程から，横柄さと対人過敏性という異なる現象像がみられる点には，誇大性が自己の全体であるか一部であるかという点が関わっていると想定した。すなわち，無関心型において誇大な自己は実際の自分そのものであり，過敏型では他者が過剰に賞賛した部分が誇大性となり，本来の承認への欲求は抑圧されるという背景である。

上記の過程に基づいて，現象像的側面から先行研究の知見を検討したところ，自己愛は

臨床水準から非臨床水準にまで同質性，連続性をもって存在し，無関心型と過敏型という 2 つの現象像を，個々人によって異なる比重で呈する概念であると位置づけた。また，無関心型と過敏型の現象像は臨床像から形成された概念であり，健康的自己愛と不健康的自己愛との間に，現実の自己と融合した誇大な自己をもつか否かという質的な差を設けたので，2 つの現象像は不健康的自己愛に属すると考えた。

続いて，自己愛傾向の健康性と不健康性について，無関心型自己愛傾向の高い人は，自分について健康的で望ましい感覚をもっている一方で，周囲の人からはその人の実際と顕示される誇大性との間に齟齬が感じられたり，横柄な言動に振り回されたりする場合もあるのではないかと考えられた。また，過敏型自己愛傾向の高い人が，「対人関係や社会的活動からひきこもる」(近藤,2000)一方で，「他者の立場に立つ事が困難で」「保護されることを求める癖がついている」(坂口・朝井,2008)とも述べられることから，過敏型自己愛傾向の高い人は，社会的場面を回避する面と自分に対する配慮や保護を強く求める面も併せ持っているとも考えられた。こうした点を総括して、自己愛傾向は表面に示される健康性や対人過敏性などと，対人関係上の問題や潜在的な誇大性という複合的な現象像の総体から成立しており，見当の際には他者との関係に焦点を当てることが有用であることが示唆された。

上記の検討は，より広範な先行研究の知見と統合し，個々の仮定の妥当性を検討することで，さらに自己愛の実態に即した理解を可能とする余地を残すものである。しかし，自己愛の概念を取り扱う際に混乱が見られる点と，その点に留意することで得られる種々の利点を示した点，また概念について理論的，現象像的側面から包括的な位置づけと見解を提出したという点で，自己愛の理解に一定の知見を提供しうるものと考える。特に，実証研究に関わる点として，健康的自己愛と自信や自尊感情との質的相違，自己愛傾向の不健康性および他者との関係への焦点づけについての仮説的な見解は，研究において得られた結果から自己愛傾向の諸相を描く際の議論を明確にできるという利点を期待できるのではないだろうか。

第 2 節　研究Ⅱにおける知見

研究Ⅱでは自己愛傾向の問題が他者との関係において示されるという視点に基づいて，自己愛傾向と，自己愛が呈する主要な問題の 1 つである攻撃性との関連を検討した。この際に注目したのは，無関心型と過敏型という 2 つの現象像が，他者に向けられる攻撃性(外向攻撃性)，自分に向けられる攻撃性(内向攻撃性)とそれぞれどのような関連をもつのかという点であった。

始めに，研究 1 では過敏型が全体的に高い値で認められ，日本では過敏型の現象像がよく見られるという福井(1998)するという符号と指摘する結果となった。攻撃性との関連において，過敏型は外向攻撃性，内向攻撃性が共に高いことが示された。無関心型は外向攻撃性のみが高く，内向攻撃性との関連は見られなかった。このことから過敏型は自分にも他者にも攻撃性をもつこと，無関心型は他者に対してのみ攻撃性をもつことが示された。

研究 2 において，外向，内向攻撃性の下位尺度も含めて無関心型および過敏型との関連

を検討すると，過敏型と外向攻撃性全体および外向攻撃性の認知，感情的側面，そして内向攻撃性全体および内向攻撃性の情動的側面，行動的側面と正の関連が認められた。無関心型は外向攻撃性の言語的側面の高さが示され，内向攻撃性全体および内向攻撃性の感情的側面の低さも認められた。また，研究 2 でも相対的に過敏型が高く認められ，日本において無関心型よりも過敏型の現象像が多く見られるという福井(1998)の指摘が支持する傾向がみられた。

まず，過敏型については，Kohut(1971)の自己愛論によると，過敏型を呈する人の自己の構造は, 誉めたたえられることを当然とするような誇大性をもった自己と, 誉められたい, 認められたいという生来の欲求が抑圧された部分，さらに，欲求が抑圧された結果，自信に欠ける部分とに分割されている。加えて，他者から期待した反応が得られない場合に，相手に激しい攻撃性を生じる(自己愛的憤怒)とも指摘される。これらの点から，誇大な自己の部分が他者に権威的で，自分が特別に扱われるべきという感覚を備えていると考えると，過敏型の人の誉められたい, 認められたいという欲求が満たされず, 攻撃性を生じる場合，攻撃性は他者に向かうと考えられる。この場合，求める反応が得られなかったことで誇大な自己が傷つき, すなわち自己愛が傷ついて, 外向攻撃性が生起したと考えられるだろう。また，過敏型の人は「軽蔑あるいは批判されていないかどうか，注意深く他者の話に耳を傾けている」「傷つけられたという感情を持ちやすい。恥や屈辱感を感じやすい」(Gabbard,1994)ともされる。従って，周囲の様子に被害的な感覚とともに注意を集中させることで, 他者からの悪意や蔑視を感じる傾向である外向攻撃性の認知的側面(敵意)が高まりやすいことも考えられる。しかし，過敏型の下位尺度をみると，外向攻撃性との関連が見られるのは認知，感情的側面のみで，言語的攻撃や身体的攻撃といった攻撃行動を志向する傾向との関連は見られていない。この点は，過敏型が誉められたい，認められたいという欲求から，他者を攻撃し，批判されるような事態を避けているために，攻撃性をもちながらも実際に表出しようという段階には至らないためとも考えられた。次に，内向攻撃性との関連については，自分に自信がない部分が，他者への攻撃性を感じた際に敢然と相手へ挑みかかっていく外向の方向よりも，自分を責めたり，傷つけたりする内向の方向へと攻撃性を向け変えていくと考えられた。

次に無関心型については，研究 1 で外向攻撃性全体と言語的側面に正の関連が見られたが，研究 2 では言語的側面のみと正の関連が見られた。同時に，研究 1 で相関が示されなかった内向攻撃性との関連が，研究 2 では内向攻撃性全体と感情的側面との間に負の関連が示された。この点から無関心型の外向，内向攻撃性への影響が安定しないことも考えられるが，無関心型の中央値が尺度上のニュートラルな値よりも低く，測定された無関心型の性質が，自分の意見や考えを開示することを拒まない，健康的な自己主張の範囲にとどまっていると考えると，この傾向が，外向攻撃性の中でも議論を好む言語的側面との関連を示したとも考えられ，あながち矛盾する結果とまでは言えないものと考えた。また，内向攻撃性は，過敏型が低い群では研究 1，2 ともに無関心型の高さが抑制的に働いている。無関心型の人は自分が重要な存在であるという感覚からさほど周りを気にせずに自分を主張する傾向が指摘されているので，自己否定感や罪悪感等自己に対する否定的な感情とは，少なくとも表面的には反対の機制をもつと考える。そして，無関心型の人がもっぱら確か

な優越感の下に自分を顕示しているとすると，無関心型の人は Gabbard(1994)が述べる通り「『送信機はあるが受信機はない』ような人」として，他者に対してエネルギーを発し続けており，攻撃性という一つのエネルギーにしても自分には向けられにくいと思われる。また，過敏型が高い群では研究 2 のみに，無関心型の内向攻撃性を抑制する効果が認められた。過敏型と無関心型とが高い群が，内向攻撃性を抑制するのか否かが今後の検討項目の 1 つとも考えられた。なお，本研究で使用した NPI-S と NVS の間に有意な相関は認められず，無関心型と過敏型と両方の現象像を高く示した調査協力者が一定数いたことから，無関心型と過敏型は特性的に作用している可能性が考えられた。

以上のように研究Ⅱでは，無関心型と過敏型が攻撃性について異なる現象像を示すことが明らかにされた。過敏型の現象像は外向攻撃性の高さと内向攻撃性の高さを安定して示すようであるが，無関心型の現象像は，外向攻撃性，言語的攻撃性および内向攻撃性と自責感に関連がみられたものの，一貫した結果は見られなかった。自己愛傾向が傷つきを契機に問題を発現する(中川,2004)ことが指摘される一方，過敏型の抑制的な特徴と兼ね合わせると，認知，感情面での外向攻撃性との関連が示された点には過敏型の現象像の把握のために有用性があったと言えるだろう。今後は無関心型を自己主張性以外の側面も含めて測定し，検討すること，および無関心型と過敏型とがどちらも高い場合に内向攻撃性が抑制されるか否かといった点が検討項目として考えられた。

第 3 節　研究Ⅲにおける知見

研究Ⅲでは，質問紙調査による自己愛傾向と攻撃性の特徴と面接調査面接調査による攻撃性喚起場面の内的過程を用いて，自己愛傾向と攻撃性の関連を個人の事例に焦点を当てて検討した。検討を通して，自己愛傾向の現象像が攻撃性の喚起だけでなく，解消，緩和に至るまで影響をおよぼす様子がうかがわれた。

無関心型と過敏型がともに高い場合には，外向攻撃性の表出が過敏型によってためらわれ，一方で無関心型の自己主張性および過敏型の自己緩和不全によって完全な抑制にも至らず，迂遠で他律的な様式で表出された結果，その攻撃性が最適な形で解消されなかった場合は，内向攻撃性として自分に向け変えられるという，複雑な作用機序が想定された。また，自己愛傾向が低い中で，承認・賞賛過敏性のみが相対的に高い場合には，外向攻撃性が当人に感知される段階から強く抑制されるようであり，周囲を優先するあまりに加害的な行動を取った相手を許してしまうという過程がみられた。さらに，抑制された外向攻撃性は，本人も意図しない出来事をきっかけに激しい感情的外向攻撃性として賦活し，関係性攻撃として表出される。しかし，表出される段階でも過敏型の承認・賞賛過敏性による抑制が働き，攻撃性を表出したとしても解消はされない。解消されるのは特定の信頼できる他者に対して大らかな自己開示ができる場合であり，この点には感情緩和方略の安定性がうかがえた。

この点から，無関心型，過敏型の現象像が高く示される場合には，攻撃性の表出や感情緩和方略に葛藤を招くようである。また，自己愛傾向が全体的に低い場合でも，相対的に高い下位尺度が攻撃性の表出や感情緩和方略に影響することが示唆された。加えて，感情

方略については，前者がある程度親しい他者に依存する部分が多く表出した外向攻撃性が最適な形で解消されない場合には内向攻撃性に転化することが示された点に対して，後者では感情緩和を期待する相手が限定され，かつ相手の反応によらず安定した感情緩和を可能とする点からは，自己愛傾向の低さが能動的，自律的な感情緩和，自己調整を支持するものと思われた。

以上から無関心型と過敏型と攻撃性との関連について，個人に焦点を当てた検討によって，自己愛傾向の現象像が攻撃性の多様な次元に複合的に作用するほか，感情緩和方略にも異なった様相を表わすことが示された。無関心型と過敏型のそれぞれの現象像は，多くは質問紙調査によって明らかにされつつあるが，双方が連続性をもって，個人ごとに異なる様相を呈するとも指摘されている(Kernberg,1998 佐野監訳，Kohut,2003，1980 岡訳,1991)ことを踏まえると，質問紙調査に加えて，面接調査やワークシートという複数の面から個人に焦点を当てた検討は，有用であると考える。

第 4 節　本研究の総括と今後の展望

本研究では，自己愛の概念を整理した上で，自己愛傾向と攻撃性との関連を検討することを目的にした。研究Ⅰで得られた知見の 1 つは，自己愛傾向が不健康的自己愛の現象像であり，不健康的自己愛は他者との関係において誇大性が現実的に調整されておらず，実際の自己と融合して承認，賞賛を求める，あるいは誇大性を顕示するために，周囲との摩擦を来たすという仮説的な見解の提出であった。また，この見解を基に，自己愛を検討するためには，個人と他者との関係に焦点を当てて，質問紙調査等の主観的報告を補足する視点の有用性を指摘した。研究Ⅱでは無関心型が言語的な外向攻撃性の高さ，感情的な内向攻撃性の低さと関連する傾向がみられ，過敏型が認知，感情面の外向攻撃性の高さ，感情，行動面での内向攻撃性の高さを示すことが明らかになった。無関心型と過敏型とが異なる現象像を呈することが示されたと言えるが，無関心型と過敏型が個々人で異なる比重をもつという Gabbard(1994)の指摘を考慮すると，自己愛傾向と攻撃性との関連はさらに多様な現象像を呈すると推察された。調査Ⅲでは，無関心型と過敏型がどちらも高い場合に攻撃性の喚起，表出および抑制と軽減あるいは解消といった攻撃性の種々の過程に葛藤を生じ，感情緩和方略が他律的で安定性に欠けること，自己愛傾向が全体的に低い中，相対的に過敏型の承認・賞賛過敏性が高い場合には，攻撃性が強く抑制される一方，急激に噴出する場合もあり，当人にとって思いがけず攻撃性が表出した際には，攻撃性は軽減されても不全感が残るものの, 感情緩和方略には能動的, 安定した定型があることが示された。個人の自己愛傾向によって異なる攻撃性および感情緩和方略の様相が認められたと考えられる。

上記の知見を踏まえて，今後の研究課題としては大きく次の点が挙げられる。1 つに，本研究で提出した仮説的見解の精査である。対人関係の摩擦，社会生活上の適応困難，あるいは新型うつ等の精神疾患に至るまで様々な精神的健康を検討する上で，自己愛という概念が重要性を帯びる昨今，その理論的背景と作用，現象像を明らかにすることは，心理臨床の分野，また，他の広範な分野にとっても有益であると考える。もう 1 つは，自己愛傾向と攻撃性との関連について，相互の関連や作用過程のモデルを設け，検討することである。質問紙調査等による量的研究から骨子となるモデルを設ける一方，質的研究から個人の内的過程を明らかにしていくことで，治療的介入の要点が見出されていくことが期待される。

現代の「キレる」若者に肥大した自己愛がみられることが随所で指摘され(中村,2004; 松並,2013), そうした若者の対応には自己愛の傷つきと自己愛的憤怒の概念を取り入れた理解が必要である(ウォルフ,1988; 安村・角田,2001)とも言われている。理論的研究と個別的かつ多面的な調査研究との接近によって，自己愛傾向と攻撃性との関連がより明確化されることで，心理臨床の現場に即した知見を得ることができるのではないだろうか。

要約

本研究の目的は，広範な領域で用いられるにつれ複雑化し定義に混乱のみられる自己愛の概念について整理し，その上で，自己愛傾向と攻撃性との関連について検討することである。第 1 章の研究Ⅰでは，先行研究の知見を踏まえ，理論的側面および現象像的側面から，健康性と不健康性，臨床水準と非臨床水準，過敏型と無関心型という視点をもって自己愛の概念を整理し，不健康的自己愛の規定因の 1 つに，他者との間で現実的な調整を経ない誇大自己と現実自己の融合が想定されるという仮説的見解を提出した。その上で，第 2 章の研究Ⅱでは，自己愛の主要な問題の 1 つである攻撃性と，非臨床群の自己愛傾向との関連を調査し，検討した。その際，自己愛傾向を無関心型と過敏型の 2 つの現象像から，攻撃性を外向攻撃性と内向攻撃性に分けてとらえ，両攻撃性の下位尺度との関連も検討した。その結果，無関心型は言語的攻撃の高さ，自責感の低さと，過敏型は認知，感情面の外向攻撃性の高さ，内向攻撃性の高さとの関連が示された。さらに，第 3 章の研究Ⅲでは，無関心型および過敏型自己愛傾向と外向攻撃性，内向攻撃性との関連を，個人の内的過程に着目して個別に検討した。その際，質問紙調査で個人の自己愛傾向と攻撃性の特徴を描き出した上で，攻撃性喚起場面とその際の気持ちや行動の変遷を，ワークシートと半構造化面接調査によってとらえた。また，質問紙調査の結果を調査協力者に提示して感想を求めることで，攻撃性喚起場面を検討する際の資料の 1 つに加えた。結果，無関心型と過敏型の両方が高い場合は攻撃性の表出方法に葛藤を生じ，自己愛傾向が全体的に低い場合でも，相対的に高い下位尺度が攻撃性の抑制，表出に影響する様子が認められた。今後は自己愛の仮説的見解の精査と，他者との相互作用に焦点を当てた多面的研究による自己愛傾向と攻撃性との関連の検討，および介入的アプローチに資する知見の提出が望まれる。

引用文献

相田貴子・深尾篤嗣　2008　慢性抑うつのために長期休職後の職場復帰困難を示した際に，自己愛の傷つきの取り扱いと認知行動療法が有効だった症例　心身医学,**48**,903.

相澤直樹　1999　ナルシシズムに関する一考察―現象象・病態像，および，精神力動論の再整理の試み―　大阪大学教育学年報,**4**.171-186.

相澤直樹　2002　自己愛的人格における誇大特性と過敏特性　教育心理学研究,**50**,215-224.

安立奈歩　2001　攻撃性の諸相に関する研究　京都大学大学院教育学研究科紀要,**47**,475-487.

安立奈歩　2003　攻撃性に関する先行研究の概観京都大学大学院教育学研究科紀要,**49**,442-454.

American Psychiatric Association 1994 *Diagnostic and statistic manual of mental disorders: Fourth edition*. Washington,D.C. : Author.(高橋三郎・大野裕・染矢俊幸訳(1995)　『DSM-Ⅳ　精神疾患の診断･統計マニュアル』　医学書院).

浅利仁美　2013　自己愛のサブタイプによる対人場面での特徴についての研究　福山大学こころの健康相談室紀要,**7**,83-89.

アスパー,K.(老松克博訳)　2001　『自己愛障害の臨床』　創元社.

(原著：Asper,K.A. 1987　*Verlassenheit und selbstentfremdung*. Olten, Walter Verlag.)

安藤明人・曽我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦治・坂井明子　1999　日本版 Buss&Perry 攻撃特徴問紙(BAQ)の作成と妥当性，信頼性の検討　心理学研究,**70**,384-392.

Baron, R. A. 1979 Effects of Victim's Pain Cues, Victim's Race, and Level of Prior Instigation upon Physical Aggression. *Journal of Applied Social Psychology*, **9**, 103–114.

Baron,R.A.&Richardson,D.R. 1994 *Human aggression(2nd ed.)*. New York: Plenum Press.

Cooper,A.M. 1986 Narcissism: in Essential papers on narcissism, A.P.Morrison,ed, New York University Press. 112-143.

福井敏　1998　誇大的な自己―自己愛性障害―　こころの科学,**82**,75-80.

福島さおり 2007　攻撃性と自己愛傾向の関連性について　臨床心理学研究,**33**,38.

Feshbach,S. 1970 Aggression. In P.H. mussenn (Eds.), *Carmichael's manual of child Psychology*. **2**. Wiley&So*n.s.*

フロイト,S.　(懸田克躬･高橋義孝訳)　1969　『ナルシシズム入門(フロイト著作集第５巻)』人文書院.

(原著：Freud,S. 1914 *On narcissism; an introduction*. in Complete Psychological Works, Standard ed, **14**, London, Hogarth Press 1949).

Gabbard,G.O. 1994*Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM-Ⅳedition*. Washington,D.C. American Psychiatric Press. (舘哲郎監訳 1997『精神力動的精神医学　③臨床偏: Ⅱ軸障害』岩崎学術出版).

原田新　2009　自己愛の過敏性に関する一考察　神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要,**3**,19-28.

稲永要　2010　「過敏型」自己愛傾向と自己不全感および空虚感との関連　九州大学心理学研究,**11**,135-143.

上地雄一郎・宮下一博　2005　コフートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成　パーソナリティ研究,**14**,80-91.

上地雄一郎・宮下一博　2009　対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性, 自己不一致, 自尊感情の関連性　パーソナリティ研究,**17**,280-291.

柏木勉　1988　Wrist Cutting Syndrome のイメージ論的考察―23 症例の動機を構成する 3 要因の検討―　精神神経学雑誌,**90**,469-496.

川上正憲・宮田久嗣・杉村共栄・中村文子・小野和哉・牛島定信　2001　自己愛性人格構造が基盤にある症例について―境界性人格水準と神経症性人格水準にある 2 症例を通して―　臨床精神医学,**30**,533-537.

川原誠司・永井知子　2012　必修科目としてメンタルヘルス教育を実施することの意味(1)―大学生の現状と課題―　宇都宮大学教育学部教育実践センター紀要,**35**,85-92.

川崎直樹・小玉正博　2007　対人恐怖傾向と自己愛傾向の共通構造としての自己概念の乖離性および不安定性の検討　パーソナリティ研究,**15**,149-160

Kernberg,O.F.　1970　Factors in the treatment of narcissistic personalities. *Journal of American Psychoanalytic Association*, **18**, 51-85.

Kernberg,O.F. 1975　*Borderline conditions and pathological narcissism*. New York: Jason Aronson.

Kernberg,O.F.　1998　Pathological Narcissism and Narcissistic Personality Disorder : Theoretical Background and Diagnostic Classification. In: (ed.), Ronningstam,E.F. Disorders of Narcissism : Diagnostic, Clinical, and Empirical Implications. American Psychiatric Press, Washington, D.C.(佐野信也訳　2003　『病的自己愛と自己愛人格障害―理論的背景と診断分類―　佐野信哉監訳　自己愛の障害：診断的、臨床的、経験的意義』　金剛出版.)

小林正信・西垣順子・相沢徹・橋本巧　2003　メンタル・ヘルスの相談事例から見る学生の抱える諸問題―その 2―　信州大学教育システム開発センター紀要,**9**,119-132.

コフート,H.　(水野信義・笠原嘉訳)　1994　『自己の分析』　みすず書房.

(原著：Kohut,H. 1971　*The Analysis of the Self*. New York: International Universities Press.).

Kohut,H. 1977 The restoration of the self. Madison: International Universities Press. (本城秀次・笠原嘉(監訳) 1995 『自己の修復』　みすず書房).

Kohut,H. 1980 Summarizing reflections. In:(ed.), Goldberg,A. Advances in Self Psychology. International Universities Press, New York.(岡秀樹訳　1991　『「自己心理学の進歩」を読んで. 自己心理学とその臨床―コフートとその後継者たち―』　岩崎学術出版社.)

近藤直司　2000　「自己愛パーソナリティ障害」　狩野力八郎・近藤直司編著　『青年のひきこもり』　岩崎学術出版社.

小西瑞穂・山田尚登・佐藤豪　2008　大学生の自己愛人格傾向と自我状態との関連　滋賀医療大学誌,**21**,4-8.

Krahé,B. 2001 The Social Psychology of Aggression. East Sussex. UK: Psychology Press. (秦一士・湯川進太朗編訳 2004　『攻撃の心理学』　北大路書房)

前川恵里・宮本正一　2006　自己愛傾向と対人態度の関連　東海心理学会第 55 回大会発表論文集,**56**.

Masterson,J.F. 1993 The emerging self: A developmental, self, and object relations approach to the treatment of the closet narcissistic disorder of the self. New York: Burnner/Mazel.

松並知子　2013　自己愛の研究の概観―ナルシシズムとセルフラブ，および，質的な性差に焦点を当てて―　四天王寺大学紀要,**56**,1-21.

Miller,J.D., Gaugham,E.T., Pryor,L.R. Kamen,C.&Campbell,W.K.　2009　Is research using the narcissistic personality inventory relevant for understanding narcissistic personality disorder? *Journal of Research in Personality*,**43**,482-488.

中川美保子　2004　過剰な攻撃性を表出する青年への援助について　京都大学大学院教育学研究科紀要,**50**,413-425.

中村晃　2004　健全な自己愛と不健全な自己愛　千葉商大紀要,**42**.1-20.

Nakao,M. Nomura,S. Yamanaka,G. Kumano,H. & Kuboki,T.　1998　Assessment of patients by DSM-Ⅲ and DSM-Ⅳ in a Japanese psychosomatic clinic. *Psychotherapy and Psychosomatics*, **67**,43-49.

中山留美子　2007　児童期後期・青年期における自己価値・自己評価を維持する機能の形成過程―自己愛における評価過敏性，誇大性の関連の変化から　パーソナリティ研究,**15**.195-204.

新見直子・川口朋子・江村理奈・越中康治・目久田純一・前田健一 2007　青年期における自己愛傾向と自尊感情　広島大学心理学研究,**7**,125-138.

野村総一郎・樋口輝彦 2005　『標準精神医学』　医学書院.

大渕憲一　1993　『人を傷つける心―攻撃性の社会心理学―』　サイエンス社.

Obuchi,K.,Ohno,T.&Mukai,H.　1993　Empathy and aggression : Effects of self-disclosure and fear appeal. *Journal of Social Psychology*, **132**,243-253.

小此木啓吾　1981　『自己愛人間』　朝日出版社.

小塩真司　1997　自己愛傾向に関する基礎的研究―自尊感情社会的望ましさとの関連―名古屋大学教育学部紀要,**44**,153-163.

小塩真司　1998　青年の自己愛傾向と自尊感情，友人関係のあり方との関連　教育心理学研究,**46**,280-290.

小塩真司　1999　高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方と関連　性格心理学研究,**8**,1-11.

小塩真司　2002　自己愛傾向によって青年を分類する試み―対人関係と適応，友人によるイメージ評定から見た特徴―　教育心理学研究,**50**,261-270.

小塩真司　2004a　自己愛と自尊感情が集団活動の自己評価および成員評価に及ぼす影響　日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集,**13**,90-91.

小塩真司　2004b　『自己愛の青年心理学』ナカニシヤ出版.

遠田諭　2011　フラストレーション場面における自己愛と言語表出の関係　埼玉学園大学.人間学部篇,**11**,89-100.

小野和哉　2005　高齢者の自己愛性パーソナリティ障害　老年精神医学雑誌,**16**,560-566.

小野和哉 2010　自己愛パーソナリティ障害　精神科治療学,**25**　星和書店.
大野雄子 2008　青年期の自己愛と対象関係について―臨床事例の観点から―　千葉敬愛短期大学紀要,**30**,61-71.
落合萌子　2008　対人不安特性と過敏型自己愛傾向とが他者評価好転場面における認知と感情に与える影響,**49**.172-173.
Raskin,R.&Hall,C.S.　1979　A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*,**45**,590.
Rosenfeld,H.A. 1987 Impasse and interpretation. London: Tavistock Publications.
相良麻里・相良陽一郎　2004　青年期における自己愛の研究―攻撃性との関わりにおいて―　日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集,**13**,151.
坂口守男・朝井均　2008　生活の場で見るメンタルヘルス(3)―適応困難学生からの検討―　大阪教育大学紀要第Ⅲ部門,**56**,41-50.
坂井明子・山崎勝之　2004　攻撃性概念の細分化と形成過程　美作大学短期大学部紀要,**49**,1-7.
佐々木淑子　1998　自己愛の傷つきで抑うつ状態を呈した女性との面接過程　精神分析研究,**42**,400-406.
Sears,R.R.&Sears,P.S. 1939 Minor studies of aggression strength frustration-reaction as a function of strength of drive. *Journal of Psychology*: Interdisciplinary and Applied, **9**, 297-300.
関真粧美　2006　パーソナリティ障害　こころの臨床　白波瀬丈一郎・狩野力八郎編著,**25**,440.
清水健司・川邊浩史・海塚敏郎 2007　青年期における対人恐怖心性と自己愛傾向の相互関係について　心理学研究,**78**,9-16.
白波瀬丈一郎　2006　パーソナリティ障害に広く存在する，自己愛の障害　こころの臨床　白波瀬丈一郎・狩野力八郎編著,**25**,491-496.
谷口奈青理　1994　青年期女子における自己破壊傾向と母子関係について　京都大学教育学部紀要,**40**,277-288.
Tedeschi,J.T.,Gates,G.G.,&Rivera,A.N. 1977 Aggression and the use of coercive power. *Journal of Social Issues*, **33**, 101-125.
ウォルフ,E.S.(安村直己・角田豊訳)　2001　自己心理学入門　コフート理論の実践　金剛出版.
(原著：Wolf,E.S.　1988　*Treating the self: Elements of Clinical Self Psychology.* Guilford Press.)
山田康　2006　パーソナリティ障害　こころの臨床　白波瀬丈一郎・狩野力八郎編著,**25**,450.
山崎久美子・古谷健一　2013　自己愛性パーソナリティ障害を呈する女性摂食障害 4 例の検討　女性心身医学,**18**,119.
山崎俊輔　2008　青年期における自他への攻撃性と自己愛傾向の関連　九州大学心理学研究,**9**,143-151.

付　録

自分自身そして他の人との関係について

この調査では、あなたが普段の生活の中で「自分自身をどのように思っているか」、「他の人とどのような関係をもっているか」などをおうかがいします。回答については、この調査以外の目的に使用したりすることはありません。また、大学の授業成績に関係するものでもありません。思ったところを率直にお答えください。

記入例

右の記入例を参考に、一つひとつの質問について、当てはまる数字に〇を付けてください。〇を付けていただく質問は、全部で 107 問あります。

例）

	とてもよく当てはまる	どちらかと言うと当てはまる	どちらともいえない	どちらかというと当てはまらない	まったく当てはまらない
私は誰とでもすぐ友達になれる。	5	(4)	3	2	1

◆あなた自身について、以下の 1. から 30. までのそれぞれの質問にお答えください。

	とてもよく当てはまる	どちらかと言うと当てはまる	どちらともいえない	どちらかというと当てはまらない	まったく当てはまらない
1. 私は、才能に恵まれた人間であると思う	5	4	3	2	1
2. 私には、みんなの注目を集めてみたいという気持ちがある。	5	4	3	2	1
3. 私は、自分の意見をはっきり言う人間だと思う。	5	4	3	2	1
4. 私は周りの人達より、優れた才能を持っていると思う。	5	4	3	2	1
5. 私は、みんなからほめられたいと思っている。	5	4	3	2	1
6. 私は、控えめな人間とは正反対の人間だと思う。	5	4	3	2	1
7. 私は周りの人達より、有能な人間であると思う。	5	4	3	2	1
8. 私は、どちらかといえば注目される人間になりたい。	5	4	3	2	1
9. 私はどんな時でも、周りを気にせず自分の好きなように振る舞っている。	5	4	3	2	1
10. 私は、周りの人が学ぶだけの値打ちのある長所を持っている。	5	4	3	2	1
11. 周りの人が私のことをよく思ってくれないと、落ち着かない気分になる。	5	4	3	2	1
12. 私は、自分で責任を持って決断するのが好きだ。	5	4	3	2	1
13. 周りの人々は、私の才能を認めてくれる。	5	4	3	2	1

	とてもよく当てはまる	どちらかと言うと当てはまる	どちらともいえない	どちらかというと当てはまらない	まったく当てはまらない
14. 私は、多くの人から尊敬される人間になりたい。	5	4	3	2	1
15. 私は、どんなことにも挑戦していくほうだと思う。	5	4	3	2	1
16. 私は、周りの人に影響を与えることができるような才能を持っている。	5	4	3	2	1
17. 私は、人々を従わせられるような偉い人間になりたい。	5	4	3	2	1
18. これまで私は自分の思う通りに生きてきたし、今後もそうしたいと思う。	5	4	3	2	1
19. 私が言えば、どんなことでもみんな信用してくれる。	5	4	3	2	1
20. 機会があれば、私は人目につくことを進んでやってみたい。	5	4	3	2	1
21. いつも私は話しているうちに、話の中心になってしまう。	5	4	3	2	1
22. 私に接する人はみんな、私という人間を気に入ってくれるようだ。	5	4	3	2	1
23. 私は、みんなの人気者になりたいと思っている。	5	4	3	2	1
24. 私は、自己主張が強いほうだと思う。	5	4	3	2	1
25. 私は、どんなことでも上手くこなせる人間だと思う。	5	4	3	2	1
26. 私は、人々の話題になるような人間になりたい。	5	4	3	2	1
27. 私は、自分独自のやり方を通すほうだ。	5	4	3	2	1
28. 周りの人たちが自分のことを良い人間だと言ってくれるので、自分でもそうなんだと思う。	5	4	3	2	1
29. 人がわたしに注意を向けてくれないと、落ちつかない気分になる。	5	4	3	2	1
30. 私は、個性の強い人間だと思う。	5	4	3	2	1

◆あなた自身について、以下の 1. から 20. までのそれぞれの質問にお答えください。	とてもよく当てはまる	どちらかと言うと当てはまる	どちらともいえない	どちらかというと当てはまらない	まったく当てはまらない
1. 悩んだり落ち込んだりした時に相談できる相手が身近にいないと、私は生きていけないと思う。	5	4	3	2	1
2. 自分の良い所をほめられたり認められたりしないと、自分に自信がもてない。	5	4	3	2	1

	とてもよく当てはまる	どちらかと言うと当てはまる	どちらともいえない	どちらかというと当てはまらない	まったく当てはまらない
3. 相手が私を避けているように思えると、私は非常に落ち込んでしまう。	5	4	3	2	1
4. つらいことや苦しいことがあるときには、身近な人にそれを理解してほしいと強く期待する。	5	4	3	2	1
5. 他の人から批判されると、そのことが長い間ずっと頭にこびりついて離れない。	5	4	3	2	1
6. 他の人に自分のことを自慢するような話をしたあとで、後味の悪い感じが残ることがある。	5	4	3	2	1
7. 人前で自分のことを話したあとに、話した内容について後悔することがある。	5	4	3	2	1
8. 悩みや心配事があるときには、自分の中にとどめておけなくて、すぐだれかに話したくなる。	5	4	3	2	1
9. 精神的に不安定になっているときには、だれかと話をしないと落ち着くことができない。	5	4	3	2	1
10. 他の人が私の発言や行動に注目してくれないと、自分が無視されているように感じることがある。	5	4	3	2	1
11. 自分の発言や行動が他の人から良く評価されていないと、そのことが気になってしかたがない。	5	4	3	2	1
12. だれかと話しているときには、自分の話題で時間を取りすぎてはいけないと思って気にしている。	5	4	3	2	1
13. まわりの人に対して、「もっと私の発言を尊重してほしい」と思うことがある。	5	4	3	2	1
14. 不安を感じているときには、だれかから大丈夫だと言ってもらわないと安心できない。	5	4	3	2	1
15. まわりの人の態度を見ていて、こちらへの配慮が足りないと思うことがある。	5	4	3	2	1
16. まわりの人に対して「もっと私の気持ちを考えてほしい」と思うことがある。	5	4	3	2	1
17. 私は、周囲の人がもっと私の能力を認めてくれたらいいのにと思う。	5	4	3	2	1
18.「自分のことを話しすぎた」と思って、自己嫌悪におちいることがある。	5	4	3	2	1

	とてもよく当てはまる	どちらかと言うと当てはまる	どちらともいえない	どちらかというと当てはまらない	まったく当てはまらない
19. 人と話した後に、「あんなに自分を出すのではなかった」と後悔することがある。	5	4	3	2	1
20. 他の人が私に接するときの態度が丁寧ではないので、腹が立つことがある。	5	4	3	2	1

◆あなた自身について、以下の 1. から 24. までのそれぞれの質問にお答えください。

	とてもよく当てはまる	どちらかと言うと当てはまる	どちらともいえない	どちらかというと当てはまらない	まったく当てはまらない
1. 意見が対立したときには、議論しないと気がすまない。	5	4	3	2	1
2. どんな場合でも、暴力に正当な理由があるとは思えない。	5	4	3	2	1
3. 誰かに不愉快なことをされたら、不愉快だとはっきり言う。	5	4	3	2	1
4. ちょっとした言い合いでも、声が大きくなる。	5	4	3	2	1
5. 相手が先に手を出したとしても、やり返さない。	5	4	3	2	1
6. かっとなることを抑えるのが難しいときがある。	5	4	3	2	1
7. 陰で人に笑われているように思うことがある。	5	4	3	2	1
8. ばかにされると、すぐ頭に血がのぼる。	5	4	3	2	1
9. 友達の意見に賛成できないときには、はっきり言う。	5	4	3	2	1
10. 私を苦しめようと思っている人はいない。	5	4	3	2	1
11. いらいらしていると、すぐ顔に出る。	5	4	3	2	1
12. でしゃばる人がいても、たしなめることができない。	5	4	3	2	1
13. たいした理由もなくかっとなることがある。	5	4	3	2	1
14. 挑発されたら、相手をなぐりたくなるかもしれない。	5	4	3	2	1
15. 私を嫌っている人は結構いると思う。	5	4	3	2	1
16. 人とよく意見が対立する。	5	4	3	2	1
17. 人をなぐりたいという気持ちになることがある。	5	4	3	2	1

	とてもよく当てはまる	どちらかと言うと当てはまる	どちらともいえない	どちらかというと当てはまらない	まったく当てはまらない
18. 人からばかにされたり、意地悪されたと感じることはほとんどない。	5	4	3	2	1
19. 権利を守るためには暴力もやむを得ないと思う。	5	4	3	2	1
20. 嫌いな人に出会うことが多い。	5	4	3	2	1
21. なぐられたら、なぐり返すと思う。	5	4	3	2	1
22. 自分の権利は遠慮しないで主張する。	5	4	3	2	1
23. 友人の中には、私のことを陰であれこれ言っている人がいるかもしれない。	5	4	3	2	1
24. かっとなって、物を壊したくなることがある。	5	4	3	2	1

◆あなた自身について、以下の 1. から 33. までのそれぞれの質問にお答えください。

	とてもよく当てはまる	どちらかと言うと当てはまる	どちらともいえない	どちらかというと当てはまらない	まったく当てはまらない
1. 平凡に暮らすより何か変わったことがしたい。	5	4	3	2	1
2. 物事がうまくいかないとイライラして、すぐ人に当たる。	5	4	3	2	1
3. 周りの人が何と言おうと自分の考えは押し通す方である。	5	4	3	2	1
4. 人に対して、疑い深いところがある。	5	4	3	2	1
5. 周りの人が敵に見えてしまうことがある。	5	4	3	2	1
6. どちらかと言えば活動的な方である。	5	4	3	2	1
7. 自分を傷つけたくなる時がある。	5	4	3	2	1
8. 親しみを寄せすぎる人には、警戒してしまう。	5	4	3	2	1
9. 無我夢中で乱暴な運転(車,バイク,自転車など)をしたいと思うことがある。	5	4	3	2	1
10. やりたいと思ったことは行動に移す方である。	5	4	3	2	1
11. 腹の立つ相手には、いやみとか皮肉を言ってやりたいと思う。	5	4	3	2	1
12. 批判や忠告をされると、内心恨んでしまう。	5	4	3	2	1

	とてもよく当てはまる	どちらかと言うと当てはまる	どちらともいえない	どちらかというと当てはまらない	まったく当てはまらない
13. 不愉快なことでも無理に我慢してしまう。	5	4	3	2	1
14. 腹の立つことをされると、にらみつけてやりたくなる。	5	4	3	2	1
15. 何かにつけ、心が傷つくことが多い。	5	4	3	2	1
16. 他人のことを、心から信頼することはできない。	5	4	3	2	1
17. 腹の立つことをされると、後々にまで根に持つ方である。	5	4	3	2	1
18. 自分はだめな人間だと思う。	5	4	3	2	1
19. 正しいと思うことは人に構わず実行する。	5	4	3	2	1
20. 他人に調子を合わせすぎて、疲れてしまうことが多い。	5	4	3	2	1
21. 特定の誰かが気に入らなくて、反抗的な態度を取ることがある。	5	4	3	2	1
22. 過去のことを振り返って後悔することが多い。	5	4	3	2	1
23. いろいろな世間の活動がしてみたい。	5	4	3	2	1
24. 自分と考えの合わない人のことを、心から受け入れることはできない。	5	4	3	2	1
25. すぐに相手の言葉尻をとらえて、つっかかってやりたくなる。	5	4	3	2	1
26. 何事にも恐れずに立ち向かっていく方である。	5	4	3	2	1
27. いつも何か刺激を求める。	5	4	3	2	1
28. 他人が不快そうにしていると、自分が悪かったのではないかと思う。	5	4	3	2	1
29. 自分の皮膚をかきむしりたくなる時がある。	5	4	3	2	1
30. めちゃくちゃな行動をしたくなる時がある。	5	4	3	2	1
31. 他人とのトラブルがあると、自分を責める方である。	5	4	3	2	1
32. 自分の髪を引っ張ったり、引き抜いたりしたくなることがある。	5	4	3	2	1
33. 自分のやりたいことに向かって突き進んでゆく方である。	5	4	3	2	1

お疲れ様でした。ご回答ありがとうございました。